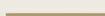




うつせみのあなたに
2023年5月

星野廉



目次

◆各記事の要約・抜粋	
*	3
05/01 What do you mean?	
*	15
05/03 連想でつなぐ、つぎつぎ	
*	23
05/04 出たものは「静止」してはいない	
*	29
05/05 あらわれるのです。	
*	35
05/06 石の意味	
*	41
05/07 a rolling stone	
*	47
05/08 宿を借りる生きもの	
*	57
05/09 言葉はどこから来る	
*	67
05/10 色のない景色	
*	75
05/12 意味の意味を広げる	
*	83
05/13 意味に意味を重ねる	
*	93
05/14 This Masquerade	

*	105
05/15 そっくりなのは、そっくりにつくってあるから	
*	117
05/17 人が「決める」、「決まる」は「あらわれる」	
*	133
05/18 「何か」に「何か」を当ててみる	
*	141
05/19 「かた」が「かたち」を「なす」さまが「あらわれる」	
*	153
05/20 人にあらわれて、機械にあらわれないもの	
*	161
05/21 言葉ではないものをさぐる	
*	171
05/22 気になること	
*	183
05/22 不思議なこと	
*	197
05/25 名詞に相当するものを自然界で見つけるのは難しい	
*	215
05/26 本物「感」と本物「っぽさ」こそがリアリティ	
*	227
05/27 岐路に立つ擬人	
*	237
05/28 【小説】幼なじみ	
*	263
05/29 もののあらわれ	
*	271

◆各記事の要約・抜粋

＊

＊ 05/1 What do you mean?

ジャスティン・ビーバーの歌った「What Do You Mean?」の歌詞は、言葉の意味にコンセンサスがない、早い話が言葉には意味がない、つまり言葉の意味は後付けで何にでもなるという、意味の本質を突いていると考えられます。

What do you mean? であって、What does it mean? ではないところが味噌です。言葉ではなく、人が主語です。意味は「言葉にある」のではなく、その時々自分の都合で「人が作る」とか「人が決める」という意味ですね。

もっとも、What do you mean? は「何て言いたいのか?」という語感なのですが、意味の本質を突いていると私は思います。要するに、意味とは「何を言いたいのか?」だとも言えそうです。言葉は文字どおりとか顔面どおりに使われないのが普通だからです。

「それはどういう意味ですか?」、「意味が不明なんですけど」、「それに意味ってありますか?」——このように日本語で「意味」という言葉を使うと角が立ちます。日本語の意味には意味以上の意味がありそうです。

詳しく言うと、たとえば「人生の意味」と「人生という言葉の意味」では意味が違いますが、そんな二つの意味の違いや両者の衝突も角を立たせる原因だと思います。意味とは、ある意味で特定の言語のローカルな問題なのです。

＊ 05/03 連想でつなぐ、つぎつぎ

人の作るもので線状であったり面状であったりするものがいかに多いことか。ストーリー（言葉）、メロディー（音声）、パターン（模様・映像）。そこにはモチーフ（動機）とテーマ（主題）とデザイン（構想）があります。広義の物語です。でたらめに進んだり広がるのではありません。

ところで、線と面の両方の要素と性質を兼ねそなえたものが「網・編み・ネット・ウェブ」なのではないでしょうか。そうであれば、最強最大最長の「のびる」であり「ひろがる」です。

ストーリー（言葉）、メロディー（音声）、パターン（模様・映像）、何でも乗せる・載せることができます。そこで保存され蓄積し蠢いているのですから、巣・窠・棲・栖でしょう。

* 05/04 出たものは「静止」してはいない

いったん「出た」ものは、何らかの運動に誘発されます。いったん「出た」給料も、給付金も、うんちも、保険金も、太陽も、月も、声も、にきびも、幽霊も、新刊書も、選挙候補者も、ドラマの役者も、家出したお父さんやお母さんやお子さんも、火も、くいも、そのまま静止し続けることはありません。

いったん「あらわれた」ものは「出た」ものとは異なり、静止したまましつこく居座ることも、往々にしてありそう。真価、効果、正体、正義の味方、英雄、悪の権化、〇〇の神様、救世主、影響、才能、成果、結果などです。影響や結果や効果みたいに「出る」とも言うものは概して「不安定」な気がします。

* 05/05 あらわれるのです。

出あってしまった。出あってしまうだろう。出あってしまうかもしれない。そんなことがあります。人をやっている以上は、あります。何かになんかを見る。これって、人である限り仕方がないみたいです。正々堂々と出あってしまえばいいのです。

出会ってしまったときの不安を薄めるための、おまじないの言葉があります。それは「あらわれる」です。「〇〇が出る・出た」、「〇〇が見える・見えた」の代わりに「〇〇があらわれる・あらわれた」と、するだけでいいのです。

「見える・見えた」が自分の責任なのかどうかは、誰にも分からないと思いますが、とにかく責任を転嫁するのです。それだけで、だいぶ気が楽になります。それは「出た」のでも「見えた」のでもなく、「あらわれた」のです。

* 05/06 石の意味

「石の意味」というフレーズを眺めているといろいろな思いが浮かびます。ああでもないこうでもない、ああだこうだ。そのうちに収拾がつかなくなります。要するに、文脈で「石の意味」が決まるということです。そう考えると「石というもの」が深くミステリアスで意味ありげに思えてきます。

同時に「意味というもの」もミステリアスで意味ありげ感じられていきます。大切なのは、石そのものに意味はなく、石に人が「意味」や「意味ありげ」を見てしまうこと、そして石は見たり手で触れるけれど、石の「意味」も「意味ありげ」も見えないし手で触ることもできないということでしょう。

* 05/07 a rolling stone

言葉は出るものであり、意味はあらわれるものだと思います。出た言葉に意味があらわれるのです。生（は）えてきた言の葉に色が浮かぶイメージ。意味は色なのでしょう。色は仮の姿であったり、まぼろしなのだという気がします。

色はそれだけでは「いる」ことも「ある」こともできないから、いたりあったりするものに浮かぶ。その意味で、意味があらわれるのは言葉にだけではなく、森羅万象にあらわれるのです。その意味で、意味は宿を借りる生きものなのかもしれません。

そう考えると、人が森羅万象の代わりに持ち歩く（ポータブルな）意味の居場所、それが言葉なのかもしれません。その言葉もまた、仮の宿であるはずです。

* 05/08 宿を借りる生きもの

いま複製が主流になった言葉が残って増えつつけているわけですが、これは意味が残って増えつつけているとも言えるのではないのでしょうか。言葉と意味の関係は、いろいろな見方でとらえることができるでしょう。

- ・意味は言葉の主（あるじ）であり、言葉は意味の僕（しもべ）である。
- ・意味は言葉に寄生している。
- ・意味は言葉に宿っている。
- ・見えない聞こえない意味は、見えて聞こえる言葉にあらわれる。
- ・人に見えない聞こえない意味が、人に見えて聞こえる言葉に宿っているのは、言葉を媒体にして、視覚と聴覚に優れた人という生きものに寄生しているからだ。

* 05/09 言葉はどこから来る

いまこの文章を書いているさなかの私は「まだ言葉ではないもの」と、パソコンのディスプレイ上に浮かんでいる「書いた言葉」のあいだで、さまよっている気がします。

パソコンに向かっているいまの自分を観察していると、「まだ言葉ではないもの」とは、言葉の断片であったり（文字のようなもの、音声のようなもの、表情や身振りのようなもの）、言葉の断片にまではいかない曖昧なものであったり、断片的な模様や風景（視覚的なイメージ）であったりします。

文字を入力し、その結果がディスプレイ上に「あらわれた」時点の自分を観察すると、内なる文字なり声がほぼ完成していると感じる場合——「まだ言葉ではないもの」が文

章になったという達成感——と、まったく文字や声を意識していない場合——なぜか書けてしまったという「あれよあれよ」感——があります。

* 05/10 色のない景色

「景色から色が消える。」という、フォロワーのゼロの紙さんの言葉を読んだとき、「色」とは意味なのではないかと思いました。世界は見えている、おそらくはっきり見えている。それなのに色がなく、色が感じられないとすれば、それは世界から意味が消えているのではないのでしょうか。

「景色から色が消える。」を文字どおりに取ってみましょう。「景色」という文字列から「色」という文字を消してみます。すると「景」が残ります。

「景」は「かげ」とも読めます。影と同じく「姿・形」という意味があります。「目に映るもの」とも言えるでしょう。ゼロさんの文章では「世界」です。意味の欠けた世界なのです。「景色から色が消える。」というゼロさんの言葉は、きわめて危うい心境を感覚的かつ簡潔に言いあらわしていると思います。

* 05/12 意味の意味を広げる

意味は言葉とセットになっていると考えられていますが、固定を指向する言葉——文字・印刷・複製、録音、録画——と異なり、意味は動きであり、形や姿が明確ではなく、つねに「うつろいつづけている」と考えられます。

共同体や集団で共有される（固定を指向する）ものだけが意味ではないのです。だから、言葉の意味をめぐる擦った揉んだが絶えないと言えますが、これは悪いことばかりではありません。

言葉の意味は、ある時代のある時期の特定の集団や個人の辻褄合わせのためにあるのではないのです。ローカルでプライベートなものとして、意味はつねに個人である人びとの中で「生きつづけている」。これが言葉の意味の原点であるにちがいません。

* 05/13 意味に意味を重ねる

意味は意味ありげですが、「意味ありげ」では、「意味」ではなく「ありげ」に意味があるのです。「ありげ」が命であり、「意味」は刺身のつまという意味です。意味とは「ありげ」——「有りげ」の語義は「ありそうなさま」だそうです（広辞苑）——だと言えば分かりやすいかもしれません。大切なのでくり返します。「意味ありげ」の「意味」は刺身のつまです。「意味」はころころ変わりますが、「ありげ」はしつこく居続けます。

たぶん、「ありげ」は仕組みなのです。どうにもならない仕組みであり仕掛けです。

* 05/14 This Masquerade

意味という言葉には、「言いたいこと・意図」と「大切さ・意義」の二つの語義（意味）があると単純に考えましょう。意味という言葉を使うと角が立つことがあります。それはこの二つの意味がからみあってそうなっている場合が多い気がします。

A：「それ、どういう意味？」、「何が言いたいなの？」

この二つは言い方次第で角が立ちます。言われたほうは、むっとするでしょう。

B：「その意味については、いろいろ考えているのですけど」、「おっしゃったこと（お言葉）について、ずっと考えております」

丁寧に言うことでいくぶん柔らかく響きそうですが、Bの例では、「言いたいこと・意図」を「大切さ・意義（価値）」へと移していることに注目してください。「言いたいこと・意図」が「ずっと（いろいろ）考える」行為によって「大切なこと・意義」に変わるというマジック（レトリック）です。

* 05/15 そっくりなのは、そっくりにつくってあるから

ヒトは世界や森羅万象に似ていたり、そっくりな「影」（映したり写したもの）を自分でつくって、「そっくり」を楽しむ快楽を覚えました。現物や実物や「そのもの」にたどりつけない代償でしょう。

「移る・移す」（移動する・させる）ことができないから、その代わりに「映す・映る」と「写す・写る」で済ますという仕掛け（機械）＝仕組み（システム）＝手品（錯覚製造装置）をつくったのです。

絵、文字、印刷、電話、映画、動画、インターネット、要するに複製（「似ている」と「そっくり」）とその拡散のことです。

* 05/17 人が「決める」、「決まる」は「あらわれる」

「決める」は人為、「決まる」は人の領域ではない。そんな気がします。「決める」は人為とは、人が決めるという意味です。「決まる」が人の領域ではないとは、ややこしいですね。言い換えてみましょう。非人称的とか、ニュートラルに近い気がします。

「人の領域ではない」を「神や超越者のすること」としても大差はないと思います。「○○だ」と私が決めたのだ」なんていけしゃあしゃあと口にできる人は、失うものが

何もない人か、最高権力者（きどりでもいいです）のどちらかでしょう。人を超えたものに対する気兼ねも畏敬の念もないわけですから。

*** 05/18 「何か」に「何か」を当ててみる**

かた、形、型——。たとえば、「かた」という音に、「形」や「型」という文字を当てる。なるほど…。一瞬「当たった」つまり「つながった」という感じがします。じっくりするし、「その通りだ」と得心してしまうのです。でも、「つながった」のでしょうか。「つながり」なののでしょうか。

「何か」に「何か」を当てる——。この場合の前者と後者の「何か」は、そもそも「何か」に「何か」を当てた結果としての「何か」であることに気づきます。「かた」と「形・型」のことです。「つながった」のか、「当てた」結果として「つながっている」ように見えるだけなのか、その「つながり」加減が不明なのです。

和語である「かた」も漢字・漢語である「形・型」も自明なものではなく、何に何を当てた（つなげた）のかが不明だという意味です。言葉の中に言葉があり、言語の中に言語があるために、こうした「当てる（つなげる）」行為ができるのですが、不明なものに不明なものを当てている（つなげている）と言えます。

*** 05/19 「かた」が「かたち」を「なす」さまが「あらわれる」**

かた、形、なり、形・態、形態、なす、成す、形を成す、形成。

上の文字列を左から右に、そして右から左に読んでいくと、その展開にはっとします。わくわくするのです。

おそらく「言葉ではないもの」に、音、文字、意味、イメージを交互に当てている気がします。それが「かた、かたち、形」になっていくのです。そのさまが上の文字列に「あらわれている」とか「起きている」ように見えるのかもしれませんが。

和語の「かた」を漢字・漢語の「形」に当てる。「形」を和語の「なり」に当てる。「なり」を漢字・漢語の「形・態」に当てる。「形・態」をくっつけて、漢語の「形態」に当てる。「形態」を「なす」と読む。「なす」に「成す」を当てて、「形を成す」とずらす。それを「形成」と読む、ずらす、当てる。

そんな感じです。

*** 05/20 人にあらわれて、機械にあらわれないもの**

形になる、形をなす。形があらわれる——。

機械は「形になる」と「形をなす」を文字どおりにとらえるのかもしれませんが。形は機械に対して「あらわれる」なんてことはないという意味です。

どうやら、人にあらわれて、機械にあらわれないものがありそうです。ところで、猫はどうなのでしょう。猫を観察していると、猫にあらわれて、人にはあらわれないものがありそうです。というか、人のギャグは猫に通じないのですが、猫のギャグも人に通じていない気がします。

猫は猫の夢を見るのでしょうか。機械は機械の夢を見るのでしょうか。こんなたわごと（ギャグ）は猫にも機械も通じそうもありません。人にあらわれているだけでしょう。

* 05/21 言葉ではないものをさぐる

「形・姿・型・語る・固い・固まる」の「かた」も、「片言・片向く・傾く・片寄る・偏る・片方・夕方」の「かた」も、言葉ではないものとか、言葉にする前のものとか、言葉が消えかけたものと言ったほうがよさそうです。断片的で取り留めも取っ掛かりもないからです。

それでいて、「かた」という二音と二文字に、なにか目や芽のようなものを感じるのは、それが言葉の欠片（かけら）であり、言葉の跡形（あとかた）だからでしょう。半端な形で言葉をひきずっているのです。気配をイメージすると分かりやすいかもしれません。言葉の気配という感じです。

「かた・形」と「かた・方」がそれぞれ、「言葉ではないもの」の気配を漂わせたり、「言葉にする前のもの」を引きずっていたり、「言葉が消えかけたもの」の跡を留めているとするなら、両方の要素や属性を備えているとか、どちらでもない要素や属性を帯びているとか、見方しだいで何にでも見ることがあっても、不思議ではない気がします。

* 05/22 気になること

大したことではないのかもしれませんが、ささいなことにこだわる性分なので、気になっていることがあります。

大ごと、小ごとのことなのです。

こう書けばなんでもないので、大事、小言と書くと大ごとです。少なくとも私にとっては大きなことなのです。こういうことをわざわざ言いたても、いいことはこれっぽっちもないのです。ことさら言挙げをしてもいいことはない。

ことあやまりとことあやまりも気にかかってなりません。

言誤りと事誤りです。この二つは広辞苑では隣り合わせになっていて言のほうが先に載っています。はじめに言葉ありき。

言誤りは、言いあやまり、言いそこない、事誤りは、事のまちがいがい、事のゆきちがいがい、

過失、と広辞苑では言い換えてあります。いいかげんなものです。けちをつけているのではありません。殊のほか殊さら、いい加減なのです。

* 05/22 不思議なこと

こと・koto。たった2音節の短い語でありながら、いろいろな語義があります。辞書では、短い語ほど長い解説がある。以前に、ここでも何度か触れたことです。そうした不思議なことについても、以下に書いてみるつもりです。あえて考えなければ、それまでのこと。いざ、考えてみると不可解。まことに、不思議なことなのです。

***人は一貫して呪術の時代に生きている（05/22「不思議なこと」に挿入した書下ろしです）**

最近、AIや生成AIや、その生成したものに心や感情や魂があるとかないとかいう議論を見聞きしますが、あるに決まっています。そもそも自然にある森羅万象はもちろん（擬人のことです）、人が自分でつくった人形（ひとかた）や像や言の葉や文字（もんじ）に、心や感情や魂を込めたり読みこんできた人類は、太古から現在に至るまで一貫して呪術の時代に生きているからです。

そんなふうにとっぷり呪術に浸かって生きていながら、何をいまさら心がないだの、感情を感じられないだの、機微が理解できないだの、魂がないなんて言えるのでしょうか。

心も感情も魂も命も人が勝手に人以外のものに自分の都合で込めているのであって、森羅万象にも、人形にも像にも言の葉にもデジタル化された情報にも、AIや生成AIやその産物にも、罪はないのです。

* 05/25 名詞に相当するものを自然界で見つけるのは難しい

名詞は、不自然で人工的です。名詞に相当するものを自然界で見つけるのは難しいのではないのでしょうか。観念だからです。ないのです。だから、見えません。あるものもないもの、見えるもの見えないもの見境なく「名づけた」結果なのです。その意味で、ひょっとすると名詞は不自然どころか反自然なのかもしれません。

そもそも「名づける」とは、自然と向きあう人間が恐怖と不安を解消しようとして「手なづける」ためにおこなっている操作なのであり、人の心理的な動機から生じた処理法だとも言えるでしょう。人の都合で、代理である表象（言葉、イメージ、映像、象徴、記

号など)をもちいて名づけている(手なずけている)にすぎません。

言葉を持ってしまっただけでも大事件だったのに、人は文字まで持ってしまいました。無文字という選択肢もあつたはずなのにです。話し言葉は消えますが、文字はしつこく居残り残ります。まるで名詞みたいじゃないですか。人は文字を手にして、さらに固定化を指向するようになった気がします。人類の言葉化、名詞化、文字化が進行しています。人は言葉に擬態しているのです。人のつくったものに人は似ていく。そんなふうに見えるてなりません。

* 05/26 本物「感」と本物「っぽさ」こそがリアリティ

世界や森羅万象と無媒介的に触れあっているのではないため、本物には届きません。時間をさかのぼることはできないので、起源を知ることにはできません。自分を納得させるためには、本物も起源も、言葉で「こしらえる」しかないわけです。

本物感、本物っぽさ、本物のようなもの、起源感、起源っぽさ、起源のようなもので我慢するのは、それしか方法がないからです。このことを人は意識しないで知っています(たぶん学習した知識ではないでしょう)。意識するとがっかりきてやる気をなくすでしょう。生きる気力を失うかもしれません。

大切なのは、本物「感」、本物「っぽさ」、本物「のようなもの」、起源「感」、起源「っぽさ」、起源「のようなもの」です。「感」、「っぽさ」、「のようなもの」という意味です。これこそが(つまりこれだけが)、人にとってのリアリティです。

* 05/27 岐路に立つ擬人

擬人、人に擬する、人になぞらえる、人を当てる、人に似せる、人に当たる、人をなぞる、人に似る、人間っぽく振る舞う、人らしさを学習する、人間もどきを演じる、擬人の代理をする、人を装う、人になりすます、そのうち人になりきる——擬人の達人、擬人の代理人があらわれたのです。機械ですけど。

人類は擬人のお株を奪われつつあるのです。擬人という人類のお家芸を死守しなければならぬのですが、なかなか妙案が浮かばない。このままでは、軒を貸して母屋を取られる事態になりかねない。それを薄々感じはじめてしぶしぶ認めだした人類は、いまのところ妬み忌み嫌い憎み憤り怯える狼狽える馬鹿にする威張る拗ねるといふきわめて人間的で人道的な(同族に対するのとそっくりな)リアクションに甘んじています。手をこまねいているのです。

擬人と呪術は岐路に立っているのです。

人ではないものが人に擬して擬人をする。このギャグの観客が人だけであることを人の端くれとして願わずにはいられません。

※ 05/28 【小説】幼なじみ

午前中に映画を見終わり、児童たちは学校にもどりました。給食の時間が過ぎ、午後からは映画の感想をクラス内で話し合う特別授業になりました。

いい映画だった。いろいろな動物たちが出てきて楽しかった。出てきたうちではお母さんライオンがいちばん好きだ。絵がきれいだった。動きが自然で感心した。意地悪な人間が出てきたのが嫌だった。なかには悪い動物もいたけど、やさしい動物がたくさんいて感動した。あんな世界で暮らしてみたい。

クラスの児童たちの口からは、だいたい以上のような感想が出ました。ある子が挙手もせず着席したまま、こんなことを話し始めました。

「動物なんて一匹も出なかった。全部、人間みたいだった。だって——」

教師はその子の発言をさえぎりしました。

※ 05/29 もののあらわれ

私にとって、「もののあらわれ」と、一字（一音）違いの「もののあわれ」とはかなり違っています。むしろ「もののけ・物の怪」に近いのです。

「物の怪」は、広辞苑では「死霊・生霊などが祟（たた）ること。また、その死霊・生霊。邪気。」と説明されています。恐ろしいですね。共同体に共有されているイメージの怖さを感じます。同時に、共有されたイメージには安心感も覚えます。「みんなのもの」だからです。

一方、私の言う「もののあらわれ」は個人的なものです。ある意味孤立無援。自分にしか受けない孤独なギャグに似ています。この「もののあらわれ」みたいに。

「もの」が何らかの意味とかメッセージとかイメージのようなものを持って目に「見えてくる」という感じ。音やにおいや感触や味として「あらわれる」のも有りです。あと気配も有りです。自分でつくった言い回しに「有り」だなんて、世話ないですよ。自分でもそう思います。

05/01 What do you mean?

＊

What do you mean?

星野廉

2023年5月1日 12:13

今回も前に書いた記事へのツッコミというか、連想でつなぐというか、しりとりみたいにつなげてみます。

以下の見出しの文章「意味が不明、コンセンサスがない」は「言葉は声と顔が命、意味は二の次」という記事からの引用です。この文章につなぐ形で記事を書いてみます。

大型連休でみなさんお休みでしょうから、今回の記事は短くいきます。

目次

意味が不明、コンセンサスがない

What do you mean?

言葉は文字どおりには使われない

意味が不明、コンセンサスがない

人はまず○△Xという言葉をつくり、次に「○△Xとは何か？」とえんえんと思い悩む生き物である。

無数の○△Xたちがあり、その内容つまり意味をめぐってのすったもんだが繰り返されてきて、いまも繰り返されている。

大昔の○△Xたちについて意味が不明になっているとか忘れていたのならまだいいです。

いまつかわれている○△Xたちについて、同時代人たち、同じ言語を話すはずの人たちのあいだで、コンセンサスがあるようでないようなのです。

たとえば、「正義」という言葉ですが、相手がどういう意味で使っているのかはつねに不明なのです。

辞書なんか当てになりません。議論の最中に辞書を取りだしたら、相手に笑われます。笑われたら、もう負けたようなものです。

＊

他の例を挙げます。

「真摯に」が「テキトーに」であったり、「スピード感をもって」が「のろのろと」であったりするのは、みなさんがご承知のとおりです。「分かった」が「分からない」、「承知しました」が「知るもんか」だなんて、当たり前ですね。

ある場面では、「だめよ、だめよ」が「いいわ、いいわ」、「ぜったいにいや」が「もっともっと」だったりもします。政治の世界がそうです。ビジネスの世界もそうでしょう。もちろん、日常生活でも。

What do you mean?

その意味で、ジャスティン・ビーバーの楽曲「What Do You Mean?」の歌詞は、言葉の意味にコンセンサスがない、早い話が言葉には意味がない、つまり言葉の意味は後付けで何にでもなるという、意味の本質を突いていると考えられます。

このタイトルは英語でよく使われるフレーズですが、What do you mean? であって、What does it mean? ではないところが味噌です。このように尋ねられた相手はふつう、

I mean ... (It means ... ではなく) と答えることになります。

言葉ではなく、人が主語です。

意味は「言葉にある」のではなく、その時々自分の都合で「人が作る」とか「人が決める」という意味ですね。

<https://www.youtube.com/watch?v=yR74fQILpCY>

What Do You Mean? (2015) Justin Bieber

言葉は文字どおりには使われない

もっとも、What do you mean (by ○○) ? は、「あなたは (○○って言ってるけど) それで何て言いたいのか?」という語感なのですが、意味の本質を突いていると私は思います。

要するに、意味とは「何を言いたいのか」だとも言えそうです。言外のメッセージという言い方もできるでしょう。言葉は文字どおりとか額面どおりに使われないのが普通なのです。

言葉を文字どおりに使っていらっしゃいますか? 辞書をつねに参照なさっていますか?

以上の二つの問いに対する私の答えは、「いいえ」です。そんな素晴らしい記憶力は持ち合わせていないし、辞書を持ち歩くのは不便なので.....。

*

「それはどういう意味ですか?」、「意味が不明なんですけど」、「それに意味ってありますか?」

そもそも日本語で「意味」という言葉を使うと角が立ちます。日本語の意味には意味以上の意味がありそうです。(英語でも言い方次第ではそうなりますけど。)

意味とは、ある意味で特定の言語におけるローカルな問題なのです。

たとえば、日本語では「人生の意味」と「人生という言葉の意味」では意味が違いますが、そんな二つの意味の違いや、二つの意味のあいだの衝突も角を立たせる原因だと思えます。(英語の meaning にもその二つの意味があります。あと、英語では日本語の意味に相当する意味のある sense という語がありますね。ナンセンスのセンスです。他の言語のことは知りません。)

(※なんでこうなるのかというところたとえば意味に複数の意味があって人が混乱するという話ですけどー、一つには、言界(言葉の世界)は減界(分けると増えると減るが同時に起きる世界)であり、それが言界の限界でもあるからです。簡単に言うと、世界を記述するには言葉がつねに足りないのです。かといって、言葉を分けて増やすと一方で足りなくなる=減るものがあり、人は混乱におちいります。人にも言葉にも限りがあるという意味です。)

＊

意味という言葉を使わずに、

「あなたは、そんなことを言っているけど(しているけど)何を言いたいわけ？」

と尋ねられたら、

「あなたの気を引きたいだけです」とか「お金がほしいのです」とか「そこをどいてほしいんだ」とか「疲れているの」とか「機嫌が悪いだけ」とか「ああ、かったるい」とか、思わず本音が出そうですね。

とはいうものの、何を言いたいが不明や不在であったり、言っている本人に意図や本音がなかったりする場合も意外と多いのですが、話が長くなりそうなので、このことについては機会をあらためて書きます。

＊

意味や言いたいことは見えない。見えないものは確認できない。だから、見える文字や数字や記号や映像で代用するしかない。代用しているものを扱っているあいだに、意味や言いたいことを扱っていると錯覚するケースはきわめて多い。それである程度の実務的な処理や作業ができるために、錯覚は見逃される。錯覚を指摘しても、いいことはひとつもない。目に見えない意味を扱おうとすれば必然的に迷宮や迷路に入ることになる。出口は錯覚しかない。というか、心が壊れないために人は錯覚する。

以上述べたことは、意味について考えるさいには、心に留めておいてもいいだろうと私は思います。

＊

歌に戻ります。

個人的には以下のライブの動画が好きです。この歌の入ったアルバムがリリースされた日の映像だそうです。

野外で景色がいいし、コンサートの規模もこれくらいだと親近感を覚えます。

好きなシーンがあるので。

歌が始まってすぐ 0:52 あたりで、バックの大型スクリーンの向こうを警備の人が左から右へと歩いて行く様子が見えます。ほのぼのとした雰囲気、そこだけリピートして何度見たか知れません。

<https://www.youtube.com/watch?v=S9MGgrNSV0Y>

What do you mean by 'What do you mean?'

(投稿：2023年5月1日 12:13)

#言葉 #音 #音声 #文字 #意味 #無意味 #本音 #刺身のつま #音楽 #洋楽 #ジャスティン・ビーバー #歌詞 #日本語 #英語

05/03 連想でつなく、つぎつぎ

＊

連想でつなぐ、つぎつぎ

星野廉

2023年5月3日 14:10

たぶん、コマ送りやバトンを手渡すように、つぎつぎ＝継ぎ継ぎ＝接ぎ接ぎ＝注ぎ注ぎ＝告ぎ告ぎと連なっていくのでしょう。すると、筋書き、つまり物語とドラマが生まれます。

映画や漫画やアニメのコマ送りという原理が、これでしょう。

私は詳しくないのですが、音楽も、余韻や予感や必然性や筋をはらんだ音が、つぎつぎ＝継ぎ継ぎ＝接ぎ接ぎ＝注ぎ注ぎ＝告ぎ告ぎと連なっていく気がします。

(拙文「心が壊れないために何かに何かを見てしまう」より)

目次

つぎつぎ

コマ送り、流れ、模様

線、面、網

つぎつぎ

つぎつぎ＝継ぎ継ぎ＝接ぎ接ぎ＝注ぎ注ぎ＝告ぎ告ぎ。

「継ぎ継ぎ」は、テレビの中継のようです。リレーしてつなげる。つなげる・つながる。つらねる・連ねる・列ねるで、英語の train (列のイメージ) にもつながります。

「接ぎ接ぎ」だと、『フランケンシュタイン』を連想します(もちろん名のない怪物のほうです)。接ぐのは線だけでなく、継ぎ合せて継ぎ接ぎしていくパッチワーク、つまり線から面につなぐこともできそうです。

「注ぎ注ぎ」を「そそぎそそぎ」と読むと、雨水があちこちから川に注ぐ、また川が川に注ぎこむさまが頭に浮かびます。このもようは、見方を変えると、木の枝が茂る形や、根や根茎が地中で伸びるさまのようです。「しげる・繁茂」や「はびこる・蔓延」というイメージ。

「告ぎ告ぎ」は、さしずめ糸電話や伝言ゲームでしょうか。つぎつぎとメッセージや命令を伝えていく動きに見えます。「伝わる・伝える・伝達」と「広がる・広げる・広まる・拡散」です。空間的な告ぎ告ぎは、時間的な継ぎ継ぎへと——伝達から継承へと——容易につながります。

コマ送り、流れ、模様

「つぎつぎ」はぺらぺらした薄いものであれば「ぼたぼた」、流れる液体であれば「ちょろちょろ」とか「どくどく」という感じがします。

要するに、コマ送りや流れなのですが、これには区切りや堰（せき・せく・堰く・塞く）があります。「ぼた/ぼた」「ちょろ/ちょろ」「どく/どく」の「/」が区切りであり「せき・せく」です。セクションとか「せつ・節・ふし」という感じ。

区切りは規則的であったり、断続的であったりするのでしょうか。それがリズムや節や旋律なのかもしれません。

区切りが線状に進むのではなく、平面に展開するのであれば模様になるはずです。いびつな染みのような模様もあれば、規則性のある、または人にとって意味のある形を帯びることもあるでしょう。

いずれにせよ、伸びる・延びる・展びる、広がる・拡がる・展がる。線として進む、面として行き渡る。

線、面、網

人の作るもので線状であったり面状であったりするものがいかに多いことか。その線の流れも、面の広がりもけっして一様ではなく、線にはところどころに節目があり、面にはあちこちに皺（しわ）や畝（うね）があって、それらがつぎつぎと現れてや、波やパターンをなすようです。

線と面——。ストーリー（言葉）、メロディー（音声）、パターン（模様・映像）。そこにはモチーフ（動機）とテーマ（主題）とデザイン（構想）があります。広義の物語です。でたらめに進んだり広がるのではありません。

ところで、線と面との両方の要素と性質を兼ねそなえたものが「網・編み・ネット・ウェブ」なのではないでしょうか。そうであれば、最強最大最長の「のびる」であり「ひろがる」です。

ストーリー（言葉）、メロディー（音声・振動）、パターン（模様・映像）、何でも乗せる・載せることができます。そうしたものたちすべてが、そこに保存され蓄積し蠢いているのですから、そこは巢・窠・棲・栖と呼んでもいいでしょう。

人の作ったものでありながら、節や堰や皺や襞や畝が無数に存在する、この迷宮か魔窟のような巢の実体と実態を把握している人はいないにちがいません。

（投稿：2023年5月3日 14:10）

#連想 # 伝達 # 継承# インターネット # 網 # 物語 # 旋律 # 映画 # アニメ # イメージ

05/04 出たものは「静止」してはいない

＊

出たものは「静止」してはいない

星野廉

2023年5月4日 09:22

目次

静止と運動

言葉とうんち

静止と運動

言葉とうんちの共通点について考えてみましょう。

言葉とうんちは共に、体にある穴から出てくる。これは確かなようです。口と肛門という穴は、人間およびほかの多種多様な生き物にとって、生存するためには不可欠とも言える器官です。

「阿吽=あうん=あーん=あーむ」の「あ」が口だとすれば、「ん=む」は肛門にたとえてもよろしいかと思います。人間は「あー」と産声をあげ、「ん」とか「む」という口の形をして「なくなる=亡くなる=無くなる」。

肛門から出たものが土や水に返り、生命の一部となり、その生命が口に入る。そして、また出る。こうなると、人間だけの話ではなく、この惑星の生態系レベルの、壮大で美しく神秘的でもある「叙事詩=フィクション=お話=作り話」につながりそうです。あな、不思議。anananananana……。まあ、不思議。mamamamamam……。まま、まんま、まー、まーむ。ままー、まんま。とめてくれるな、おっかさん。南無。

＊

で、肛門から出てくるうんちですが、個人的には次のようにイメージしております。

・「自分」と「他者＝世界」の「間（＝ま・あいだ・あわい）」で、ぶかぶかと浮いている。

・「出る」とは、「出た」後には、「ぶかぶか浮いている」状態に落ち着く。

このイメージにおいては、躍動感までは行かない浮揚感（＝運動）つまり「ぶかぶか」が非常に重要です。

・出たものは「静止」してはいない。

この点に、注目していただきたいのです。「でる・出る」に似た言葉で「あらわれる・現れる・表れる・顕れる」があります。でも、両者は微妙に異なっているようです。まず、「出る」から、具体的に見ていきましょう。次に「〇〇は出る」という言い方をする「〇〇」を挙げ、いったん「出た」後にどうなるかを考えてみましょう。

いったん「出た」ものは、必ず、何らかの運動に誘発されます。たとえば、いったん「出た」給料も、給付金も、保険金も、うんちも、太陽も、月も、声も、にきびも、幽霊も、新刊書も、選挙候補者も、テレビドラマの役者も、家出したお父さんや、家出したお母さんや、家出したお子さんも、火も、くいも、そのまま静止し続けることはありません。

一方、「〇〇はあらわれる」という言い方をする「〇〇」を挙げ、いったん「あらわれた」後にどうなるかを考えてみます。

いったん「あらわれた」ものは、「出た」ものとは異なり、静止したまましつこく居座ることも、往々にしてありそうなのです。真価、効果、正体、正義の味方、英雄、悪の権化、〇〇の神様、救世主、影響、才能、成果、結果などです。もっとも、影響や結果や効果みたいな、「出る」とも言うものは、概して「不安定」な気がします。

言葉とうんち

いったい、何を言いたいのかと申しますと、次のようになります。

・言葉は、うんちにきわめてよく似ている。

言葉とうんちについて、特に重要だと思われる共通点を挙げます。

1) 「あらわれる」のではなく、自らの意思で「出した」結果「出る」ものである。

2) いったん出た後には、長い目を見た場合、じっと静止していることなく、ぷかぷか浮遊するという運動に至る。(※「うんちの化石をテレビで見たぞ」というお言葉に対しては、たとえ、静止して化石化するとしても、化石に至るまでには内部で化学反応など分子レベルや原子レベルでの「運動」が生じるという屁理屈を用意いたしました、念のため。)

3) 出た後の「浮遊＝液化＝気化＝運動」は、「宙ぶらりん状態＝宇宙を支配する偶然性」とほぼ同義である。簡単に言うと、どうなるかは未定の状態に置かれるという意味です。行方不明にもなり得ます。

4) 人は誰もがうんちをし、また、誰もが広義の言葉を発するという意味で、うんちも言葉も、ヒトという種におけるの普遍性をそなえている。【※「広義の言葉」としたのは、言葉は話し言葉だけに限らなく、手話、ホームサイン、点字、指点字、表情、目くばせ、合図、仕草なども含むという意味です。】

5) ぐちゃぐちゃごちゃごちゃしている。

以上五つの点が、共通しているように思われます。

参考記事

言葉とうんちと人間（言葉編）

げんすけ 2020/08/16 11:26 「ぐちゃぐちゃごちゃごちゃ」について書いてみようと思います。「ぐちゃぐちゃごち

bloggpostings.blogspot.com

言葉とうんちと人間（うんち編）

げんすけ 2020/08/17 11:22 前回の後半で、次のように書きました。＊「口から出てきた音（=おん）=言葉」

bloggpostings.blogspot.com

言葉とうんちと人間（人間編）

げんすけ 2020/08/18 11:27 言葉とうんちが似ているように、言葉とうんちと人間は似ている。今回は、そういう

bloggpostings.blogspot.com

【小話】出たものは「静止」してはいないという話 - 星野廉の夜話と小話と「言葉は魔法」言葉とうんちの共通点について考えてみましょう。言葉とうんちは共に、体にある穴から出てくる。これは確かなようです。口と肛門

horensou.hatenadiary.jp

(投稿：2023年5月4日 09:22)

#言葉 # うんち # 運動# 静止 # 日本語 # 出る # 現れる # 他者

05/05 あらわれるのです。

＊

あらわれるのです。

星野廉

星野廉

2023年5月5日 08:12

やっぱり見えます。人の顔です。似た人を知っています。何をめているのかと申しますと、天井の染みなのです。二十年以上前から、そこにあります。何度見たか知りません。やっぱり見えます。見ないつもりでも、見てしまいます。

よく考えれば、テレビも、映画も、写真も、絵も、パソコンのモニターも、「それ」そのもの」ではないにもかかわらず、「それ」を見てしまうという錯覚を利用したものです。でも、それは意図的にそうなっているのであって、不意に出あってしまうという体験をしているわけではありません。

それなのに、出あってしまう。出あってしまった。出あってしまうだろう。出あってしまうかもしれない。そんなことがあります。人をやっている以上は、あります。何かに何かを見る。これって、人である限り仕方がないみたいです。ネガティブに、つまりマイナス思考で、とらえることはないのです。

たとえ、不意をつかれたとしても、正々堂々と出あってしまえばいいのです。

そういう体験の恥ずかしさや後ろめたさやかっこ悪さや不安を、薄めるためのいい言葉、つまりおまじないの言葉があります。それは「あらわれる」です。

「〇〇が出る・出た」とか、「〇〇が見える・見えた」の代わりに「〇〇があらわれる・あらわれた」と、するだけでいいのです。「見える・見えた」が自分の責任なのかどうかは、誰にも分からないと思いますが、とにかく責任を転嫁するのです。

それは「出た」のでも「見えた」のでもなく、「あらわれた」のです。思うだけでなく、ちゃんと声を出して唱える。それだけで、だいぶ気が楽になりませんか？

このように言葉は、ときとして人を助けたり救ってくれます。あの天井の染みのなかに見える人の顔は、「あらわれている」のだ。そう思うと、気持ちがいくぶん、やわらぎます。

ところが、同時にぞくっとくるのです。こっちに落ち度はない。責任はない。そこまではないです。じゃあ、なぜ？ でも、なぜ？ なぜ、「あらわれる」の？

責任だか何だか分からないものを転嫁した、つまり押し付けたのはいいけれど、その「押し付けられたもの」あるいは「押し付けたこと」が気になってくるのです。なぜ？ どうしてなの？ 何が起こって、そうなっているわけ？

こういうことは、深く考えることではなさそうです。考えてみても、いいことなど、これっぽっちもないみたいだからです。だから、安心してください。あなたに責任はありません。

あらわれるのです。

*

本記事は「やっぱり見えます。」に少しだけ加筆して再投稿したものです。

「やっぱり見えます。」は以下の連載の冒頭に加筆したものです。しばらく、「あらわれる」について考えてみたいので、以前にnoteで連載した記事（アカウントは削除していまはありません）のバックアップへのリンクをここに貼ります。

あらわれる・あらわす (1)

星野廉 2020/09/19 08:09 フォローする やっぱり見えます。人の顔です。似た人を知っています。何を見ている

bloggpostings.blogspot.com

あらわれる・あらわす (2)

星野廉 2020/09/19 08:16 フォローする 赤ちゃんって、生まれた時には、きっとびっくりしているでしょうね。

bloggpostings.blogspot.com

あらわれる・あらわす (3)

星野廉 2020/09/19 08:26 フォローする 米国の金融の中心は、今やニューヨークではなくワシントンです。とい

bloggpostings.blogspot.com

あらわれる・あらわす (4)

星野廉 2020/09/19 08:33 フォローする うんちについて、考えていました。で、その兄弟姉妹である「うんこ」

bloggpostings.blogspot.com

あらわれる・あらわす (5)

星野廉 2020/09/19 11:16 フォローする このところ、赤ちゃん関連の記事を書いていたので、赤ちゃんを見かけ

bloggpostings.blogspot.com

あらわれる・あらわす (6)

星野廉 2020/09/19 13:26 フォローする 前は坂田利夫さんについて書きましたので、今回は、高倉健さんと、

bloggpostings.blogspot.com

あらわれる・あらわす (7)

星野廉 2020/09/19 13:35 フォローする 想像してみてください。この地球上で、現時点に、あなたのことを想っ

bloggpostings.blogspot.com

あらわれる・あらわす (8)

星野廉 2020/09/19 13:41 フォローする 本日は、とちくるわせていただいてよろしいでしょうか？ えっつ？

bloggpostings.blogspot.com

(投稿：2023年5月5日 08:12)

#顔 #責任転嫁 #現れる#似ている #錯覚

05/06 石の意味

＊

石の意味

星野廉

2023年5月6日 07:59

目次

短いと長い

〇〇さんが語る

ミステリー、ミステリアス

短いと長い

石の意味。

上のフレーズを見ていると、いろいろな思いが浮かびます。フレーズやセンテンスは、短いほど長いからです。短いほど、さまざまな推測や連想が起きて、それを見ている人の思いは重くなります（重い思いは、主おもに表おもてや面おもにあらわれます）。

単語のレベルでもそうです。辞書をぺらぺらめくって見ていると、見出しの語の文字数が少ないほど語義や例文や解説が多いのに気づきます。少ないほど多いということですが、短いほど長いとも言えます。

読むよりも、目を細めて見るほうがよく見えます。目を細めるほどよく見えるのです。国語辞典よりも英和辞典のほうがよく分かります。

長い・短い、重い・軽い、多い・少ない、目を細める・よく見える——このように対義語や反対の意味とされている語やフレーズ（どれもが印象であることに注目してください、ここでしているのは数値化できる事象や現象の話ではありません）がかならずしも反対ではないことが実生活ではよく起きます。

現実には現実の文法（比喻です）があり、言葉には言葉の文法があるからです。

〇〇さんが語る

石の意味。

石というものが存在する意味。石の重要性。特定の石がそこにある意味。

「石の意味」にもう少し文字を足してみます。文字数が増えて多くなり、文字列は長くなります。

〇〇さんが語る、石の意味。

〇〇さんが、哲学者とか思想家であったり、文化人類学者であったり、地学者であったり、宇宙物理学者であったり、美学者であったりすれば、「石の意味」がだいたいどんな話になりそうかが想像できそうです。

フレーズつまり文字列が長くなるにつれて、うざくなるとも言えるかもしれません。いわゆる含蓄とか蘊蓄とか情報とかがくつつくわけです。要約が可能な文章とも言えます。

小説家や詩人が語ったり歌うとなると（作品のことです）、話や書かれていることを予測するのは難しい気がします。予想を裏切るのが仕事ですから。

詳しく言うと、適度に予想や期待にそい、適度に予想や期待を裏切る作家に人気が集まります。「この先どうなるのだろう？」や「これはどういう意味？」——じらすのです。そのため、要約すると味（意味）ががらりと変わることがあります。意味とは味なのです。

*

〇〇さんが、石屋さんや墓石業者さんである。宝石をあつかう業者さんである。胆石や結石が専門の医師である（石専門の医師）——こういう場合には、ある意味切実であったり、金銭もからみますから、思わず身を乗り出して話を聞くなんで展開にもなりそう

です。

〇〇さんが、囲碁の名人とか棋士であれば、話はまたがらりと変わるでしょう。「定石」という言葉にあるような、石の打ち方や型の話になりそうです。

造園業も石をあつかうお仕事ですね。敷石や石庭なんていうものもあります。石といってもいろいろな意味になり、いろいろな意味を帯びそうです。

ミステリー、ミステリアス

「君は、この石の意味をどう考えるかね？」

小説でこんなフレーズがあったとすれば、ミステリーで密室のカーペットの上に拳大の石が転がっていて、探偵か刑事が口にしそうな科白になるでしょうね。

または密室でなくて、事件の起きた登山道の脇に積まれた石の意味をめぐっても、上のような言葉が出てきてもおかしくないでしょう。

あと囲碁の対戦が出てくる小説でも、それなりの意味を持ちそう。胆石専門の医師が登場する医学小説でも……。

*

要するに、文脈で「石の意味」が決まるということです。

そう考えると、「石というもの」が深くミステリアスに思えてきます。

同時に、「意味というもの」も深くミステリアスに感じられていきます。たとえば、石の持つ意味、ある石をめぐっての意味、石という言葉の意味——この三者の意味は異なります。

大切なのは、石そのものに意味はなく、石に人が「意味」や「意味ありげ」を見てしま

うこと、そして石は見たり手で触れるけれど、石の「意味」や「意味ありげ」は見えないし手で触ることもできないということでしょう。

ところで、私は石に意志や意思を感じるがあります。そんな話を書いた「路傍の人」という拙文があるので、よろしければお読みください。私にとって愛着のある文章なのです。

路傍の人 - 星野廉の日記

笑われるのを覚悟で言いますが、私は石に意志を感じるがあります。硬い石に固い意志を感じるのです。ついでに言ってしまう

horensou.hatenablog.com

(投稿：2023年5月6日 07:59)

#意味 # 対義語 # 反意語# 言葉 # 日本語 # ミステリー # 石 # 国語辞典 # 英和辞典

05/07 a rolling stone

＊

a rolling stone

2023年5月7日 08:38

目次

転がす、ずれる

言葉、意味

意味をあつかおうとするときの、もどかしさ

意味をあつかうはずなのに言葉をあつかってしまう

出る、あらわれる

出る言葉にあらわれる意味

転がす、ずれる

このところ、「出る」とか「あらわれる」とか「見える」という言葉を転がしています。

転がすというのは、ころころ回して動かしたりひっくり返して、転じることです。

言葉をいじくりまわすと、言葉にずれが起きます。言葉がずれるのです。たとえば、ここまででやったことが、転がすです。

転がす ⇒ ころころ回す ⇒ 動かす ⇒ ひっくり返す ⇒ 転じる ⇒ いじくりまわす ⇒ ずれが起きる ⇒ ずれる

循環とか反復とも言えます。循環と反復が起きるとかならず、ずれが生じます。

「同一」は言葉や意味や人においてはありません。動くことでかならず、ずれます。動きは時間の経過でもあるので、動きとずれは同義と言えそうです。同義は動義だと言いたくなります。

いま述べたことは、まさに循環であり反復です。私はこういうことが好きなのです。言語活動をふくむ、人のあらゆる行動の根底には、ずれを伴う循環と反復があるのではないか。そんな思いが私には強いです

言葉、意味

このところ、「出る」とか「あらわれる」とか「見える」という言葉が気になって転がしているのですが、こうした言葉とセットになっているの言葉があります。

言葉と意味です。

出る、あらわれる、見える

言葉、意味

上の文字列を組み合わせて作文をしているのです。

*

「言葉」と「意味」という言葉のことなのですが、言葉をあつかうと、意味もあつかわなければならなくなります。とはいうものの、意味をあつかうというのは至難の業です。

言葉は見えたり聞こえたり手で触れることができますが——言葉を手で触れるとは、たとえば点字や指字のことです——、意味は見えないし聞こえないし手で触れないので、「意味をあつかう」と言っても手に余るのが現実なようです。

これまでに、見えないものをあつかったことがありますか？ 私にはありません。

言うは易く行は難し、ですね。

意味をあつかおうとするときの、もどかしさ

意味をあつかうと言っても、その過程においてもその結果においても、意味を「言葉

にする」わけですから、けっきょくは言葉をあつかってしまうことになります。

意味をあつかおうとしながら、言葉に言葉を重ねるという操作をくり返すしかないという意味です。

見えないし聞こえないし手で触れることができない意味をあつかうのは至難の業です。もどかしいし、ままならない。

夢の中で思いのままに振る舞おうとするさいに覚える、もどかしさに似ています。

鏡をのぞきこんでそこに映った像を目にしながらか、それが自分の似姿であって自分ではないと思いだしたときの無念さ、それに追い打ちをかけるように、自分を肉眼で見たことがない、これからも見ることがないのに気づいたときに覚える、やるせなさにも似ています。

ままならない、もどかしい、できそうでできない。夢の中と鏡の前でのもどかしさと同じく、意味をあつかうのはかなわぬ夢のようです。

それでいて、「意味」という言葉があり、辞書にもちゃんとその意味（じつは意味ではなく、意味の一つである語義を文字にしたもの）が書いてあるし、意味は言葉とセットになっているようだし、言葉とセットになっているようだから、人は言葉を使いながらまるで取り憑かれたように、見えない意味を追い求め、意味をめぐるの擦った揉んだをくり返している。

意味をあつかうはずなのに言葉をあつかってしまう

「私は意味をあつかいましたよ」という言葉がいくつあっても（そんな本がたくさんあります）、それは空手形みたいなものであり、意味をあつかったエビデンスにはなりません。

言葉に言葉を重ねる形で言葉をあつかいながら、1) 意味をあつかっている振りをす

る、2) 言葉をあつかっているのに気づいていない、3) 都合のいい理屈やもっともらしいフレーズを考えて（たとえば以心伝心、テレパシー、作者の意図を汲む）、言葉をあつかっていることを意味をあつかっていることにする。

ちなみに、私は2) のタイプです。私が言葉をあつかっているのは一目瞭然なのです。なにしろ、いまみなさんがご覧になっているのは文字なのですから。

気をつけてはいるのですが、つつい忘れます。気づいていないために、ときどきとんでもない飛躍や脱線をするのですが、それが私の芸風ということでお許しください。

知らぬが仏。

要するに、かなりいいかげんにやっています。私は研究者でも探求者でもなく、ただわくわくするのでこういうことをやっているからです。筋をとおす義理はありません。

そんなわけで、矛盾や破綻、飛躍や脱線、循環や反復を恐れず、その時々直感をたよりに、言葉を転がしていきます。早い話が、それしかできないのです。これが私の芸風です。

出る、あらわれる

言葉が出る。言葉は出る。

言葉があらわれる。言葉はあらわれる。

言葉が見える。言葉は見える。

意味が出る。意味は出る。

意味があらわれる。意味はあらわれる。

意味が見える。意味は見える。

上の文字列を眺めていると、定着した言い方もあれば、ふつう言わないなあとと思うものがあります。私は定着していない言い方がわりと好きです。

なにしろ、「うつせみのたわごと」というタイトルで自分語と言っているような言葉遣

いで長文の連載を堂々と投稿するような人間なのです。

定着、固定、さだめる、かためる。

こういうものが苦手なのです。だから、転がり転がすのです。

転石苔むさず。

A rolling stone gathers no moss.

このことわざには、いい意味も悪い意味もあるようです。どちらの意味にも取れる。定まっていなくて好きです。

出る言葉にあらわれる意味

言葉は出るものであり、意味はあらわれるものだ。

さきほど並べた文字列を見ていると、そう感じます。出た言葉に意味があらわれるのです。

生（は）えてきた言の葉に色が浮かぶイメージ。意味は色なのだろうと思います。色は仮の姿であったりまぼろしなのだという気がします。

出るものは、たいてい見えるし聞こえるし手で触れる。あらわれるものは、ときには見えたり聞こえたり手で触れることができるが、その「あらわれ」は一時的であったり仮の姿であったりまぼろしであったりする。

詳しく言うと、そんなふうにも感じています。

＊

意味は色です。色はそれだけで「いる」ことも「ある」こともできないから、いたりあったりするものに浮かぶのです。

意味があらわれるのは言葉にだけではなく、森羅万象にあらわれるようです。その意味で、意味は宿を借りる生きものなのかもしれません。

そう考えると、人が森羅万象の代わりに持ち歩く（ポータブルな）意味の居場所、それが言葉だと言えそうです。

その言葉もまた、仮の宿だという気がします。その言葉が宿る場所、つまり人も仮の宿であるはずです。

その魂が宿る場所も、仮の宿であるにちがいません。というか、そうであってほしいです。

＊

意味（言いたいこと）が人の中から出て、言葉（声・文字・表情・身振り）という形を取ってあらわれる。

という感じもします。いまのフレーズでは、意味が出て、言葉があらわれると言っています、私の文章ではこういうことはよくあります。

一瞬一瞬の思いを大切にしたいので、無理に辻褄を合わせないのです。言葉の上での帳尻を合わせなければならない義理も必然も忖度も、私にはありません。

反復しなからずれていくだけです。ころころと転がるだけです。

＊

出た言葉も あらわれた意味も
ころころ 転がる

転びもするし 転げもするし こけもする
こける 転げる 倒ける 瘦ける 苔る

苔むす 苔のおむすび 苔まりも
転がっているうちに すり減る

いつか消えてなくなる
いつか帰っていく 還っていく 孵っていく

(投稿：2023年5月7日 08:38)

#転がる # 石 # 言葉# 意味 # 出る # あらわれる # 現れる # 見える # 日本語 # 反復
循環# 矛盾 # 飛躍

05/08 宿を借りる生きもの

＊

宿を借りる生きもの

星野廉

2023年5月8日 07:47

目次

宿を借りる

出たものは何らかの運動へと誘われる

文字は不気味

出た意味が言葉として立ちあらわれる

複製化された言葉

言葉は意味のしもべ

あらわれた意味に関しては、人は責任を取らなくてもいい

得をするのは意味なのかもしれない

宿を借りる

意味は色です。色はそれだけで「いる」ことも「ある」こともできないから、いたりあったりするものに浮かぶのです。意味があらわれるのは言葉にだけではなく、森羅万象にあらわれるのでしょうか。

人が森羅万象の代わりに持ち歩く（ポータブルな）意味の居場所、それが言葉なのかもしれません（その意味で、意味は宿を借りる生きものなのかもしれません）。

その言葉もまた、仮の宿だという気がします。

その言葉が宿る場所、つまり人も、仮の宿であるはずです。

その魂が宿る場所も、仮の宿であるにちがひありません。というか、そうであってほしいです。

(拙文「a rolling stone」より)

出たものは何らかの運動へと誘われる

いったん「出た」ものは、必ず、何らかの運動に誘発されます。たとえば、いったん「出た」給料も、給付金も、保険金も、うんちも、太陽も、月も、声も、にきびも、幽霊も、新刊書も、選挙候補者も、テレビドラマの役者も、家出したお父さんや、家出したお母さんや、家出したお子さんも、火も、くいも、そのまま静止し続けることはありません。(拙文「出たものは「静止」してはいない」より)

半分冗談はさておき(半分は本気です)、いったん出たものがじっとしていないで、何らかの動きへと誘われていくというイメージは、私にとってリアルなものなのです。

思いこみなのでしょうか。私はnoteで記事に書いていることは、研究でも探求でもありません。考えてわくわくすることを文字にしているだけです。

*

言葉はどうなのでしょう。意味はどうなのでしょう。

言葉(声・文字・表情・身振り)は、いったん発せられたあと、じっとしていないで、何らかの動きに誘われるという気はします。

なにしろ、声と表情と身振りは、発せられたとたんに消えていきます。受け手はそれを必死に(またはぼんやりと)追いかけて記憶にとどめる(あるいは片っ端から忘れる)ことになります。

消えるのです。録音とか録画をしないかぎりには消えます。文字にしていく方法もありますが、これは現実問題として大変です。

速記みたいに多大の技能と労力が必要になります。通訳者みたいにメモを取ってあとで再現するもの普通の人にはできそうもありません。

文字は不気味

一方で、文字は残ります。これはすごいことだと思います。私にとって、文字は不思議だらけであり不気味だらけの存在です。

- ・文字の習得には、とほうもない時間と労力がかかる。
- ・学習障害として文字の読み書きだけができない人がいる。
- ・人類には無文字社会という選択もあった。
- ・話し言葉、書き言葉（文字）、表情、身振りを言葉と考えた場合に、文字がいちばん遅く出てきた。個人レベルでも、文字の習得が後になりがち。
- ・文字だけが見える、しかも残る。
- ・複製として存在し広まり継承される。
- ・スーパースターとして最後にあらわれた。それでいて、あちこちであらわれ続けている。
- ・産む。産み続ける。

上の箇条書きを見ていると、文字の特異性をひしひしと感じます。不気味なのです。

出た意味が言葉として立ちあらわれる

出たとたんにどんどん消えていく声や表情や身振りも、出たあとにしつこく残る文字も、いったん発せられたのちには、じっとしていないで、何らかの動きに誘われる気がします。

人が動くのです。心が動くだろうし、じっさいに行動に出ることもあるでそう。

意味はどうでしょう。

私の印象では、意味は出ると言えば出るわけですが、言葉といっしょに出ているようです。

意味（言いたいこと）が人の中から出て、言葉（声・文字・表情・身振り）という形を取ってあらわれる。

という感じがします。意味から言葉への移行は瞬時だという気がするので、次のように言えそうです。

意味（言いたいこと）が人の中から出て、瞬時に言葉（声・文字・表情・身振り）という形を取って立ちあらわれる。

複製化された言葉

いったん「あらわれた」ものは、「出た」ものとは異なり、静止したまましつこく居座ることも、往々にしてありそうなのです。真価、効果、正体、正義の味方、英雄、悪の権化、〇〇の神様、救世主、影響、才能、成果、結果などです。もっとも、影響や結果や効果みたいに、「出る」とも言うものは、概して「不安定」な気がします。（拙文「出たものは「静止」してはいない」より）

声（話し言葉）、表情、身振りは、放たれた瞬間に消えます。文字は消さないかぎり、しつこく居座りつづけます。

前者を居座りつづけさせるためには、文字にするか——昔はこれに頼ったようですが、とかこの方法に頼る時代がずっと続いていたのです——、録音や録画という手段を取ります。

文字は、写本や写経のように筆写する時代が長く続き、やがて印刷術が発明され普及し、いまではデジタル情報として配信・複製・拡散・保存がネット上で瞬時におこなわれています（音声と映像についても同じです）。

＊

大切なことは、音声、表情や身振り、そして文字が、いまでは複製として拡散され保存されていることです。

私たちが日常生活で目にしたり耳にしている音声や映像や文字のほとんどが複製、し

かもデジタル化された情報としての複製だということに、本気で驚きつづけていても罰は当たらないと私は思います。

よく考えると、こうした状態というか事態というか常態は、少し前には想像もしていなかったのです。とんでもないことが起きているのですが、それが当り前に感じられます。

人は長い間驚いていることができないようです。慣れるというか鈍感になる才能にめぐまれているから、人類はここまで来たのでしょうか。

言葉は意味のしもべ

話を戻します。というか飛躍します。

いまや複製が主流になった言葉が残って増えつづけているわけですが、これは意味が残って増えつづけているとも言えるのではないのでしょうか。

さらに言うなら、意味を生かしつづけるために、複製化された言葉があるように思えてなりません。

言葉は意味のために——意味を生かすために——あるのです。その逆では断じてありません。言葉は意味のしもべなのです。

ひょっとすると、デジタル化とインターネットという魔法が生みだされる前には、長い間文字（消えずにしつこく残りつづける文字）が意味を生かしつづける役割をになってきたのではないのでしょうか。

*

言葉と意味の関係は、いろいろな見方でとらえることができるでしょう。

- ・意味は言葉の主（あるじ）であり、言葉は意味の僕（しもべ）である。
- ・意味は言葉に寄生している。

- ・意味は言葉に宿っている。
- ・見えない聞こえない意味は、見えて聞こえる言葉にあらわれる。
- ・人に見えない聞こえない意味が、人に見えて聞こえる言葉に宿っているのは、言葉を媒体にして、視覚と聴覚に優れた人という生きものに寄生しているからだ。

いかにも妄想の産物といった言葉をつらねていますね。思いつきをつづただけですので、今後変更したり、忘れてしまうこともあるだろうと思います。記念として残しておきます。

あらわれた意味に関しては、人は責任を取らなくてもいい

「〇〇が出る・出た」とか、「〇〇が見える・見えた」の代わりに「〇〇があらわれる・あらわれた」と、するだけでいいのです。「見える・見えた」が自分の責任なのかどうかは、誰にも分からないと思いますが、とにかく責任を転嫁するのです。

それは「出た」のでも「見えた」のでもなく、「あらわれた」のです。思うだけでなく、ちゃんと声を出して唱える。それだけで、だいぶ気が楽になりませんか？
(拙文「あらわれるのです。」より)

言葉が人の中から出てきて、その言葉に意味が立ちあらわれるという話になってきました。

意味があらわれるのには意味があるのでしょうか。

人が言葉をもちいる、人が言いたいことを意味として言葉にならせる、こうしたことに意味はあるのでしょうか。誰かが得をするのでしょうか。

得をしているのは人でしょうか。たしかに、人類はこの星でここまで来たわけです。得をしたと言えば得をしたのであり、ひどい目にあっているとえばひどい目にあっていると言えそうです。

ひどい目にあっているのは、この星と、この星に住むヒト以外の生きものたちだとも言える気がします。

ヒトだけが得をしているのであれば、こうなった責任にはヒトにあるとも言えるでしょう。

いや、ヒトは意味に利用されているだけだと言う人がいても私は驚きません。

意味のすべてが「あらわれた」結果としてあるのだから、ヒトには責任がない。そんなふうには責任転嫁をするのが、ヒトにとっては精神衛生上好ましいことである。

勝手にあらわれる意味に対し、ヒトは責任を取る必要はない——なんて考えもありそうです。

得をするのは意味なのかもしれない

飛躍がつづいたので、整理をしてみよう。

意味のすべてが「あらわれた」結果としてあるのだから、ヒトには責任がない。そんなふうには責任転嫁をするのが、ヒトにとっては精神衛生上好ましいことである。

もしそうであれば、ヒトが意味に責任転嫁することによって得をするのは、意味なのではないでしょうか。

責任転嫁をして気持ちが楽になったヒトは、安心して、あるいは自信をもって、心置きなく言葉を使いつづけ、それと同時に意味を生かしつつけることになります。

意味は宿を借りる生きもの。太古から森羅万象に宿り、やがて言葉というポータブルな宿を借りてヒトに寄生するようになった。いまではヒトの手を借りてこの星にめぐらされた網に居ついている。

めちゃくちゃな話になりましたね。単なる私の個人的な妄想で終わらせないためには、以上の筋書きで SF 小説か幻想小説を書けばいいのかもしれませんが、いまの体調を考えると体力的に無理なようです。

しばらく、ここで書いたことの意味を考えてみます。

(投稿：2023年5月8日 07:47)

#言葉 #意味#日本語 #寄生 #借りる #複製 #文字 #インターネット #妄想 #小説
#SF #幻想小説

05/09 言葉はどこから来る

＊

言葉はどこから来る

星野廉

2023年5月9日 07:11

目次

言葉が降りてくる

まだ言葉ではないもの

文字を読むさなか、文字を読んだあと、文字を思い出すとき

やり切れないもどかしさ

言葉が降りてくる

- ・言葉は出るものであり、意味はあらわれるものだ。
- ・出るものは、たいてい見えるし聞こえるし手で触れる。あらわれるものは、ときには見えたり聞こえたり手で触れることができるが、その「あらわれ」は一時的であったり仮の姿であったりまぼろしであったりする。
- ・意味（言いたいこと）が人の中から出て、言葉（声・文字・表情・身振り）という形を取ってあらわれる。

（拙文「a rolling stone」より）

言葉が降りてくる。

言葉がやって来る。

言葉が口をついて出る。

言葉が湧き出る。

以上の言い回しを見ていると、言葉が「出てくる」さまを表わしていると感じると同時に、こういう場合には、言葉が「現れている」のではないかと思えてきます。

「言葉が出る」で私がイメージしているのは、「見える言葉（文字）や聞こえる言葉（声）が出る」なのですが、上の文字列を見ていると、出る前の言葉（これは言葉とは言

えない気がします) がいかにも得体の知れないものであったり、ときには不気味なものであるように感じられるのです。

*

これはたぶん、「見えて聞こえる言葉」が出る前の、「見えなくて聞こえない言葉」(言葉とは言えない気がします) が強調されているような印象をいただいているからではないかと思います。

つまり、上のフレーズが、言葉についての次のようなイメージを漂わせているように感じられるのです。

言葉が出るということは不思議な現象だ。

言葉はなかなか出るものではなく、苦勞して出したり、何かのきっかけですらすら出てくることがある。

言葉がそもそも人の中から出るのか、それともどこから人に移ってくるのかは分からない。

人を越えた何かが人から言葉を引きだしてくれるのではないか。

(お断りしますが、ここで述べているのは、ある言い回しについてのイメージや印象であって、事実の検証をしているわけではありません。あくまでも私の個人的な感想としてお読みください。)

まだ言葉ではないもの

私は言葉を広く取っています。話し言葉(音声)と書き言葉(文字)だけでなく、視覚言語と呼ばれることもある表情や身振りや記号やしるしも、言葉だと受けとめて、ふだんは生活しています。ときには、点字や指点字や手話もふくめて、言葉と呼ぶこともあります。

広い意味での言葉が発せられる以前の「まだ言葉ではないもの」をめぐっては、これまでいろいろな人がいろいろな意見を述べてきたにちがいません。ここでは私の個人的な思いを書いています。

ひとさまの頭や心の中をのぞくわけにはいきませんので、自分を観察しながら書いていきます。

*

いまこの文章を書いているさなかの私は「まだ言葉ではないもの」と、パソコンのディスプレイ上に浮かんでいる「書いた言葉」のあいだで、さまよっている気がします。

note で文章を投稿しているみなさんも、それぞれが同じような気持ちをいただきながら、作文しているのだろうと想像しています。

パソコンに向かっているいまの自分を観察していると、「まだ言葉ではないもの」とは、言葉の断片であったり（文字のようなもの、音声のようなもの、表情や身振りのようなもの）、言葉の断片にまではいかない曖昧なものであったり、断片的な模様や風景（視覚的なイメージ）であったりします。

キーボードを操作して文字を入力し、その結果がディスプレイ上に「あらわれた」時点の自分を観察すると、内なる文字なり声がほぼ完成していると感じる場合——「まだ言葉ではないもの」が文章になったという達成感——と、まったく文字や声を意識していない場合——なぜか書けているとか書けてしまったという「あれよあれよ」感——があります。

文字を読むさなか、文字を読んだあと、文字を思い出すとき

上で述べた「まだ言葉ではないもの」を観察したり、観察したあとで、それを思いうかべていると、「言葉の意味やイメージ」という言い方で私が思いえがいているものに似ている気がします。

「言葉の意味やイメージ」というのは、言葉つまり話や文章や表情や身振りを、それらが発せられたあとになって思いだしているときの、言葉の断片であったり（文字のようなもの、音声のようなもの、身振りのようなもの）、言葉の断片にまではいかない曖昧なものであったり、断片的な模様や風景（視覚的なイメージ）であったりするものなの

です。

私がいだいている「言葉の意味やイメージ」は、私にはぼんやりと見えたり聞こえたりするような気がするのですが、他人に見せることも聞かせることもできません。つまり他人と共有できないために、確認も検証も不可能なのです。

もちろん、思いを共有できないというのは程度問題なのであって、人同士がある程度思いを共有できているから、人類はここまでこれたわけです。「ある程度」を「そこそこ」と見なすか、「かなり」と見なすかは意見が分れるでしょう。時と場合にもよるでしょう。

人同士が「ある程度」に思いを共有できているという状態が、「ある程度」の誤解や曲解や無理解あつての「ある程度」であることは、つねに自覚し覚悟していいだろうと思います。

むやみに失望や悲観をしないために、です。そんなものだと割りきりましょう。

*

話を戻します。

自分の中にある「思い」が見えないし聞こえないということは、見えないし聞こえないという点で言葉の「意味」に似ています。

「意味は見えないし聞こえない」というのは、詳しく言うと、「ある時点で自分には見えたり聞こえたりするような気がするが、それを他人に見せたり聞かせたりできない」となるように思えます。

言葉の意味は自分には何となく見えているし聞こえているし、たぶん感じているのです。

そのように考えると、言葉の意味は、たとえば文章を読んでいるさなか、文章を読んだあと、読んだ文章を思いだしているときに、自分の中で浮かんでいるものに似ている気がします。

なんていうふうに、文字にしましたが、これがいま述べたさなかやときの自分の中で浮かんでいるものを「あらわしている」と言う勇氣は私にはありません。

「あらわれる」はあっても「あらわす」は願いなのでしょうか。

一方、「出る」はかろうじて体感できるときがあるという気がします。ああ、出ていると感じるときがあります。目にしていなくてもです。ただし、出ているのが何なのかはわからないのです。

目にしないとわからない。これが人の限界であり可能性なのかもしれませんね。「ま(真) こと(事・言)」(広辞苑)の「ま」は「目」にちがひありません。

やり切れないもどかしさ

言葉と思ひとは、やはり別なのです。言葉と事物とが別なのと同じです。

私の中にある思ひをみなさんに見せたり聞かせたりできないのが残念です。みなさんの中にある思ひを見たり聞くことができないのが残念です。

私は私、あなたはあなた。人それぞれということですね。

*

どんなに愛している人といっしょに寝ていても、寝入った瞬間に別れてしまう。いっしょに同じ夢を見ることは叶わぬ夢——というのに似ています。

見方を変えると、うつつはみんなでいっしょに見ているままならない夢と言えそう。いずれにせよ、ままならない。

このやり切れないままならさに既視感を覚えたので、さっきから何だろう何だろうと考えていたのですが、いま思いだしました。

鏡の中の自分の似姿を見ながら、ふと自分の姿を肉眼で見ることができない現実を思いだしたときのもどかしさと似ています。鏡を覗きこむという体験は、うつつのままならなさの象徴に思えます。

せめて、このもどかしさがあなたと共有できていることを心から願っています。

(投稿：2023年5月9日 07:11)

#言葉 #意味 #思い #鏡 #夢

05/10 色のない景色

＊

色のない景色

星野廉

2023年5月10日 07:45

目次

「景色から色が消える。」

味気ない、色褪せている、気持ちが動かない

文字列を引き算してみる

足し算してみる

「景色から色が消える。」

フォロワーのゼロの紙さんの言葉を、以下に引用します。

景色から色が消える。

色は認識できるのだけど、世界は

変わってしまったのだなど。

ゼロの紙「誰かの記憶になって生きるということ。」2023/03/29 より

ゼロさんの記事で上の文を読んだときに、「景色から色が消える。」の「色」とは意味なのではないかと思いました。

世界は見えている、おそらくはっきり見えている。それなのに「色」がない、色が感じられないとすれば、それは世界から意味が消えているのではないのでしょうか。

＊

「景色から色が消える。」を文字どおりに取ってみましょう。「景色」という文字列から「色」という文字を消してみます。すると「景」が残ります。

「景」は「かげ」とも読めます。影と同じく「すがた・姿・かたち・形」という意味があります。「目に映るもの」とも言えるでしょう。

ゼロさんの文章では「世界」です。「かげ」としての世界。事物の「かげ」だらけの世界。

色は認識できるのだけど、世界は
変わってしまったのだなど。

ゼロの紙「誰かの記憶になって生きるということ。」2023/03/29 より

「色は認識できるのだけど」とあるように、「景色から色が消える。」の「色」は視覚的な意味の色彩ではありません。

「色」には色彩だけでなく、「おもむき・趣」や「うつくしさ・美」などの意味がありますが、私は目に映る物の姿や形に加わる「何か」だと、とらえています。「何か」とは意味です。

以下は、ゼロさんの記事について私が引用リツイートという形で、コメントしたものです。

「景色から色が消える。」というゼロさんの言葉は、きわめて危うい心境を感覚的かつ簡潔に言いあらわしていると思います。色の消えた世界は「かげ」の世界です。陰画（ネガ）のように。

ゼロの紙さんの「誰かの記憶になって生きるということ。」という文章では、語り手の言う「色」が「母の記憶」へと変奏されて、それが感動的な展開を見せます。

これ以上私が語ると、この詩的な文章の素晴らしい展開を散文的な言葉で説明することになるので、続きはどうか記事をお読みください。お薦めします。

味気ない、色褪せている、気持ちが動かない

世界が見える。物の形と姿ははっきり見えていて、おそらく色も見えている。それなのに色を感じられない。ちゃんと周りの様子は見えているのに味気ない、色褪せて見える、見えているものに対して気持ちが動かない――。

そうした世界に欠けているものは意味だと思います。

人は何かになんかを見てしまう生きものです。前者の何かは「世界」、後者の何かは「意味」だと考えてみましょう。

意味は世界に「いろどり・色取り・彩り」を添えるものです。「いろどり」とは、見る側の視覚が機能しているだけでは感じられるものではないと思われます。心が動かないと感じられないものでしょう。

わくわく、どきどき、あらまあ、えっ、わあーっ、すごい！、げーっ！、何これ？、なんと！、嫌だ、こわっ、言葉にならない、……、――、！？

たとえば、こうしたものが「いろどり」ではないでしょうか。心が動いている「しるし」なのです。

一方で、色ばかりが目について形や姿が見えないという場合もありそうな気がします。有頂天とかエクスタシーと呼ばれる境地です。色が見えないのは悲しいですが、見えすぎるのも困りますね。

文字列を引き算してみる

心が動いている「しるし」とは、どんなものでしょう。

景色 - 景 = 色

たとえば、色です。上で述べた「いろどり」のことです。声に色がある、色を添える、の色。

光景－景＝光

光です。光の感じられない世界を想像してみてください。物理的な意味での光ではありません。見えているのに光が感じられない世界というイメージでの光のことです。

情景－景＝情

情です。まさに心の動きです。情動という言葉がありますが、emotion のことらしいです。エモい (emotional) のエモ。これがない人生は色褪せて味気ないでしょう。

風景－景＝風

風情がある、風通しがいい (悪い)、新風が吹く、風向きが変わる、という言い回しに見られる「風情」のことです。風情に似た意味の言葉に、風趣、風致、風韻があるそうですが、どれもが風味のある文字であり言葉ですね。私は「風味」に意味に近いものを感じます。

いま見える景色から色や光や情や風の消えた世界を想像してみてください。きっと味気ないでしょう。

足し算してみる

逆に言うと、目に映った世界の「かげ・すがた・かたち」である「景」に何か加わるとそれが「いろどり」になるのです。

景＋色＝景色

景＋光＝光景

景＋情＝情景

景＋風＝風景

景（かたち・すがた）に何か加わる。人は何かに何かを見てしまう。世界に意味が添えられる。

物の形や姿がはっきりと見えているのに色や光や情や風のない世界を想像してみてください。心の動いていない世界ではないでしょうか。

意味は世界を豊かにしてくれるようです。もちろん、いい意味でも悪い意味でもです。良いも悪いもあるのが世界なのですから。

（投稿：2023年5月10日 07:45）

#ゼロの紙さん #色# 彩り # 景色 # 意味 # 光 # 情 # 風

05/12 意味の意味を広げる

＊

意味の意味を広げる

星野廉

2023年5月12日 07:47

景＋色＝景色

景＋光＝光景

景＋情＝情景

景＋風＝風景

景に何か加わる。人は何か何かを見てしまう。世界に意味が添えられる。

(拙文「色のない景色」より)

目次

世界に加わるもの

見える世界に、色、光、情、風を加える

意味の意味不明っぽさ

meaning、sense

感覚、知覚、五感

意味は感じるもの

意味は官能

世界に加わるもの

人は世界そのものや森羅万象そのものを見ることはできません。ヒトに備わっている知覚機能と認知機能をとおして万物を「見ている」からです。

「見ている」だけでもない気がします。たぶんそれに色づけをしているのです。色づけという言葉を使いましたが、「色」も「つける」も比喻です。「意味づけ」と言ってもいいでしょう。

この記事では、色づけをすとか、意味づけをすというさいの「色」と「意味」を広げてみたいと思います。

＊

景色、光景、情景、風景——景に何かが加わる。世界に意味が添えられる。世界に意味が加わる。

意味は漠然とした言葉です。なにしろ、意味は見ることも聞くことも、手で触ることもできません——なんて私はよく記事に書くのですが、ほんとうにそうでしょうか？

世界にはどんなものが加わって、私たちはその世界を見ているでしょう。

見える世界に、色、光、情、風を加える

景＋色＝景色

景＋光＝光景

景＋情＝情景

景＋風＝風景

意味は色、意味は光、意味は情、意味は風。

意味はいろどり、意味はかがやき、意味はこころ、意味はながれ。

意味の意味不明っぽさ

「意味」という言葉を辞書で見るといろいろな語義が並べてあります。語義には難しい説明もあります。

「言いたいこと」という説明はすっと入ってきます。頭よりも体にすっと入ってくる

のです。これは大和言葉とか和語と呼ばれている、この島々にもとからあったらしい言葉だからでしょう。

簡単に言うと、音読みではなく訓読みをしている言葉からなりたっているという意味です。

一方、「意味」は音読みしているようなので、漢語系の言葉でしょう。つまり、大陸から来た文字とその意味がセットになっているわけです。

私の印象では漢語系の言葉は体よりも頭に入って来て、和語よりも入ってから分かるまでに時間がかかる気がします。

そのせいか、「言いたいこと」にくらべると、「意味」は意味不明っぽいのです。だから、私はその意味の意味不明っぽさをめぐって、このところ記事を書いているのかもしれない。

meaning、sense

「意味」という言葉の意味を考える場合に、国語辞典を眺めてうなっているだけでなく、「意味」に相当する外国語を辞典で調べると、はっとなる語義（ほとんどが説明というよりも訳語です）があって刺激を受けます。

「ああ、なるほど」と声をあげたくなる語義に出会えます。「意味って、そういう意味かもしれない」という感じ。

*

私の印象では、英語の meaning は日本語の「意味」に近いです。ほぼ重なる気がします。「やっぱりね」という感じ。

この meaning は日本語の和語に当たるようです。つまり、英国の島々に土着の言葉の

系統につらなるそうです。ゲルマン系と呼ばれることがあります。

日本語の「意味」に相当する英語の単語には sense もあります。ナンセンス、コモンセンス、「いいセンスしている」のセンス——意味、思慮・分別、感覚——です。この語は、ラテン系、つまり大陸から渡ってきた言葉の系統につらなるようです。

日本語にも英語にもそれぞれ二つの系統があって、一つは島々に土着の言葉、もう一つは大陸から渡ってきた言葉である、なんておもしろい符合ですね。わくわくする話です。

＊

sense の語義を見ると「おやっ」と思います。meaning より語義が多く、その意味の様相が meaning と微妙に、見ようによってはかなり、ずれているのです。

語義に見入ってしばらく考えこむこともよくあります。私には楽しい時間です。私は辞書を見たり眺めるのが好きなのです。

感覚、知覚、五感

sense の語義の数々の語義のうち、わくわくするのは「感覚、知覚、五感」と「(五感または直感で)感じる」(ジーニアス英和大辞典)です。

日本語の「意味」にも、英語の meaning にもない語義なのですが、「なるほど、そういえばそうだなあ」という気持ちになります。上で書いた色、光、情、風にも似たものを感じます。

意味は色、意味は光、意味は情、意味は風。

意味はいろいろ、意味はかがやき、意味はこころ、意味はながれ。

要するに、頭だけで感じ分けたり、とらえるのとは異なる「意味」があります。意味を身体にまで広げているのです。

人が何かに何かを見る。世界に意味が加わる。世界がいろどりを帯びる。こうした場合には、身体的な反応が起きている気がします。意味づけがあるとすれば、それは頭だけの働きではないにちがいありません。

意味は感じるもの

意味は言葉とセットになっていると考えられていますが、固定を指向する言葉と異なり——文字・印刷・複製、録音、録画——、意味は動きであり、形や姿が明確ではなく、常に「うつろいつづけている」と考えられます。

共同体や集団で共有されるものだけが意味ではないのです。だから、意味をめぐる擦った揉んだが絶えないと言えます。

意味は、ある時代のある時期の特定の集団や個人の辻褃合わせのためにあるのではないのです。ローカルでプライベートなものとして常に、人と「生きつづけている」のが意味の原点でしょう。

そんな曖昧模糊で漠然とした意味ですが、人はそれを「感じる」ことができると言えそうです。

日本語と英語を混同しているなんて声が聞こえそうですが、漢語をふくめた翻訳語だらけの日本語は混同だらけです。自分の直感を信じて sense と「意味」のコラボを書いてみます。

＊

意味は見える。意味は光、意味は闇。

意味は聞こえる。意味は音、意味は声、意味はノイズ。意味はメロディー、意味はリズム、意味は沈黙。

意味はにおう、意味は匂う、意味は臭（にお）う。

意味はさわれる。肌ざわり、意味は手ざわり、意味は舌ざわり、意味は湿り気。

意味は味。意味はおいしい、意味はまずい、意味はあまい、意味はからい、意味はすっぱい。意味は食感、意味は歯ごたえ、意味は舌ざわり。

意味は気配。意味は間（ま）。意味はおもむき。意味はなんとなく。意味は「何か」。意味はきざし。意味は空気。意味は風。

意味は官能

sense の形容詞形もおもしろいです。sense が多義語であることが浮き彫りになります。

sensible は「分別・良識・思慮・判断力」という語義から来た形容詞で、「分別のある・思慮のある」。

sensitive は「知覚・感覚」系で「感じやすい・敏感な」。

sensory は「知覚・感覚」系の学術用語的な形容詞で「知覚（感覚）に関する」。

sensual は「官能的な・肉感的な・そそる」。

sensuous は「感覚的な・美感（感性）に訴える」。

＊

以上は、英語であるそれぞれの形容詞の語義ではなく日本語であること、つまり訳語であることを思い出しましょう。外国語辞典につきまとう問題であり現実と言えます。

逆に言うと、日本語の「意味」という言葉では見えなかった、あるいは感じられなかった「意味」という言葉の意味の部分が見えるし感じられるかもしれません。

とはいえ、意味の原点は個人的でありローカルなものです。「私はそう思わない」という人がいてぜんぜん不思議はないわけです。

上の英語の形容詞で私にびびっと来たものを以下に書きます。

*

意味は官能。

意味はそそる。

意味は体にうったえる。

意味はフィジカル。

意味は身体的。

sense に「分別・judgement」と「感覚・feeling」の両方の意味があることに感動を覚えます。意味は頭だけでなく体でもとらえるものなのですね。

意だけでなく、感、官（器官の官）、甘、勘、観、歓を感じます。要するに「味わう」のです。意味ですから。

（投稿：2023年5月12日 07:47）

#意味 # 五感 # 知覚# 感覚 # 大和言葉 # 和語 # 漢語 # 日本語 # 英語 # 国語辞典
英和辞典

05/13 意味に意味を重ねる

＊

意味に意味を重ねる

星野廉

2023年5月13日 10:29

目次

「意味」という言葉は偉そうに見えるし聞こえる

「意味」を使ったフレーズ集

「意味・いみ」、「言いたいこと」

意味はローカルでプライベートなものとして人に立ちあらわれる

辞書の語義以外の意味にまみれて生きる

意味、異味、忌み

あらわれた言葉に、人は忌みを重ねる

不気味な「あらわれる」

あらわれるのは仮の姿や様子

「意味」という言葉は偉そうに見えるし聞こえる

私の語感では、意味という言葉は偉そうに見えます。ときには聞いて偉そうに響く場合もありますが、見た目のほうがずっと偉そうなのです。

文字は消さないかぎりずっとそこにあるからでしょうか。一方、声として聞いた言葉が自分の中に入りこんでなかなか去らないこともあります。その意味では音声はしつこいです。

文字は外で残り、音声は中で残るようです。何のって、人の外と人の中です。言葉に寄生しているらしい意味は、外にも中にも残る気がします。人にとっての話です。わんちゃんやねこちゃんには関係がありません。

＊

人生の意味、生きることの意味、世界の意味、宇宙の意味、ゴキブリとして生きることの意味、ミジンコが泳ぐことの意味。

上の文字列を眺めていると、どんな意味でも、もっともらしく見えます。意味ありげなのです。私にはそうです。

「意味」という言葉は意味ありげだから、気をつけて使わないと角が立ちます。「意味ありげ」で意味があるのは、「意味」ではなく「ありげ」だからです。「意味」には「意味」がありません。敵は「ありげ」なのです。

例を挙げます。

「意味」を使ったフレーズ集

「意味がないよ」、「意味ねー」、「無意味です」、「ナンセンス」、「それってどんな意味?」、「意味はないらしい」、「その意味を説明してください」、「意味不明」、「イミフ」

「意味深だね」、「意味が深いわ」、「深いわ」、「意味深長な発言だった」

「意味が分かる?」、「意味が分かると怖い話」、「意味が分からない」

「意味ありげ」、「何か意味がある」、「意味がありそう」、「意味があるらしい」、「意味ある事業」、「なかなか意味のある会議でした」、「やった意味がある」、「やっただけの意味がある」、「意味があるようでない」、「人生には意味がある」、「「起こる」ことには意味がある」、「あらゆることには意味がある」

「意味を取る」、「正確な意味を取る」

「意味を匂わす」

「その意味では……」、「ある意味では……」、「なんだあ、その意味か」

「変わらない愛を意味する花」、「意味するもの、意味されるもの」、「意味するところが分からない」

「その意味は知っている」、「その意味なら知っているよ」、「その意味は知らないけど」、「両方の意味がある」、「両義的な使われ方をしている」、「多義的な言葉だね」、「どっちの意味だろう」、「いろいろな意味に取れる」、「違った（異なった）意味に取ったらしい」、「違う意味にも取れるんじゃない?」、「そういうのをダブルミーニングっていうんだ」

「何を言いたいわけ?」、「What do you mean?」、「What do you mean by ‘What do you mean?’?」、「何を言いたいのか」って言うけどさ、何を言いたいわけ?、「言わんとするところが分からない」、「言いたいことをはっきりと言いなさい」、「言いたいことがぜんぜん分からないよ」、「言いたいことはよく分かったよ、でも難しいね（駄目なんだ）」

＊

どれもが「意味ありげ」でしたね。

大切なのでくり返します。「意味ありげ」では、「意味」ではなく「ありげ」に意味があるのです。「ありげ」が命であり、「意味」は刺身のつまという意味です。

意味とは「ありげ」——「有りげ」の語義は「ありそうなさま」だそうです（広辞苑）——だと言えば分かりやすいかもしれません。

大切なのでくり返します。「意味ありげ」の「意味」は刺身のつまです。「意味」はころ変わりますが、「ありげ」はしつこく居続けます。人のいるかぎり居続けます。

たぶん、「ありげ」は仕組みなのです。どうにもならない仕組みです。

ただし、もしも意味が言葉（とくに文字）に寄生し、言葉（とくに文字）が人に寄生しているとすれば、ヤドカリみたいなものですから、人がいなくなれば他のものに憑くかもしれません。

いずれにせよ、「ありげ」問題は憑きまとう気がします。

「意味・いみ」、「言いたいこと」

「人生の意味」という場合の意味と「人生という言葉の意味」というときの意味は違います。前者の意味の意味は、大切さとか価値に近い気がします。たしか辞書にもそんな意味の意味が書いてあった記憶があります。意義という感じ。

いま挙げた日本語の意味の二つの意味は、英語の meaning (ゲルマン系) にもあったと記憶しています。もう一つ、英語には意味に相当する sense (ラテン系) がありますが、そっちはどうだったか、忘れました。

「意味・いみ」は音読みしているみたいなので、漢語系でしょう。英語のラテン系(大陸系)に当たります。「言いたいこと」は大和言葉系だと思います。英語のゲルマン系みたいに、島々に土着の言葉です。

だいたいにおいて、漢語系の言葉は偉そうに見えるし響きます。「意味・いみ」なんてまだかわいいものです。「意義・いぎ」なんかはかなり偉そうでもったいぶって私には感じられます。ひとさまのことは知りません。こういう印象やイメージは個人的なものです。人それぞれ。

意味はローカルでプライベートなものとして人に立ちあらわれる

意味について語るさいには、個人的なイメージから出発しないと、悪しき抽象におちいります。話が実体や実態から離れていくのです。ここで書いていることが好例です。

意味を扱おうとするのなら、曖昧さは避けられません。逆に言うと、曖昧さを回避するかぎり、意味は扱えません。

意味を扱うためには、ぶれることがなく誤っても謝らない杓子定規な機械に意味を教える(プログラミングのことです)のとは別の手続きが要ります。

人における意味と普遍性は相いれないという意味です。意味はローカルでプライベートなものとして人に立ちあらわれます。ローカルというのは、言語や方言や地域や集団によって異なり、プライベートというのは人それぞれという意味です。

辞書の語義以外の意味にまみれて生きる

英語の meaning はさておき、「意味という日本語の言葉」が意味ありげで偉そうなのは、大切さや価値や重要性といった重い意味（重そうな意味）もあるからだという気が私にはします（だから意味という言葉を使う人は偉そうに見えるのでしょうか、意味とは「虎の威」なのです、意味には「言いたいこと」のほかに「大切なこと」という意味があるからにちがいません）。

言葉は、辞書に載っている「語義」だけでなく、人が個人レベルでいっているイメージや印象も担（にな）っています。さらに意味は、その時々文脈や状況によっても左右されます。

簡単に言うと、人は辞書に書いてある語義以外の意味にまみれて生きているのです。

人は生きものであり機械ではありません。その意味で、言葉も生きているのです。人は生きていれば垢もつくし、生理現象はおこるし、病気にもなります。気分もころころ変わります。

人はつねに揺らぎと移り変わりのなかにいるのです。そんな人がもちいている言葉もそうであるはずで

じっさいそうであるから、言葉はこれまで変わってきたのであり、いまも変わりつつあり、これからも変わるでしょう。いつの時代にも抵抗勢力はいますが、つねに劣勢に立たされています。平安時代や江戸時代の言葉が、いまそのまま使われていないのが証左です。

意味、異味、忌み

言葉は「出る」のに対し、意味は「あらわれる」ように私には思えます。

言葉が出る。ようやく言葉が出た。なかなか言葉が出ない——。このような言い方はよく見聞きします。

言葉があらわれる。ようやく言葉があらわれた。なかなか言葉があらわれない——。

いま挙げたフレーズは、詩とか小説ならありそうですが、日常生活で見聞きした覚えはありません。いま詩とか小説ならと言いましたが、比喩とかレトリックならありうるという意味です。

＊

「あらわれる」といっしょに使うと、「言葉」という言葉が特別な意味を帯びるのです。

「あらわれる言葉」には、言いたいことに異なる味つけをしたという意味での「異味」を感じます。具体的に言うと、宗教的な意味あいを感じるのです。

「何か得体の知れないものの力や特殊な事情によって出る言葉」が「あらわれる言葉」なのかもしれません。「出る」という言葉と組み合わせるのがデフォルトの「言葉」という言葉は、ただでは「あらわれない」のです。

「あらわれる言葉」は、死や出産や血やけがれ、あるいは神や神々や精霊や霊や魂といったものとかかわっている気がします。こうしたものに対し、人は「畏れる」(敬う)と同時に「うとむ」(忌み嫌う)という相反する感情をいだくと言われますが、その複雑な感情を「忌み・いみ・齋み」と呼んでもかまわないのではないのでしょうか。

＊

人は見えないものや聞こえないものや手で触れられないものを冷遇します。苦手だからです。知覚できないもの、知覚しにくいものに対して「んもー、知らない！」と業を

煮やしているのです。

冷遇する一方で礼遇もします。見えないし聞こえないけど、言葉は意味なしで成立しないし、だいいちつかえないからに他なりません。

しぶしぶ「お意味さま」を礼遇し、「お意味さま」の確認をするわけですが、その作業の結果であり集大成が、たとえば法典、つまり六法全書や判例集のたぐいであり、契約書や念書や条約なのでしょう。辞書や経典や聖典や法則や公式もそうです。

(拙文「言葉は声と顔が命、意味は二の次」より)

上の引用文で挙げたさまざまな文書はどうしてあるのでしょうか？ どうして複製され保存されているのでしょうか。

守ることができないからです。まさか記念に存在しているわけでもないでしょう。守らないのですから、礼遇する振りをして冷遇しているのです。

ないがしろにしながらか同時に崇めたてまつる、畏れ敬いながらも忌み嫌う、迎える振りをしながら退け遠ざける、身をかかわして相手を制しようとする、生餌（なまえ）——名前とも書きます——を与えて手なづけようとする——。

いま述べたのが、おそろしいものや得体の知れないものに出会ったときの、人の常套手段です。

あらわれた言葉に、人は忌みを重ねる

意味、異味、忌み——。言葉が「出る」のではなく「あらわれる」とき、その言葉には異味や忌みという意味が重ねられている。

そんなふうに私は考えています。いま「重ねられている」と言いましたが、正確には、意味も異味も忌みも、人が言葉に勝手に重ねているだけです。

意味も異味も忌みも見えないし聞こえないし、手で触ることができません。一方、言葉は見えるし聞こえます。点字や指点字だと言葉は手で触れる対象になります。

言葉は出るもの、意味はあらわれるもの――。

意味は出るのではなく、言葉においてあらわれるとも言えそうです。こうした状況を言いあらわすのに、「意味があらわれる」という言い方があってもいい気がします。

不気味な「あらわれる」

音と文字からなる言葉は見えるし聞こえます。人にとって見えて聞こえるものは、扱いやすいはずです。言葉に立ちあらわれる意味は、あらわれると言っても見えないし聞こえません。

意味は不気味です。言いたいこと、意味、意義、異味、忌みというふうに言い換えたとしても、見えないし聞こえないし、その不気味さは消えません。

あらわれているのに消えない不気味さこそが、意味を意味にしているものではないでしょうか。得体が知れないのです。

＊

あらわれる、現われる、顕れる、表れる。

これがいまの標準的な表記ですが、次の表記もあります。

露れる、彰れる。

漢和辞典を見ながら、「あらわれる」に当てたい漢字をもちいて当ててみます。「あらわす」とか「しるす」を含めて勝手に当ててみます。

兆れる、徴れる、形れる、著れる、見れる、記れる、志れる、注れる、註れる、紀れる、署れる、誌れる、識れる、銘れる、録れる。

これが私の「あらわれる」をめぐっての個人的なイメージだとも言えそうです。

あらわれるのは仮の姿や様子

「あらわれたもの」を目で見えたり、触覚・触感、嗅覚、場合によっては味覚・触感、さらには気配で感知してはいるが、「あらわれている」のは仮の姿や様子であって、そうではないさまが隠れているのではないか。

それが「あらわれる」であり「あらわれ」だという気がします。そして、その「あらわれ方」は「意味」にととてもよく似ていると感じられてなりません。「ありげ・有りげ」なのです。「意味ありげ」の「ありげ」に似ています。

たぶん、「ありげ」は仕組みなのです。どうにもならない仕組みであり仕掛けです。

(投稿：2023年5月13日 10:29)

#意味 # 現れる # 出る # 言葉 # 異味 # 忌み # 辞書 # 漢字 # 大和言葉 # 和語 # 漢語
色 # 香り # 辞書

05/14 This Masquerade

＊

This Masquerade

星野廉

2023年5月14日 08:18

「意味」という言葉は意味ありげだから、気をつけて使わないと角が立ちます。
(拙文「意味に意味を重ねる」より)

目次

言いたいこと、大切さ

すり替える

先送りする

他意をまともにとらない

「意味が分からない」の両義性

他人のせいにする

「言いたいこと」を汲んで、同時に「大切さ」を認めてやる

This Masquerade

言いたいこと、大切さ

意味という言葉には、「言いたいこと・意図」と「大切さ・意義」の二つの語義（意味）があると単純に考えましょう。

意味という言葉を使うと角が立つことがあります、それはこの二つの意味がからみあってそうなっている場合が多い気がします。

具体的に見てみましょう。

すり替える

A：「それ、どういう意味？」、「何が言いたいの？」

この二つは言い方次第で角が立ちます。言われたほうは、むっとするでしょう。

B：「その意味については、いろいろ考えているのですが」、「おっしゃったこと（お言葉）について、ずっと考えております」

丁寧に言うことでいくぶん柔らかく響きそうです。Bの例では、「言いたいこと・意図」を「大切さ・意義（価値）」へと移していることに注目してください。

「言いたいこと・意図」が「ずっと（いろいろ）考える」行為（言葉だけとかポーズだけでもかまいません）によって「大切なこと・意義」に変わるというマジック（レトリック）です。

例の「真摯に受けとめて」とか「丁寧に説明する」というレトリック（騙り）に似ているとも言えます。気をつけましょう。

あなたの「言いたいこと」を、あなたの「言葉の大切さ」にすり替えているのです。相手の顔を立てて角が立たないようにしているとも言えます。

「言いたいこと・意図」も「大切さ・意義」も、「意味」と呼ばれているので、すり替わっても気づかず、ころりと騙されるのです。

大切なことなのでくり返します。

自分の「言いたいこと」（＝意図）が「大切なこと」（＝意味＝意義）に転じていることに、相手はなかなか気づきません。なんだか自分が認められたような気分になります。「そうか、考えてくれているのか」と。（※悪用禁止。）

先送りする

A：「それは意味がないよ」、「意味不明だね」

こんなことを言われたら、腹が立ったり落ちこむに決まっています。この場合の「意味」は「大切さ」であり、それが否定されているからです。

B：「(その意味を) 考えさせてください (考えてみたいのでお時間をいただけますか)」、「ご意向にそえるように精一杯努力します」

このように相手の発言や行為の「大切さ」を未来に投げる、つまり先送りすればいいのです。「意味」という意味ありげで意味不明っぽい言葉をあえて使わないのも、角を立てないための一つの方法でしょう。「ご意向」なんて言い換えは効果的です。

早い話がその場からいったん逃げるわけですが、「大切さ」の判断を引きのぼしただけで否定はしてはいないので、とりあえず相手の顔は立ちます。

未来を指向するという点では、例の「できるかぎり十分に時間をかけて」とか「スピード感をもって」という擬似「未来形」に似ているかもしれません。見習いましょう。

他意をまともにとらない

A：「意味が分かりません」、「伝わってこないのですが」

相手の見せてくれた絵とか詩とか作文とか、相手の発信したツイートとか投稿記事についてのリアクションだと思ってください。相手の行動でもいいです。

相手の作品や発言や行動の意味（意図）が理解できない場合には、他意があるのではないかと疑ってみることをお勧めします。相手に他意があっても、本意がない場合は意外と多いです。

(間違っても、意味（意図）が分からないことを、意義（大切さ）が分からないというふ

うに相手に思わせてはなりません。本意がないくせに、いや本意がないだけに相手は逆上します。「ぎゃーっ！」という感じ。)

「かまってほしい」とか「褒めてほしい」という他意が相手の言動の裏にあるのではないかと勘ぐるとたいてい当たります。みんな寂しいのです。もちろん、この私も。そんなわけで、退屈でしょうが、もう少し辛抱してお付き合いください。

B:「すごい」、「難解だなあ」、「なんか、こう深いですね」、「知性を感じます」、「美しい」、「マーベラス」、「ブラボー」

とにかく褒めてみるのです。褒め言葉をふだんから用意しておいて、練習しましょう。それで相手が満更でもなさそうな表情をしたら成功です。褒め言葉のストックが多ければ多いほどヒットする確率も高まります。

ただし、深入りしてはなりません。突っこんではならないのです。相手はかまってほしかったり褒めてほしいだけで、理解してほしいわけではないからです。他意はあっても本意はないのです。心当たりがありませんか？

ネット上では多いですね。その対応の仕方にも慣れた方が多いように見受けられます。ある意味持ちつ持たれつですから。お互いさまです。みなさま、いつもかまってくださり、ありがとうございます。

ときどき、相手の「本意」(じつはないのです)を文字どおりに取ったり、まともに意図(じつはないのです)に付き合ったために、相手も自分も困ってしまうというケースを見聞きします。受けとめるのは、あくまでも他意です。

*

言い忘れましたが、「かまってほしい」には「ただ、話を聞いてほしい」もあります。この気配を感じたら、間違っても意見を述べたり、よかれと思ってアドバイスをしてはなりません。

もちろん「ブラボー」とか「マーベラス」なんて褒め言葉は禁句です。「うんうん」「そうなの？」くらいにとどめましょう。

「分かる」という相づちは要注意です。「あなたに分かるわけないでしょ」とか「簡単に「分かる」なんて言わないでよ」なんて突っかかってくるかまってちゃんが意外と多いです。心当たりがありませんか？

とにかく深入りは禁物。

「意味が分からない」の両義性

「意味が分かりません」と言えば角が立つ。そうとも言えない場合があります。言われた相手が喜ぶ場合があるのです。

「この文の意味が分かりません」「そうかい、じゃあ、説明しようか」

「この詩の意味が分かりません」「そうですか……。詩は説明するものではないですからね」

「あなたの絵は難解だって評判よ。意味不明で、作者の意図もつかめないって」「だろうね。ふっふっ。そう簡単に分かってたまるか」

*

以上の例では、「意味が分からない」と言われた人は別に怒ってもいないし、落ちこんでもいないようです。そういうケースはいままでに何度も見聞きしてきました。

言われたほうは、「意味が分からない」＝「存在する意義が分からない」＝「存在する価値が分からない」とは受けとめていないようです。

「意味が分からない」＝「存在する意義がある」＝「存在する価値がある」と受けとめているとしか考えられません。

「意味が分からない」という言葉、詳しくいうと「意味」という言葉にある「大切さ・意義」という意味が両義的であると言えそうです。ひょっとすると多義的なのかもしれません。ややこしいですね。

さきほど述べた「他意」があるケースとも言えるでしょう。「意味が分からない」と言われて喜んでいるのですから、そういう人は本意や本心で書いたり創作しているのではないのです。

雑念とか邪念に導かれて、うわの空状態で創作しているとしか考えられません。まともに付き合うと馬鹿を見ます。

＊

「何を書いているの?」「難解な現代詩(純文学作品・哲学書の感想文)だよ」

「何を描いているの?」「難解な抽象絵画ですけど、何か?」

なるほど。自分で想定問答を書いて納得していれば世話ないです。

いったん書かれた言葉は作者を離れて存在する、とかいう理論を思いだしました。作者本人にも作品の「意味」は分からないとか……。美術作品にも言えそうですが、この理論は私には難解で分かりません。

この場合には、「意味ありげ」でもって「言いたいこと・意図」を装い、「意義・価値」を手にしようとするのですから、ずるいとも言えそうです。

話がそれたようなので、戻します。

他人のせいにする

A:「それは違うでしょ」、「ちょっと一言いわせてもらっていいですか」

相手の言動の意味に異議を申し立てているケースですね。こんなことを言えば、めちゃくちゃ角が立ちます。言い方次第では喧嘩腰だとも言えるでしょう。

とことん議論するのもいいかもしれませんが、「言ってしまった」と後悔しているのであれば、次のように続けてみてはいかがでしょうか。

B：1)「こうも考えられます（こう考えたらどうでしょう）」、2)「こんな話を聞いたことがあります（こんなことを言っていた人がいます）」

相手の「言いたいこと」を否定してしまったり、否定しかけた場合には、他にも解釈があるというふうに話をもっていくことで、1) 解釈の多様性でごまかすか、2) 伝聞を使うことによって相手の反撃を他人（仮想の他人でもいいです）に向けてそらすといいかもしれません。

「言いたいこと」を汲んで、同時に「大切さ」を認めてやる

相手の言動の意図（他意）を二つに分けてみましょう。1) 自慢、2) 「かまって（見て）」。ほとんどが、これです。

1) 自慢：

相手が何を自慢したいのかを見きわめて、それだけに絞って褒める。すれ違ったようなら、臨機応変に別のところを褒める。

何を自慢したいのかが分からない場合には、「すごい」「わあ」「感動しました」「ほおほお」「どうやって作ったんですか？」「苦労なさったでしょ」「苦心なさった点を教えてください」「時間がかかったでしょ？」「どこで手に入れたのですか？」「友達に紹介してもいいですか？」「秘訣を教えてください」とか、とりあえず言いながら反応を見て、相手の真意、じゃなくて他意のヒントを探すといいでしょう。

もちろん、しれっと無視する手もありますが、体（てい）よく無視するには経験を積む必要がありそうです。

2) 「かまって（見て）」：

これは多いですね、しかも難物です。こちらの時間を費やす結果になるので、取り合わないのがいちばんだと思います。その人に対しての「いい人」をやめる。これしかない

い気がします。

*

いい人を演じるのであれば、他意ではなく真意で助けを必要としている人に対して演じましょう。これは、このところ私が自分に言い聞かせている言葉でもあります。

This Masquerade

さいきんよくこの歌を聞いたり口ずさみます。カーペンターズによる This Masquerade です。

私にはこの楽曲が、言葉の意味をめぐるゲーム（言語活動とも言います）を歌っているように思えてなりません。「仮面」にこじつけて言えば、言葉は仮面であり、意味は仮面に浮かんでや消える意味のようです。その場合の we とか lonely というのは、「人類だけ」という意味になります。

いまのところ人類だけが、言語活動という孤独なギャグに耽っているのですから。たとえば、私にとって身近な他者である猫には通じません。猫は言葉と物を混同しないのです。

「言葉と事物とは違うんだよ」なんて当り前のことを書いて、わざわざ念を押したフランス人がいたのに、人類はいまだに混同しています。

半分冗談はさておき（半分は本気で言っています）、ヒトとは別の意味での混同を生きている生きものたちは、大切なことをたくさん教えてくれているみたいです。

Are we really happy with this lonely game we play?

(.....)

We're lost in this masquerade.

(この星で) 私たちだけがこんなゲームをしているけど、それで幸せなのだろうか？

(.....)

私たちは、この見せかけの世界の中で途方に暮れている。

*

maskquerade を英和辞典で調べると次の意味がありますが、私はどちらかというと、
2. 寄りの意味に受けとって歌っているのです。

1. 《古》仮面（仮装）舞踏会、仮装
2. 見せかけ、ふり、虚構、見せかけの生活、隠蔽

コロナ禍でマスクをしなければならなくなった当初には、マスク生活の意味で歌って
いましたけど。

(この星で) 私たち人間だけがこんな仮装をしているけど、それで幸せなのだろうか？

(.....)

私たちは、このマスク生活で途方に暮れている。

以下の動画では、マルグリット・デュラスの自伝的小説の映画化作品である「愛人/ラ
マン」(L' Amant) の映像が使われています。YouTube の醍醐味はこういう編集に出会
えることです。

<https://www.youtube.com/watch?v=t90jmRIvz2c>

愛人/ラマン - Wikipedia

ja.wikipedia.org

何度視聴したか覚えていないくらい好きです。音源も大きめで、中途難聴者の私には
聞きやすいです。

(投稿：2023年5月14日 08:18)

#レトリック # SNS 疲れ# 意味 # 他意 # 意義 # 言いたいこと # 意図 # 本音 # 音楽

カーペンターズ # 仮面 # マスク # 仮装 # ミシェル・フーコー # 猫 # マルグリット・デュラス

05/15 そっくりなのは、そっくりにつくってある
から

＊

そっくりなのは、そっくりにつくってあるから

星野廉

2023年5月15日 08:16

目次

言葉の不思議

文字が入る、何かが移ってくる、乗っ取られている

音声が入ってくる、一瞬変になる、震える

表情や身振りが入ってくる、ダイレクトに感じる

人のつくった影が入ってくる、めっちゃ気持ちいい

そっくりにつくってあるもの、そっくりに見えるもの

まとめーそっくりな影たち

言葉の不思議

私は言葉を広く取っています。話し言葉（音声）と書き言葉（文字）だけでなく、表情と身振りも含めています。こうした言葉たちとそのありようを観察することが趣味なのです。

誰もが生まれたときに、すでにあるもの。つねに人の外にあって、それでいてときに人の中に入ったり出たりして、思いどおりにならないという意味で、人にとって「外」であるもの——。言葉については、こんなイメージを持っていますが、イメージですから個人的な印象です。

以前から、不思議でならないことがあります。話し言葉と表情と身振りが、発せられると同時に片っ端から消えていくのに対し、書き言葉だけが残ることで。当り前のようですが、考えれば考えるほど、不思議です。いったいどういうことが起きていて、そう見えるのかが不思議なのです。

この不思議さは、言葉が発せられる、放たれる、つまり人から出ていくときの不思議さなのですが、今回は言葉が人に入ってくる時の不思議さについて考えてみたいと思います。

不思議だと思っままに、あれこれ考えながら言葉をつづっていくという方法を取ります。こういう見切り発車を書くときの私の癖なのです。

文字が入る、何かが移ってくる、乗っ取られている

「何か」に「何か」を見てしまう。

文字や文字列や文章を見て、それを読むときには、人は「何かA」に「何かB」を見てしまっている気がします。「文字」と「その文字で人が見てしまうもの」はふつう似ていません。まして同じではありませんが、その異なる二つのものが、人においては同居しているのです。

「猫・ネコ・ねこ・neko」という文字をご覧ください。みなさんが、この文字を見て、頭に浮かべたものと似ていますか。似ていないのに、見てしまう（思いえがくとか思いうかべるとか呼びさまされる）のです。

不思議ですよ。文字を学習した成果だと言われれば「ああ、そうですね」と納得する自分と「えっ、どういうこと？」と納得していない自分がいます。

これは、話し言葉や表情や仕草でも言えることのようなのですが、文字の場合には、人の外にあって残っているものですから確認しやすい点が、特徴的です。人の外にあって残っているの、他の人といっしょに見て確認できるという意味です。すごいですね。不思議です。

*

文字からなる文章を読むとき、人は一種の催眠状態におちいつているのではないかと。

一時的に変な状態になっている、何かに乗っ取られている、何かが移って生きている。自分の催眠状態と変な状態を柵に上げて、そんな不穏なイメージをいただきます。

音声が入ってくる、一瞬変になる、震える

信じる時、人は一瞬あるいは短時間、自分を何かにゆだねます。心ここにあらず。目は宙を見ている。思考停止、判断停止。営業停止。忘我。頭の中が真っ白。言葉になんねー。

(拙文「信じる時、人は一瞬変になる。」より)

話し言葉である音声が入ってくるとき、人は何かに自分をゆだねて、どこかに行っている気がします。音声はすぐに消えますから、一瞬とか短時間のことです。

音声には有無を言わせないところがあります。文字の場合には見たくなければ、顔をそむけたり、目を閉じればいいのですが、耳はそう簡単にはふさぐことができません。

聞きたくなくても聞こえてしまうのです。有無を言わずに入ってくるとも言えるでしょう。不思議です。こうやって言葉にすると、分かったような気持ちになるのですが、ぜんぜん分かってなんかいないのです。不思議でなりません。

やはり音声である、音楽をイメージするとリアルに感じられそうです。音楽は否応なしに入ってきます。どうしても堪えられなくなったら、その場を去るしかなさそうです。

ぐいぐい入ってくる。これが音声の特徴ですが、入ってきたときには、頭だけでなく体に、こう、ぐっと来ませんか。大げさに言うと、震えるのですが、音声は波だと実感します。

*

話し言葉としての音声には語義（意味）があります。文字で書けば「猫・ネコ・ねこ・neko」ですが、訛りや発音や発声の個人差を除けば、同じ音として入ってきます。

この音で、聞いた人が何をイメージするかは、文字の場合と同じく、確認できません。何をイメージしたかを言葉（とくに文字）にして報告するしかないという意味です。入ってきた言葉が、中でどうなっているかは、言葉でしか確認できないのですが、変なというか不思議な話です。

*

言葉が中に入るとき、人はいったん（一瞬）その言葉を信じます。信じないと受けとめられないからです。「馬鹿！」と言われて、「馬鹿！」と一時的に言われたことを信じないと反論も批判も泣き寝入りもできないという意味です。

いったん入ってきた言葉を信じてから、事後処理として反論とか否定とか泣き寝入りが生じます。

「馬鹿！」（と言われる）

⇒ 「はいはい、そうですね」（いったん信じる）

⇒ A 「いや、やっぱり、そんなことはない」（否定する）、または、B 「はいはい、やっぱり、そうだよね」（再認識する）、または、C 「ふーん」（面倒だから取り合わない）、または、D 「……」（言われたことを忘れる）

いずれにせよ、太文字の部分をスキップするわけにはいかないのです。たいていは、CかDのリアクションに落ちつくでしょう。誰もが、情報処理に忙しいからです。

ほとんどの場合、言葉が入ってきても、中ですぐに消えるのですが、これは人とその身体に備わった「知恵」です。さもないと体と心が持ちません。だいいちヒトの情報処理能力と保存（記憶・記録）する容量は、各人が想像しているより、はるかに小さいようです。

表情や身振りが入ってくる、ダイレクトに感じる

表情や身振りは視覚言語（手話も含まれます）と呼ばれることがあります、おもに見て受けとります。

話し言葉と書き言葉との決定的な違いは、表情と身振りは生まれたての赤ちゃんの中にも入ってくるという点です。すごすぎます。不思議ですね。考えるとわくわくドキドキします。

*

赤ちゃんを見ていると意味と無意味について考えずにはられません。赤ちゃんの表情や仕草や声が信号に感じられるからです。信号というのは、前提として意味やメッセージを想定しているわけです。つまり、はらはらドキドキです。

しかも点滅してあおることもあります。この泣き声はおむつを替えてほしいなのか、お乳がほしいなのか、どこかが痒いのか、痛いのか、暑いのか、それとも熱いのか？
こんなふうに解釈ごっこになります。

初めてのお子さんだと心配でしょうね、不安でしょうね。解読地獄におちいる場合もありそうです。

でも、赤ちゃんとお母さん、お父さん、その家族の人たちの様子を見ていると、赤ちゃんの発するあらゆる信号をつねに正しく受けようとしているわけではないのに気づきます。

受け流しているように見える場合がよくあります。ほほ笑みにほほ笑み返す、ほほ笑みにしかめっ面をしてみせる、ほほ笑みをただ眺めている。泣いても知らん顔。

それだけでいい。そこにいて笑みを浮かべているだけでいい。そこで泣いているだけでいい。そこにいるだけでいい。

信号は解読すべきものではなく、ただそこに「いる」という、おおらかでおおまかな印として、そこに「ある」かのように見えます。

ただ「いる」という信号として、ただ「ある」だけ。

意味はそこにあるというより、人の中にあるのでしょうか。世界が意味だらけなのではなく、人の中が意味だらけなのでしょう。人は自分の中でたちさわぐ「意味の立ちあられ」を静める術を心得ているようです。

(※以上は、拙文「意味が立ちあらわれるとき」から引用しました。)

＊

意味と無意味のはざまにいても可能だという意味で、表情や身振りにはダイレクトに人に「何か」を感じさせる力があると言えそうです。

ダイレクトというのは、いわば無媒介的に表情が表情を、身振りが身振りを誘発する、つまり受け手が相手の表情と身振りを模倣する（「なぞる」）という意味です。

相手の動き（表情も動きです）に合わせて、こちらも心や頭の中で——あるいはじっさいに——動くと言え、お分かりいただけるでしょうか。

身体的レベルでの「うつる」と「伝わる」が起きるのです。必ずしも「通じる」わけではありません。なぞってうつるのです。「何か」が伝わることは確かでしょう。この伝わり方をプリミティブと言う人もいそうです。

その伝わる「何か」は各人の中で起きていることですから確認できません。確認するためには、やはり言葉にして報告するとか説明するしかなさそうです。

身も蓋もない言い方になりましたが、じっさいにはそんなことはありません。みなさんの中で起きていることです。ご自分の日々の体験を振りかえってみてください。

というか、いまも、その「何か」があなたの中で起きているのです。

人のつくった影が入ってくる、めっちゃ気持ちいい

ここで、人のつくった影も、言葉のように人の中に入ってくることに気づいたので、取りあげます。

人のつくった影とは、写真、絵、映画、映像、動画をイメージしてください。ぜんぶ、「うつる・うつす、映る・映す、写る・写す」の産物です。広く取ると本や絵本も入りますが、上で取りあげた文字がからんでくるので、ここでは無視します（いつかもっと体調のいいときに考えます）。

＊

つくられた影には特徴があります。枠があるのです。フレームとも言います。写真や映画には枠があります。うつす紙やスクリーンにも枠というか限度があります。映画であれば時間的な枠もあります。上映時間というか作品の時間です。

つくられた影には筋書きやストーリーもありそうです。筋書きとはつくられたものです。物語であり、フィクションのことです。だから、わくわくするのです。ときどきもするのです。ぞくぞく、あらら、という感じです。

人はこのわくわくときどきぞくぞくを求めて、自分たちのつくった影を自分の中に入れます。入れるとめっちゃ気持ちいいからという単純な話に落ちつきます。

このあたりの話は、拙文「意味のある影、意味のない影」の一部を引用したので、興味のある方は、お読みください。

＊

ところで、人のつくった影は、どうして、入れるとめっちゃ気持ちがいいのでしょうか？

入れるとめっちゃくちゃ気持ちよくなるように「つくってある」からにはほかなりません。人のつくった影の、文字や音声（人がつくったというよりも備わっている）に比べての大きな違いは、それです。

「猫・ネコ・ねこ・neko」という文字は猫に似ていますか？ 「猫・ネコ・ねこ・neko」と発音したときに出てくる音声は猫に似ていますか？ ぜんぜん似ていませんよね。

それに対し、「猫・ネコ・ねこ・neko」に似せて「つくった」影は、似ています。どうか、たいてい「そっくり」なのです。絵、写真、映画、ネット上の静止映像や動画は、ふつう猫にそっくりにつくられています。

複製、似せたもの、似たもの、似せもの、偽物——お好きな言い方を選んでください。共通点は「別物」だということです。現物や実物ではないという意味です。

でも、「似ている」し「そっくり」なのは、そうつくってあるからです

そっくりにつくってあるもの、そっくりに見えるもの

「そっくり」に見えるのは、それに愛着を覚えないからだという場合もあります。「そっくり」な点に関心があっても、そっくりではない点、つまり個性はどうでもいいのです。

「そっくり」を感じているときの人の眼差しは残酷だと言えます。差別し排除しているからです。しかも排除しているものが見えていません。

人はそっくりなものに囲まれて生きていますが、そっくりなものは二つに大別できます。人が「そっくり」につくったものと、人の目に「そっくり」に映るもの（自然界にいるもの、あるもの）です。

*

人がそっくりにつくったものが並んでいるさまは壮観です。一方、人の目に「そっくり」に映るから並べられているものたちのありようには、人を一瞬すくませるものがあります。

スーパーに並んでいる製品たちと、スーパーで並べられている生きものたちの遺体を思いうかべてください。

後者を目にして一瞬すくむのは、無言で並べられているものたちに一瞬命を感じるからにちがいありません。そっくりに見えるというのは、感情も命も無視されているという意味なのです。だから並べられるのです。

飼育されている動物たち（囚人）、スーパーで並べられている魚たち（ご遺体）はどれもそっくりに見えませんか？ 私にはそっくりに見えます。

人も——生きている場合も生きていない場合もあります——ずらりと並べられることがあります、そんなときの人びとはそっくりに見えます。一部の人たち——たいてい上（トップ）にいます、たった一人の場合もありますね——によって感情と命を無視されているからでしょう。その無視は感染します。上から下へと移るのです。

「そっくり」は恐ろしいのです。

*

ところで、似ている（印象）と同じ（同一）は違います。

私たちは「似ている」の世界にいると言えそうです。器具や器械や機械をつかわないと「同じ（同一）」を確認できないからです。

人は「似ている」という印象の世界（見える世界）から「同一（同じ）」の世界（観念の世界）を夢見ているのかも知れません。

とりわけ、工学や自然科学、そしてメタ指向（思考ではありません）が強く、それがオブセッションになっている哲学は、「同一（同じ）」の世界を夢見ている気がします。

このうちで、ある程度うまく行っているのは工学でしょう。コンピューターや重機や電気メス、そしてミサイルは「同一（同じ）」の世界に頭を突っこむことなしには（体は突っこんでいませんけど）動かせないからです。

まとめーそっくりな影たち

人類および個人という意味でのヒトの言葉とのかかわりを、時系列でまとめてみましょう。

狭い意味での言葉（話し言葉と書き言葉）を持つ以前の段階では、ヒトにとって表情や身振りが言葉であり（ほんまかいな）、ある意味ではダイレクトに（うさんくさい言い方でごめんなさい、私もうさんくさいと思います）世界と触れあっていたのかもしれない。

やがて（適当な言葉ですね）、話し言葉を持つようになり、見よう見まねで言葉を身につけ、ヒト同士でつかようになった（まるで見てきたような嘘）。話し言葉をヒト以外の生き物や森羅万象にまで当てはめる（拙文「【戯言】あなたと呼びかけて手なずける」）ようになった（文字どおり戯言です）。この辺から変になり、ぶるぶる震えることを覚えます（嘘つけ）。

なぜか（いい加減ですね）、書き言葉を持つようになって、もともとヒトに備わっていた「何かに何かを見る」に拍車がかかり、何かが移ってくる、何かに乗っ取られるという事態が生じ（もー、勝手にしてください）、ヒトは言葉の世界に生きるようになります。

上記の過程で、ヒトは世界や森羅万象に似ていたり、そっくりな影（映したり写したもの）をつくって、「そっくり」を楽しむ快楽を覚えました。現物や実物や「そのもの」にたどりつけない代償でしょう（※註あり）。自分のつくった影を見て、めっちゃ「気持ちいい」状態になるという自己完結的な快楽です。

【※註：「現物や実物や「そのもの」にたどりつけない代償でしょう」とは、「移る・移す」（移動する・させる）ことができないから、その代わりに「映す・映る」と「写す・写る」で済ますという仕掛け（機械）＝仕組み（システム）＝手品（錯覚製造装置）をつくったのです。絵、文字、印刷、電話、映画、動画、インターネット、要するに複製（「似ている」と「そっくり」）の製造とその拡散のことです。】

その快楽にヒトは嗜癖し依存して、いまに至ります。

分かりやすく言うと、「あそこ」「あれ」「なに」（何なのかは人それぞれですが、これまでもっともたくさん描かれ写され映されてきた対象でしょう）の代わりに「あそこ」「あれ」「なに」の絵や写真や画像で萌えるようにと、ヒトは進化したのかもしれませんが。（※「あそこ」「あれ」「なに」については、拙文「【小話】短い反対は長いではないという話」が詳しいです。）

ほら、世界は、人のつくったそっくりな影たちに満ちています。印刷物もネット上の映像も、そんなんばかりです。

＊

人は、影だけでなく、「そっくりなもの」に囲まれて生きていますが、上で述べたように、「そっくりなもの」は人のつくったものと、自然界にいるもの（あるもの）の二つに大別できます。

前者は気兼ねなく消費できますが、後者の場合にはその自由や命を奪わなければ消費できないので、人はある程度の後ろめたさを覚えます。

そんなわけで、人が「そっくりなもの」をせっせと量産するのは理にかなっていると言えるでしょう。「そっくりなもの」は自分でつくったほうが——つくったものには感情や命がないので——心置きなく利用したり消費できるという意味です。

＊

いまや人は、「似ている」の世界というよりも、「そっくり」の世界に生きているかのようです。この世界では何にそっくりなのかが不明になっているどころか、しだいに問題にされなくなっています。真偽の境も曖昧だし不明です。それが急速にエスカレートしています。

そっくりな点だけがそっくりなのです。目にし耳にし舌であじわい肌で感じているものの多くが、複製の複製の複製……なのです。一方で、目にし耳にし舌であじわい肌で感じているものの多くが、複製として残され続けているのです。

食べるよりもそっちのほうが気になって忙しい。景色を見るよりもそっちのほうが気になって忙しい。人と時間をいっしょに過ごすよりもそっちのほうが気になって忙しい。生きるよりもそっちのほうが気になって忙しい。

そっちというのは、そっくりをつくって保存すること。

文字にして、映像にして、音声にして保存するほうが大切。生きるより大切。

ひょっとして、そっくりに乗っ取られるのではないのでしょうか。

誇張でしょうか。妄想でしょうか。この時点でも、見たり聞いたり嗅いだり味わったり触れたりして楽しむものが複製にされつつありませんか。どんどん映像や音声や文字としてネット上で投稿・配信され、ほぼ同時に保存・拡散されていませんか。

撮る。つまり、映す、写すです。撮影（影を撮る）の「撮」は、手元にある漢和辞典によると親指と人さし指と中指の三本でつまみとることだとか書いてあります。

この三本の指ってよく使いませんか。これだけあれば操作も入力もできます。世界中で、この三本の指をつかって「そっくり」なことをしています。これも、そっくりにつくってあるからに他なりません。機械がそうつくられているのです。

指三本でパネルをタッチして撫でまわす世界。タップ、フリック、スワイプ。世界を操作するのは簡単。世界は手のひらに乗る。世界はちょろい。

複製としての世界。そっくりとしての世界。世界にそっくりな世界。いや、気分は世界そのもの。世界はちょろい。世界は自分のもの。

そっくりなのはそっくりにつくってあるからでしょう。何にそっくりなのかはもはや不明。そっくりだけが空回りしている——。複製の複製の複製……。引用の引用の引用……。本物と実物のない複製。起源のない引用。

人は自分のつくったものに合わせて、そっくりなことをこの星じゅうでやっている。みんなが一樣にうつむいて、手のひらの上の板を指で撫でまわしている。空は見ない。天

に用はない。手のひらに空がある。天がある。うつむいている限り、怖いものはない。

そっくりはうつるのです。うつるんです。そう考えると、そっくりは恐ろしい。

なんでそんなことをやっているのでしょうか。気持ちいいからでしょうか。気持ちいいというよりも、やめられなくなっているのではないのでしょうか。嗜癖です。脳内なんとがどぼどぼ分泌。

妄想でしょうか。もうそうかもしれませんよ。

※この記事は拙文「中に入ってきたときに、中で起きること」に加筆したものです。言葉（意味・複製）が人の中に「入る・出る」——といったことに関心が出てきたので（現にPCやスマホを使用しているいまも「入ったり出たり」していますよね?）、ここで一度過去の記事を読みかえしたうえで、新しい記事を書こうと思います。

（投稿：2023年5月15日 08:16）

#複製 # 似ている # 偽物# 言葉 # 話し言葉 # 書き言葉 # 文字 # 表情 # 身振り # 影

05/17 人が「決める」、「決まる」は「あらわれる」

＊

人が「決める」、「決まる」は「あらわれる」

星野廉

2023年5月17日 09:18

目次

決める、決まる

決め手

レトリック

人の領域

決める、決まり、決まり文句

決まる、起きる、あらわれる

決め手を欠く「決まる」

決める、決まる

「AはBである」とか「AだからBである」は決めています。「〇〇である」は「〇〇と決めた」なのです。

いま上で書いた文も決めたものです。誰が決めたのでしょうか。この文を書いた人でしょう。つまり、私です。

一方で「決まる」場合もある気がします。

「AはBである」とか「AだからBである」と決まったという場合です。誰が決めたかというより、決まったという感じがするのです。感じがするのですから印象であり、印象であるからには検証ができません。

雲をつかむような話で申し訳ありません。

決め手

「AはBである」とか「AだからBである」が決まったと私が感じる時、その決め手は何なのかと私は考えます。根拠というより決め手です。根拠は建前っぽいのです。そもそも漢語には建前っぽさがあります。

嘘っぽいという意味です。何かを隠している気がします。都合の悪いこと、言えば体裁が悪いことを、隠しているのでしょう。

人には恥という感情があります。プライドと近い感情です。

＊

以下に、何かが決まるときの決め手と思われるものを、思いつくままに列挙します。

気分、機嫌、気持ち、天気、陽気、気候、雰囲気、空気、気力、気質、気性、病気。力関係、権力、権威、武力、腕力、兵力。体、体力、体調、体感。人間関係、血縁、上下、階級、カースト、序列。声の大きさ、声の質、声の肌理・肌触り。流れ、雰囲気、「みんながやっているから」、「みんなが言っているから」、「何となく」、「え？ 分かんない」。

約束、決まり、ルール、しきたり、掟、法、法則、法律。癖、口癖、筋、筋書き、ストーリー、物語、型、流儀、パターン、定型、紋切り型、決まり文句。説、伝説、神話、言い伝え。新旧、古い・新しい、伝統・改革、保守・革新、古典・新種。命令、指示、教え。付度、迎合。衝動。

因縁、運命、宿命。論理。

句読点で区別はしていますが、便宜的なものです。重複する部分もある気がします。

なお、ここでは研究をしているわけではありません。できるわけがありません。お遊びですので無いものねだりはお勘弁願います。

レトリック

「決める」は格好悪いのです。体裁が悪いので、体裁をつくろう必要があります。

それが「〇〇である」「〇〇だ」「〇〇ということになりました」です。つまり言葉の綾、レトリックの問題なのです。レトリックは保身のために使われることが多いのです。

「〇〇である」「〇〇だ」と言うと、どうしてそうなったのか、どうしてそうなのか、言い換えると誰がどういう経緯で決めたのかが不明になり不問に付されます。これは隠蔽であり保身でしょう。

決めたことで状況がとんでもない方向に行ったときに責任を回避するための方便とも言えそうです。へたに「決めた」なんて言えないのです。

逆に言うと、「〇〇だ」と私が決めたのだ」なんていけしゃあしゃあと口にできる人は、失うものが何もない人か、あるいは最高権力者（きどりやもどきでもかまいません）のどちらかでしょう。

*

こうした事態が露呈するのは、世界が危機的な状況に陥ったときです。こうした事態は大昔から続いているのですが、平時にはなかなか感知できないのです。

危機的な状況を見聞きしながら、自分のまわりにも、似たようなことが、ささやかな形であったなあ、昔からずっと続いているなあと感じるのです。

人の領域

「決める」は人為、「決まる」は人の領域ではない。

そんな気がします。

「決める」は人為とは、人が決めるという意味です。

「決まる」が人の領域ではないとは、ややこしいですね。言い換えてみましょう。非人称的とか、ニュートラルに近い気がします。

これを神とか超越者と言い換えても大差はないと思われます。

その意味でも、「「〇〇だ」と私が決めたのだ」なんていけしゃあしゃあと口にできる人は、失うものが何もない人か、あるいは最高権力者（きどりやもどきでもいいです）のどちらかでしょう。人を超えたものに対する気兼ねも畏敬の念もないわけですから。

決める、決まり、決まり文句

「黒いカラスは白いサギだ」

私は（が）「黒いカラスは白いサギだ」と決めた。

黒いカラスは白いサギだと決まった。

トップが決めたことで「黒いカラスは白いサギだ」と決まったことが、決まり（ルールや法律）になるわけですが、上から下までみんなが思考停止して、この文句を進んで（付度し率先して）口にしたり書いたりするようになる——独裁の自動化と完成形のことです——、つまり決まり文句になるのがいちばん恐ろしいと言えそうです。

決まり文句とは、ある言語や方言における慣用的な言い回しという意味ですから、もはや強制されて口にしていくという感覚はなくなります。

話を戻します。

決まる、起きる、あらわれる

人が「決める」。「決まる」は「起きる」とか「あらわれる」。そんな気がします。

「決まる」の起る領域とは、広い意味での「気・氣・き・け」だという気もします。人に深くかかわりながら、人が直接的にかかわっていないというイメージです。

「決まる」とは、たぶん抽象と具象を兼ねそなえていて、人の外にあり、人の中に入りたり出たりして、その人の思いどおりにならない性質が、言葉、とりわけ文字に近い気もします。

とはいえ、まだ決めかねています。決め手を欠くということです。決められない気もします。決まる気配も感じられません。

でも、わくわくするので考えてみたいです。

決め手を欠く「決まる」

決め手を欠くことが「決まる」のもっとも注目すべき特徴だという気がします。

何かが起きたり、人が何かをしたとき、人は自分がそう決めたからそうなったと口にできます。言うことならいくらでも言えるのです。

でも、それはあくまでも人が決めた（つまり言った）ことであって、それ以上でもそれ以下でもない。「決まる」は、おそらくそれとは関係なく起きるのでしょうね。決め手を欠くとは、そういうことです。

人にとって、「決める」は「言う」（「言葉」）なのです。一方、「決まる」は人の「言う」（「言葉」）とは関係がない。人は「決める」という言葉を作った（つまり決めた）から、そう口に出しているだけという意味です。

こうも言えるでしょう。「決める」とか「決めた」は人の口癖であり、「決まる」はきつと言葉ではないのだろう、と。

雲をつかむような話で申し訳ありません。じつのところ、雲をつかもうとしているのです。

※この記事は、以下の「「決める・決まる」の決め手」に加筆したものです。

「決める・決まる」の決め手 - 星野廉の日記

「AはBである」とか「AだからBである」は決めています。「〇〇である」は「〇〇と決めた」なのです。いま上で書いた文も決め

horensou.hatenablog.com

なすがまま、されるがまま - 星野廉の日記

決めるではなく、決まる読めてないんです。なすがまま、されるがまま 決めるではなく、決まるかける。かかる。橋を架ける

horensou.hatenablog.com

「たったひとつ」感、「たったひとり」感 - 星野廉の日記

無文字という選択 決まり「それだけ」感 多なのに一決まりに逆らう、一に抗う 抽象と具象を兼ねそなえた言葉 錯覚は最大の

horensou.hatenablog.com

(投稿：2023年5月17日 09:18)

#言葉 # 決める # 決まる # 決まり # 決め手 # 決定 # 決断 # 独裁 # 体裁 # 辻褄 # 日本語 # レトリック

05/18 「何か」に「何か」を当ててみる

＊

人が「決める」。「決まる」は「起きる」とか「あらわれる」。そんな気がします。
(拙文「人が「決める」、「決まる」は「あらわれる」より)

かた、形、型——。たとえば、「かた」という音に、「形」や「型」という文字を当てる。

なるほど……。一瞬「当たった」つまり「つながった」という感じがします。しっくりするし、「その通りだ」と得心してしまうのです。でも、「当たった（つながった）」のでしょうか。「当たり（つながり）」なのでしょうか。

「何か」に「何か」を当てる——。この場合の前者と後者の「何か」は、そもそもそれぞれが「何か」に「何か」を当てた結果としての「何か」であることに気づきます。「かた」（和語・ひらがな）と「形・型」（漢字・漢語）のことです。

言葉ではないものに「かた」と「形・型」というもの、つまり言葉が当てられたという意味です。

そうであれば本当に「当たった（つながった）」のか、単に「当てた（つなげた）」結果としてそうなっているのか、その「当たり（つながり）」加減が不明に思えます。本当なのか適当なのかテキトーなのか妥当なのか穏当なのか。どの「当」なのか分からないのです。

言葉ではないものに当てた「かた」も、おなじく言葉ではないものに当てた「形・型」も自明なものではな。不明に不明を当てている。何に何を当てたのかが不明。

＊

言葉の中に言葉があり、言語の中に言語があるために、言葉に言葉を「当てる」ことができるのですが、不明なものに不明なものを当てていると言えます。

「かた」に「形」や「型」を当てて、「なるほど」と分かった気分になる。じっくりするのは「当たり」ではなく、むしろ「当たり前」なのです。和語と漢語からなる（言葉の中に言葉がある）日本語では、そういうふうにならされているのです。ある意味やらせなのです。

お察しのとおり、日本語における翻訳や言葉の成り立ちだけでなく、言語活動にかかわる話をしています。今回からしばらく、こうした話を記事にしていく予定です。

目次

かた、かたる

あてる、あたる、ぼうーっとする

つなぐ、つなげる、つながる

多面的なもの同士はどこかでつながる

血縁、ツリー構造

かた、かたる

かた、形、型、かたる、語る、騙る、カタル、カタルシス

＊

当てる、当ててみる、そのうちに当たるかもしれない。当てるも当たるもころあい。正しい正しくないとは話が違ふ。当たりなどないのではないか。辺りを探るくらいが当てるであり当たるだろう。

＊

「かた」に「形」と「型」という漢字を当ててみます。音に文字を当てるとも言えるでしょう。ひらがなに漢字を当てるとも言えるでしょう。大和言葉つまり和語に漢字とか漢語を当てているとも言えそうです。

「形」と「型」を「かた」ではなく「けい」と読めば、もともとこの島々にあったと言われる音（発音）の訛りで、大陸から渡ってきたと言われる文字と音を読んでいると言えるかもしれません。

とはいうものの、いま上で挙げた文字（形・型・かた・けい）も読み方つまり音（発音）も、いまのものです。大陸から文字が伝わってきたころとはかなり変わっていると考えるのが自然でしょう。

＊

「カタル」と「カタルシス」は上の文字列の中では、音以外のつながりはないように見えます。いわゆる駄洒落ではないかと思う人がいても不思議ではありません。とはいえ、ここでは語源の面子を保ったり、語源の辻褄合わせをしているわけではありません。

さらに言うなら、いわゆる論理の顔を立てたり、論理の辻褄を合わせている場でもありません。深くも広くも知ろうとしない素人が、わくわくするために語っているだけです。

語ることで、しゃあしゃあと何かが外へと出ていき、いわゆるカタルシスが起る。こう考えるとつながります。私も心当たりがありますが、悩みや苦しみを人に語るとすっきりします。問題が解決しなくても、何かが出た気がします。

語るはカタル。語るはカタルシス。

ここではさかんに掛け詞をします。駄洒落は掛け詞の別称であり蔑称でもあります。わくわくするためには、どちらで呼ばれてもかまいません。どちらも、別に蔑ろにするつもりはありません。

あてる、あたる、ぼうーっとする

当てる、当たる、決める、決まる、あらわす、あらわれる

＊

「決める」は人のすることであり、「決まり」は人を越えたところで起きるもの。「当てる」は人のすることであり、「当たる」は起きるもの。「あらわす」は人のすることであり、「あらわれる」は「あらわれる」もの。

いや、それどころか、おそらく「当てる・当たる」や「つなげる・つながる」も「決める・決まる」も「あらわす・あらわれる」も、人を越えたところで起きるものであり、あらわれるもの。

他動詞とか自動詞という文法用語をつかって横断し、理屈をつけて説明することもできそうですが、横歩きするよりも真っ直ぐに歩いて迷う、つまり個別の細部にこだわるほうが性に合っています。直線上を歩いて迷うことが私にはあります。

＊

「かた」に「形」や「型」を当てると、一瞬決まった（つながった）ように感じます。「なるほど」、「そうだ」、「これこれ」——当たったという気がするのです。語るからでしょう。要するに騙りです。錯覚とも言えそうです。

なじんだ言葉に置き換えただけなのですが、それが「分かった」「大当たり」「どんびしゃり」「的を射ている」と感じられるのです。言葉に言葉を当てる、言葉に言葉を重ねるといふ、置き換えと言ひ換えが基本である辞書はそういう仕組みで成り立っているのかもしれない。

当ててみて当たったと感じる。

これは、籤（くじ）や標的に当たったときと同じ感じですから、自分が当てたとか自分がやったというよりも、人を越えたものが働いているところで、起きたとか起ったような思いを私はいだきます。人それぞれですが。

＊

「かた」に当てた「形」や「型」という文字を見ていると、「あらわれた」のではないかとすら私には思えます。

「かた」を音や声として聞いたり、あるいは唱えたさいに、頭か心か知りませんが、浮かんでいるイメージと、「形」や「型」という文字を見ているときに浮かぶイメージは違います。

それでいて、音に文字を当ててみて、「当たった、決まった、つながった、起った、あらわれた」とあっけにとられます。「あっけ・呆気・あきれる・呆れる・呆然となる」のです。

ほうける、呆ける、耄ける、惚ける、ほおける、蓬ける。

ぜんぶ頭と関係ありそうですね。「当たった・つながった」と感じるときには、頭がどうかしているにちがいありません。そういうときには、いわゆる判断停止とか思考停止が起きているはずですよ。

要するに、ぼうーっとしているのではないのでしょうか。わくわくするのもそうでしょう。

＊

「かたる」に、「語る、騙る、カタル」を当てたときも、一瞬ぼうーっとします。「そうそうこれなのよ、まさにそういうこと」。しゃあしゃあと何かが流れ出ていくカタルシスに似ている気がします。

当ててみる時にはそれなりにぼうーっとしますが、当たったと感じたときには、もっとぼうーっとするというか、ぼうーっとしているあいだが少しだけ長い気がします。

「呆ける」の度合いが高まっているのです。

つなぐ、つなげる、つながる

つな、つなぐ、つなげる、つながり、きずな、気づく、築く

つなをつなぐ (つなげる)、つながりに気づく、絆を築く

かたる、語る、騙る、カタル、カタルシス

あたる、当たる、中る、カタル、カタルシス

＊

「何か」と別の「何か」を当ててみて、つながるかどうかを考えてみましょう。

- ・「語る」と「カタル (カタルシス)」は似ている。(印象・類推・感想)
- ・「語る」と「カタルシス」が起きる。(假定・類推・相関関係・因果関係)

たしかに、語る、つまり物語る行為は、カタルシスを起こしそうだし、これまでにそんなことが語られてきたようです。

- ・「語る」は「カタル (カタルシス)」のようだ。(直喩・明喩)
- ・「語る」は「カタル (カタルシス)」である。(隠喩・暗喩)
- ・「語る」は「カタル (カタルシス)」。(掛け詞)

比喩も言葉の音や意味やイメージや形 (文字) を掛けているわけですから、掛け詞の一種です。駄洒落は、掛け詞や比喩の別称であり蔑称でもあると言えそうです。

＊

- ・「あたる (中る)」は「カタル (カタルシス)」である。

「あたる」には「飲食物や暑気・寒気がからだにさわる。毒気・悪気の害を身に受ける」(広辞苑) という語義があります。この意味のときには「中る」とも書くそうです。中毒や「どくあたり」を連想します。

素人っぽい言い方になって恐縮ですが、毒にやられた体液が体外にしゃあしゃあ、またはどくどくと流れ出るのが、カタルやカタルシスの本来の意味だろうととらえています。

精神的とか心理的な意味あいを含めて、広義の浄化ということでしょうか。体や心に悪いものや毒を外に出す感じ。

「あたる（中る）」は「カタル（カタルシス）」である。」というフレーズは、語源的なつながりのない言葉同士が奇しくもつながっている例だと言えます。このフレーズを至言だと感じる人もいるでしょうし、駄洒落だと言う人がいても不思議ではありません。

多面的なもの同士はどこかでつながる

ことや、ものや、ありようは、多面的なものですから、たとえ別の名前で呼ばれているもの同士でも、当ててみると、どこかでがつながることがよくあります。

(仮に百の要素や属性のあるもの同士をくらべれば、どこかに共通点や類似点が見られると言えば分かりやすいかもしれません。)

猫は犬に似ている——。そう言われると、たしかに手足の数は同じですし、両方とも毛が生えています。

猫は人間に似ている——。似ている気もするし……。

ほんとうに「つながった」のか、「当てた」結果としてから「つながった」ように見えるだけなのか、その「つながり」が不明なのです。

「つながった」として、それは偶然とも言えますが、言葉と事物の関係はそもそもが偶然っぽいとつねづね感じています。たとえば、生きものの猫が日本語の猫という言葉と「つながる」必然は全然ないわけですから。当然です。他の言語や方言でも同じです。

ただし、別個の名称で名指されているもの同士を当ててみることで立ちあらわれるつながり、つまり偶然の産物であるつながりを見ることで、名指されていないつながりを感じ分けられるかもしれません。

猫はペンギンに似ている——。うーむ。

猫は星に似ている——。うーむ。

「つながった」つまり「つながりがある」のか、「当ててみた」結果として「つながりがある」ように見えるだけなのか、やっぱりその「つながり」加減が不明なのです。

猫は星だ——。

詩に似ていますね。つながりとは詩のようなものかもしれません。

血縁、ツリー構造

「語る」と「騙る」は語源的なつながりがあるようですが、つながりをさがすさいには、語源が役立つこともあれば邪魔になることもある気がします。

群れる生きものであるヒトは血縁関係を重んじますが、事物についても血縁や枝分かれする木のイメージ（ツリー構造）にとらわれています。人情なのです。これを重んじない人は人でなしかもしれません。

一方で、固定された「つながり」があって「つながる」だけではなく、ジャンプ（飛躍）して、どこかとどこかや、何かと何か「つながる」というのも、おおいにあるように私は思います。

＊

血縁や木のイメージは、機械や AI に教える、つまりプログラミングするのに適しているから余計に厚遇されているのですが、血縁やツリーという比喩（何かに別の何かを当てること）がツねに有効である保証はありません。

「固定された「つながり」があって「つながる」だけではなく、」と上で述べましたが、「固定された「つながり」が疑わしく思えてきました。

「「何か」に別の「何か」を当てること」の「何か」と別の「何か」がすでに比喩（置き換え）であるからです。

言葉ではないものに言葉を当てる（要するに置き換えであり、すり替えです）という言語活動そのものが「当てる」を基本にしている語り＝騙りだという意味です。

そうであれば、あてど（当て所・宛て所）もなく当てるを繰り返すしかなさそうです。これが人にとっての自然であるにちがいありません。

要するに、人にとって「当たる」なんてないのです。「当たる」という言葉があり、それを人がつかっているのは自暴自棄になった人の腹いせにちがいありません。

冗談はさておき、「当たって砕けろ」、「下手な鉄砲も数打ちゃ当たる」です。人にはとらえられないものである「言葉ではないもの」を相手にしようというのですから、それしかありません。かりに「当たって砕けろ」はあったとしても、「下手な鉄砲も数打ちゃ当たる」はありえなくて「下手な鉄砲は数打っても当たらない」という意味です。

05/19 「かた」が「かたち」を「なす」さまが
「あらわれる」

＊

当てる、当たる、決める、決まる、あらかず、あられる
つな、つなぐ、つなげる、つながり、きずな、気づく、築く
つなをつなぐ（つなげる）、つながりに気づく、絆を築く
（拙文「何か」に「何か」を当ててみるより）

「当たった」と感じる時の高揚を求めつづける

言葉ではないものに音を当てる。
言葉ではないものに文字を当てる。
言葉ではないものに表情や身振りを当てる。

以上が、言葉をつかういとなみの根っこだと思います。

＊

言葉に言葉を当てる。
言葉に言葉を重ねる。
言葉を言葉で置き換える。

音に文字を当てる。文字に音を当てる。
意味に文字を当てる。文字に意味を当てる。
イメージに文字を当てる。文字にイメージを当てる。

上の作業では、「何か」に「別の何か」を当てているわけですが、「何か」も「別の何か」も必ずしも明確ではない気がします。そもそも、「何か」も「別の何か」もが「何か」に別の何かを当てた」ものだからでしょう。

たとえば、「言葉ではないもの」に言葉を当てる」です。これが言葉だと私は思います。言葉とは、すでに「何か」に「別の何か」を当てた結果だという意味です。代用物とも言えます。代用物が実物をどれだけ忠実に反映しているかは不明なのです。（ところ

で、私は言葉を広く取っています。音声と文字だけでなく、視覚言語と呼ばれることもある表情や身振りやしるし、場合によっては映像や音楽も言葉としてとらえることがあります。)

「言葉ではないもの」に言葉を当てるとするのは、両者を当てる必然性がないために、きわめて不安定な基盤に立っていると言えます。言葉ではない猫という生きものに、日本語の「ねこ・猫」を当てる必然性はないと言えば分かりやすいかもしれません。もちろん、他の言語や方言でも同じです。

そんなわけで、言葉をつかうさいに、言葉ではないものに言葉を当てたり、ある言葉に別の言葉を当ててみてはいるものの、それが当たったかどうかは不明なのです。こうなると、当たったと感じたときが「当たった」だと言うべきでしょう。「当たる」は人にとって印象とか感想の世界だと言えます。

籤（くじ）や占いや予言・預言に似ています。当たるも八卦当たらぬも八卦。

「当たり」が出たときに、それが当たっているかどうかを知るためには、さらにまた籤を引くか占うしかないのです。当て処（あてど）がない。「当たった」と感じる時の高揚を求めてあてどなく続くのでしょう。

当たった時の高揚感を求めてなんてギャンブルに似ています。これも印象です。

「かた」が「かたち」を「なす」さまが「あられる」

かたがかたちをなすさまがあられる——。このフレーズに漢字を当ててみましょう。漢字をまじえて読んでみるとか、漢字による注釈をつけるとか、漢字をつかって意味を分けてみる（意味を限定してみる）とも言えます。

かた、形、なり、形・態、形態、なす、成す、形を成す、形成。

上の漢字まじりの文字列を左から右に、そして右から左に読んでいくと、その展開にはっとします。わくわくするのです。「そうかそうか」、「なるほど、なるほど……」と。

「言葉ではないもの」に、つまり「ひらがな」（言葉ではないもののたとえとして考えてください）に漢字を当てることによって、音、文字、意味、イメージを当てている気分が味わえます。たとえば言うなら、そうした過程が「かた、かたち、形」になっていくのです。そのさまが上の漢字をまじえた文字列に「あらわれている」とか「起きている」ように見える気分を味わえるという意味です。一種のシミュレーションと考えてください。

【※言葉を得た人類が「言葉ではないもの」をとらえることは不可能だと私は考えています。生まれたとたんに言葉に囲まれた環境にいて言葉の習得を余儀なくされている個人としての人も「言葉ではないもの」をとらえることはできないでしょう。したがって、いまここで「言葉ではないもの」として「ひらがな」で表記した日本語を持ちだしているのは、苦しまぎれのたとえ（比喩）であり、たとえという名のすり替えによる騙り（嘘）でもあります。上の「一種のシミュレーション」というのも美辞麗句のたぐい、つまり与太話に他ならないことをご承知おき願います。】

「当てる」と同時に「ずれる」も起きています。何かに別の何かを当てているのですから、「ずれる」のは当然です。

和語の「かた」を漢字・漢語の「形」に当てる。「形」を和語の「なり」に当てる。「なり」を漢字・漢語の「形・態」に当てる。「形・態」をくっつけて、漢語の「形態」に当てる。「形態」を「なりをなす」と読む。「なす」に「成す」を当てて、「なりを成す」、さらには「形を成す」とずらす。それを「形成」と読む、ずらす、当てる。

＊

かた、形、なり、形・態、形態、なす、成す、形を成す、形成。

おそらく言葉ではなく、とりあえず「かた」という音と文字（ひらがな）にしたものが、「かたち」を「なす」さまが具体的な文字（漢字）として、そこにあらわれます。

かたがかたちをなすさまがあらわれる――。

わずかひらがなで十七文字ですが、漢字を当てたことによって、長く多く厚く重く深く感じられます。私の場合には、ずっと眺めていられるし、暗唱して寝入り際に呼びもどして味わうことができそうです。

- (A) かた、形、なり、形・態、形態、なす、成す、形を成す、形成。
(B) かたがかたちをなすさまがあらわれる。

(B)を読むさいに(A)がいわば二重写しになるわけですが、説明(注釈)的な(A)ではないために、ひらがなだけの文字列が多層(多義)化して、詩のようにも、物語みたいにも、おまじないっぽくも感じられるのです。同時に、詩とか物語とかおまじないという安易な譬えは、この十七文字からなる文字列の具体性を失わせる気もします。一方に集中するともう一方が見えなくなるだまし絵に似ています。

「何か」をある定型に当てる・収める

十七文字で十七音からなる俳句を思いました。「何かに何かを当てる」を短い定型詩で考えてみます。

「言葉ではないものに言葉を当てる」と単純に考えましょう(これも上で述べたのと同じ与太話です)。

定型のある、ごく短い詩で何かを歌ったり詠んだりする場合には、その「言葉ではないもの」は必ずしも明確ではない気がしますが——それを明確にしたいからわざわざ言葉にするのでしょうか——、とりあえず「何か」として話を進めます。

「何か」を写生するとか描写するという立場もあるでしょう。「何か」を「写す」というよりも「映す」、または「移す」という考えもありそうです。「何か」を「語る」のだという意見もあるでしょうね。

一センテンスや短い散文にするのではなく、あえて定型、つまり音数(文字数)や韻や季語・季題のような決まったテーマ、あるいは流派の決まりのようなもののある詩にするからには、そこには先行する作品が前提としてあります。これを忘れてはなりません。

たとえば、俳句は一句で完結もしていないければ、一句で成立もしていないのです。

＊

「何か」を短い定型に収める。「何か」を言葉に当てる。この場合の「何か」は言葉ではないものだと考えられます。

当てる、当てはめる、収める、入れる、容れる、型に入れる。

こうした作業においては、「何か」を当てるさなかに、試行錯誤があるにちがひありません。なかにはぱっと一瞬で作品ができる人もいるでしょうが、それは例外中の例外だという気がします。

ああでもないこうでもない、ああだこうだ。そのさいには、先行する他人の作品や自分の過去の作品もちらつくのではないのでしょうか。型があるのですから当然です。

定型詩では、音数（文字数）、韻、決まりといった枠があるために、言葉が具体的な物として扱われる点がとても大切です。言葉を型にはめたり型に流し込む必要があります。この場合の言葉は抽象や観念ではなく物——目に見えるし聞こえるし数えられます——なのです。

「何か」を定型に収める」や「何か」を言葉に当てる」さいの「何か」は、「言葉ではないもの」ではなく言葉かもしれません。正確に言うと、「言葉ではないもの」と言葉の両方なのかもしれません。

この場合の言葉とは、先行する他人の作品や自分の過去の作品のことです。読まないし詠めないのです。

先行する作品を手本にして詠んだり歌ったり詩（うた）うのが、定型詩でしょう。さもなければ、定型を踏まえることになりません。

写生という意味での絵を描くときに、目の前の風景や物を見て描くだけでなく、これまで見てきた絵や自分の書いた絵を踏まえて描くことがあります。その体験を思いうかべると分かりやすいかもしれません。

以下の文字列では、まさにそうしたことが起きているのではないか、あらわれているのではないか、と思います。

かた、形、なり、形・態、形態、なす、成す、形を成す、形成。

形を成すというのは、その前提として形（かた・かたち）が想定されていなければならぬという意味です。

「想定」ですから、頭の中に「ある」という点が大切です。それを具体的な形にしているのが創作でしょう。形を成すのです。

*

べつに定型詩ではなくても、一文であったり、短い散文であっても、それが言葉で唱えられたり書かれるかぎり、そこには前提としての形が想定されている気がします。たぶん、それが以下の文字列にある和語の「かた」であり「なり」です。

かた、形、なり、形・態、形態、なす、成す、形を成す、形成。

なお、短い文に話を限っているのは、短いほうが体感しやすいからです。話は大きくなると抽象的でつかみどころのないものになりますので。長い文章については、短い文の積み重ねだと考えればいいかもしれませんね。

05/20 人にあらわれて、機械にあらわれないもの

＊

べつに定型詩ではなくても、一文であったり、短い散文であっても、それが言葉で唱えられたり書かれるかぎり、そこには前提としての形が想定されている気がします。たぶん、それが以下の文字列にある和語の「かた」であり「なり」です。

かた、形、なり、形・態、形態、なす、成す、形を成す、形成。
(拙文「「かた」が「かたち」を「なす」さまが「あらわれる」より)

ことや、ものや、ありようは、多面的なものですから、たとえ別の名前と呼ばれているもの同士でも、当ててみると、どこかではつながることがよくあります。
(.....)

固定された「つながり」があって「つながる」だけではなく、ジャンプ（飛躍）して、どこかとどこかや、何かと何か「つながる」というのも、おおいにあるように私は思います。
(拙文「「何か」に「何か」を当ててみる」より)

目次

形を「なす・為す」、形に「なる・成る」

生成

生成、生成り

形が「出る」、形が「あらわれる」

人にあらわれて、機械にはあらわれない

形を「なす・為す」、形に「なる・成る」

かた、形、なり、形・態、形態、なす、生す、成す、為す、形を成す、形成、なる、生る、成る、為る

＊

為せば成る。

為せば成る、為さねば成らぬ、何事も。

為せば成る、為さねば成らぬ、何事も、成らぬは人の為さぬなりけり。

江戸時代の米沢藩主であった上杉鷹山の言葉らしいです。

「為す」と「成る」の使い分けに注目しないではられません。

＊

「決める」は人為、「決まる」は人の領域ではない。

(.....)

人が「決める」。「決まる」は「起きる」とか「あらわれる」。そんな気がします。

(拙文「人が「決める」、「決まる」は「あらわれる」より)

決める、決まる。

当てる、当たる。

つなぐ・つなげる、つながる。

あらわす、あらわれる。

起こす、起きる。

かためる、かたまる。

なす、なる。

このところ、上のようなペアが気になります。他動詞と自動詞なのでしょうが、どんなペアでも気になるのではなく、上の場合が気にかかってなりません。

為す、成る。

「為す」は人為、「成る」は人の領域ではないと言いたくなります。

人為と言えば人造という言い方を連想します。人の領域ではない創造を人が為すという意味でしょう。人造も人為に他なりません。

創造、模倣。人造、天然。

＊

「かた」が、「形（かたち）を為す」とすれば、それは人が為している。「形（かたち）が成る」とすれば、人の領域ではないところで、そう成っている。形を為す、形が成る。

そんな気がします。

こうなると、「生ず、生る」が気になります。

形を生ず、形が生る。

「生成」という漢語を連想しないではいられません。このところ、さかんに見聞きする言葉です。

生成

「生成」を愛用の広辞苑で調べてみると、以下のようにまとめられそうです。

生成：せいせい、生成、生じて形を成すこと、(哲) Werden (ドイツ語)、物の発生、変化、転化。

ドイツ哲学の用語のようですが知りません。

現在、さかんに見聞きするのは「生成 AI」です。よく知らない言葉です。この文字列を初めて目にしたときには、「きなり AI」と読んでいましたが、やがてそうではなさそうだと気づきました。

「せいせい AI」ですね。わくわくしないので調べたことはないのですが、文脈から何となくイメージをつかんでいます。

あと、「生成・せいせい」で思いだすのは、「生成文法」です。英語の generative grammar の訳語だということは知っていますが、これもよく知りません。あえて調べようという気持や予定もありません。昔勉強した覚えがありますが、記憶がないのです。

よく知らないことについては記事では触れないほうがよさそうです。

生成、生成り

生成：せいせい、生成、生じて形を成すこと、(哲) Werden (ドイツ語)、物の発生、変化、転化。(広辞苑を参照)

自分にとって大切そうなところだけを抜きだしてみます。

生成、生じて形を成す、発生、変化、転化。

わくわくしてきました。おもしろそうです。

*

生成り・きなり、手を加えてないこと。(広辞苑)

生成り・きなり、生地そのまま、飾り気のないこと。(デジタル大辞泉)

生成り・なまなり、「生熟れ・なまなれ」に同じ、十分熟(または熟成)していないもの。未熟であること。十分にできあがっていないこと。(デジタル大辞泉)。

なるほど。言えています。逆に言うと、まだまだ生るし成るということですね。伸びしろは無限ということでしょうか。

為せば成る、為さねば成らぬ、何事も、成らぬは人の為さぬなりけり。

形が「出る」、形が「あらわれる」

何かに何かを当てる。何かに何かを当てることで、何かが形を成す、または何かが形に成る。

声としての言葉を持ちいて、話をしたり、会話をしたりする。物語や詩歌をつくったり、物語や詩歌を繰り返して口にしたりする。

文字を持ちいて、メモ程度の文を書いたり、手紙を書いたりする。あるいは、物語や詩や散文を書いたりする。

現在であれば、電話やメールやツイートやチャットも話し言葉や書き言葉をもちいた「何かに何かを当てる」行為だと言えます。

たぶん、音楽や映像も「何かに何かを当てる」だという気がします、どうなのでしょう。

＊

「何か」に言葉——声と文字に限定して、表情や身振りやしるしや映像や音楽は除きます——を当てることで、言葉という形での「何か」が「出る」のですが、形があるとは言うものの、これだけ誤解や不通や行き違いが生じるのですから、「出た」言葉は発した本人をふくめて各人にとって異なって「あらわれている」としか考えられません。

形は「出る」けれど、各人にとっては異なって「あらわれる」。そんなふうには言えそうです。

この場合の「形」は、声と文字だけでなく、表情や身振りやしるしや映像や音楽においての「形」ととらえてもいいのではないのでしょうか。そんな気がしてきました。

形が出る、形になる、形をなす、形があらわれる。

「形になる」と「形をなす」の「形」は、たとえ、なったり、なしたとしても、それが人に「あらわれる」時点で、その人において「変わる」し「転じる」と言えそうです。

人は機械ではないからそうなのでしょう。

変形、生成、変形生成、生成変形。

transformational generative。

人にあらわれて、機械にはあらわれない

逆に言うと、機械は「形になる」と「形をなす」を文字どおりにとらえるのかもしれ

ません。形は機械に対して「あらわれる」なんてことはないという意味です。

まして、「なる」と「なす」とは相性が悪く、「あらわれる」と相性のいい「すがた・姿」は、機械には「あらわれる」ことは断じてないと思います。

生成——。この言葉はいかにも機械にふさわしい気がします。よく知らないのですが。

ちゃんと動いているのか、ある程度動いているのか知りませんが、現に機械が動いているのですから、そうにちがいません。

*

形になる、形をなす。

形があらわれる。

どうやら、人にあらわれて、機械にあらわれないものがありそうです。

ところで、猫はどうなのでしょう。猫を観察していると、猫にあらわれて、人にはあらわれないものがありそうです。というか、人のギャグは猫に通じないのですが、猫のギャグも人に通じていない気がします。

猫は猫の夢を見るのでしょうか。機械は機械の夢を見るのでしょうか。こんなたわごと（ギャグ）は猫にも機械も通じそうもありません。人にあらわれているだけでしょ。

そう考えると、「あらわれる」は他者（他人や他の生きものや他の生きていないものを含みます）とは共有できないものかもしれませんね。もちろん、人から見ての他者の話です。

いずれにせよ、「あらわれる」は不気味です。なんて不気味がるのは人だけという落ちに落ち着くようです。

05/21 言葉ではないものをさぐる

＊

ことや、ものや、ありようは、多面的なものですから、たとえ別の名前で呼ばれているもの同士でも、当ててみると、どこかできつながることがよくあります。

(.....)

固定された「つながり」があって「つながる」だけではなく、ジャンプ（飛躍）して、どこかとどこかや、何かと何か「つながる」というのも、おおいにあるように私は思います。

(拙文「「何か」に「何か」を当ててみる」より)

たとえば、「形・姿・型・語る・固い・固まる」の「かた」も、「片言・片向く・傾く・片寄る・偏る・片方・夕方」の「かた」も、言葉ではないものとか、言葉にする前のものとか、言葉が消えかけたものと言ったほうがよさそうです。断片的で取り留めも取っ掛かりもないからです。

形が無い、形に成らない、形が欠けている。

かたはし・片端、かけら・欠片、あとかた、後方・跡形。

それでいて、「かた」という二音と二文字に、なにか目や芽のようなものを感じるのは、それが言葉の欠片（かけら）であり、言葉の跡形（あとかた）だからでしょう。半端な形で言葉をひきずっているのです。気配をイメージすると分かりやすいかもしれません。言葉の気配という感じです。

「かた・形」と「かた・方」がそれぞれ、「言葉ではないもの」の気配を漂わせたり、「言葉にする前のもの」を引きずっていたり、「言葉が消えかけたもの」の跡を留めているとするなら、両方の要素や属性を備えているとか、どちらでもない要素や属性を帯びているとか、見方しだいで何にでも見えることがあっても、不思議ではない気がします。

当り前のことを言っていますが、今回はそんな話をします。

目次

言葉ではないもの、言葉にする前のもの

二つの「かた」のあいだでまよう、さまよう

無文字

形であり、同時に方でもある

言葉ではないもの、言葉にする前のもの

かた、形、なり、形・態、形態、なす、成す、形を成す、形成。

和語の「かた」を漢字・漢語の「形」に当てる。「形」を和語の「なり」に当てる。「なり」を漢字・漢語の「形・態」に当てる。「形・態」をくっつけて、漢語の「形態」に当てる。「形態」を「なりをなす」と読む。「なす」に「成す」を当てて、「なりを成す」、さらには「形を成す」とずらす。それを「形成」と読む、ずらす、当てる。

かた、片、片向く、傾く、へん、片、片寄る、偏る、偏向、方向、ほう、方角、方、片、かた。

和語の「かた」を漢字・漢語の「片」に当てる。「片」を「片寄る・偏る」とずらす。「偏る」から「偏向・へんこう」へとうつる。「向」に促されて「方向・ほうこう」があらわれる。「ほうこう」から「ほうがく・方角」へ。方も片も「かた」だと気づく。

＊

上で並べた、二つの「かた」から続く文字列を見くらべているとわくわくします。上と下は、つながるようでつながらない。上を下に、下を上を、当てることはできるものの、当たった感じがするものもあればしないものもある。

「あらわれる」も「つながる」も「当たる」も、個人的な印象だどつくづく感じます。ギャグや駄洒落と同じで、受ける受けないはその時と場合と顔ぶれしだい。比喩や掛け詞と同じで、決まるか決まらないかは受け手しだい。そもそも本人にも分からない気がします。

＊

二つの列の左端にある「かた」と「かた」ですが、たぶん和語なのでしょう。語と言ったものの、それだけではあまりにもとりとめがない。こんなとりとめのないものを言葉と呼んでいいのでしょうか。

「かた」も「かた」も、言葉ではないものとか、言葉にする前のものと言ったほうがよさそうです。断片的で取っ掛かりがないからです。

それでいて、「かた」という二音（二文字）に、なにか目や芽のようなものを感じるのは、それが言葉の欠片（かけら）だからでしょう。

上で書いた文にある「断片的」と「欠片」に「片」が見えます。かけらであり、きれはしなのですが、そこには何かの兆しを感じられます。ピアノのキーを叩いて出た最初の音みたいな感じだと言えば分かりやすいかもしれません。

この先に何かがある、何かが起る、何かの流れの一部だ。そう考えると、「片」がある「方向」であり、同時に「形をなす」ものに思えてきます。

「かた・片」と「かた・形」はけっして矛盾するもの同士でも、異なるもの同士でもないようです。そうであるとすれば、それは「言葉ではないもの」や「言葉にする前のもの」を引きずっているとか、「消えかけた言葉」が跡を留めているとも言えるでしょう。とりとめがないという意味です。

「言葉ではないものをさぐる」がこの記事のタイトルですが、言葉ではないものに「とっかかり」と「とりとめ」がないかぎり、言葉を取っ掛かりと取り留めにして手探りをするしかないのです。

＊

ややこしい話になってきたので、文字列を短くして、ここまでを整理してみましよう。

かた・形・型

かた・片・方

どちらも「かた」と読めますが、違った方を向いている気がします。「かた・形・型」はまとまりを目指し、「かた・片・方」は散らばっていく感じがします。

話を広げて、詳しく見ていきましょう。

二つの「かた」のあいだでまよう、さまよう

かた、形、なり、形・態、形態、なす、成す、形を成す、形成

「方」向を変えてみます。

かた、形、型、かたる、語る、騙る

「かたる」はある方向にむかって流れる筋です。良い悪いに関係なく流れます。

かた、形、型、かたる、語る、騙る、カタル、カタルシス、あたる、当たる、中る

音だけのつながりでは、思いがけないものも出てきます。言葉であれば、そうした展開もあるでしょう。そうでなければ言葉ではない気がします。ま、程度問題ですけど……。

かた、形、姿、すがた、容、器、体、態、様、景、かげ、象、像、影、瀉、方、放

気になる文字というものがあります。形にも音にもとらわれずイメージだけで並べるのも楽しいです。

語る、放す、放つ、話す、離す、発する

放出、発射、発散、放送、放言、離散

「はなす・はなつ・はっする」は、「語る」より「形・型・固」がなくて、言い放的な感じがします。「片・方」寄り。はなつたものとのあいだに「隔たり」があるのです。散らばるとかばらばら感があります。

＊

かた、片、片向く、傾く、片端、へん、片、片寄る、偏る、偏向、方向、ほう、方角、方、片、かた

語って形をなす方向に流してみましよう。

かた、肩を寄せる、肩に手を掛ける、寄り掛かる、片向く、傾く、かたぶく、かぶく、歌舞伎、型、方、形、女形

ある方向に流れていきながら、形がかたまるよりも、方から方へと散っていく感じもします。まだらでまばら。ばらばら指向なのです。辺、偏、変という、つながりも感じます。

エクセントリック (excentric) なのです。偏心、つまり心 (中心) からはずれているし、ずれているイメージ。ex-です。外へと拡散していく、散っていく。反とも、重なりそう。

片、片端、はしっこ、葉、はっぱ、はし、端、箸、橋

辺境のイメージです。「ふち・縁・ふちっこ」とも重なります。「きわ・際・さかい・境」でもあるので、外部やよそ者や他者との出会いもありそう。

傍ら・かたわら、半端、偏と旁、片割れ、破片、欠片・かけら、一方、片方、かたはし・片端

何か欠けている、二つでひとつ。ペアのうち的一方。半分。場合によっては差別の対象になりそう。

かたの、片野、交野

地名ですけど、辺や縁や境と重なります。そとやよそと交わる場のようなようです。ノマド的で固まらないし、堅くも硬くもない雰囲気を感じます。形式にこだわらない放埒さがあります。マルクスのいった「交通」とも通じそうな気配。

さまよってきました。さまよう、さ迷う、彷徨う、「方・片」だから当然ですね。

＊

「かた・形」と「かた・方」がそれぞれ、「言葉ではないもの」の気配を漂わせたり、「言葉にする前のもの」を引きずっていたり、「言葉が消えかけたもの」の跡を留めているとするなら、両方の要素や属性を備えているとか、どちらでもない要素や属性を帯びているとか、見方しだいで何にでも見えることがあっても、不思議ではない気がします。

ふたつの「かた」のあいだでまよい、さまよう。そこで、まよっているつもりが、どうやらそうでもないところで、さまよっている。まかすしかない。ゆだねているだけでいい。

無文字

かた、かたまる、固まる、かたい、固い、硬い、堅い、難い、堅苦しい

かた、片、片言・かたこと、片仮名、片隅、片苦し、片身、肩身、形見、破片、半片、片言・へんげん

同じ「かた」という文字列から出発しても、イメージが異なります。似ていると感じる場合もあります。無理にまとめる必要はないと思いながらも、ついある筋書きやかたちに導かれ運ばれていきそうになります。

「かたまる」を主旋律にして流していく。「かたこと」で放っていく。かたまる方向へ、かたことで形づくっていく。

＊

現在はありとあらゆるものが文字にされています。公式な記録は文字であり、音声や映像ではないようですが、文字は手書きから印刷されたものに移り、いまではデジタル化されたデータとしてインターネット上で飛びかっています。

もっとも、「飛びかっている」というのは比喻であり、誰も観た人はいそうもありません。

ん。それにしても、ネット上で、文書の投稿、配信、複製、拡散、保存がほぼ同時に起きているのは、私にとって驚異であり脅威でありつづけています。

私はよく無文字の世界を夢想します。文字のない世界ではどんなふうにいるのだろうと、なんの根拠も裏づけもなく空想するわけです。

発した瞬間に片っ端から消えていく音声や表情や身振りとは異なり、文字は消さないかぎり残ります。それが文字の最大の特性であり、人がこれだけ文字を厚遇し礼遇するのは残し複製しやすいからだと思います。

もし無文字の世界であれば、どんなふうになっているのでしょうか。そこでは「かた・形」と「かた・片」はどんな形で、そしてどんな片で「ある」のでしょうか。

表情と身振りで、「かた・形」と「かた・方」をあれこれイメージしてみるのですが、そこで浮かぶのは、歌であり、旋律であり、踊りであり、スポーツなのです。

そこには、言葉ではない、言葉にする前の「かた・形」と「かた・片」が生き生きと「ある」ような気がします。生き生きとした「ある」とは、たぶん「なる」です。

形であり、同時に方でもある

夕方、朝方、明け方

ある方向に向かっているけど、その前後のどちらでもない、同時にどちらでもある。

たそがれ、誰そ彼、薄暗い夕方に「だれだ、あれは」。かわたれ、彼は誰、薄暗い明け方（または夕方）に「あれは、だれだ」。

西の方、東の方

ある方向に向いているけど、こちらでもそちらでもない。こちらにいながら心はあち

らに移りつつある。

片、方、偏、辺
放、端、葉
肩、扁
形

形、型、容、瀾、象
固、堅、硬、難
成、為、生
語、騙
片

上の漢字を見ているさいに、「かた」の形と姿にこだわるときと、「かた」の「kata」という「音」にこだわるときでは、違った並び方になるし、浮かんでくる漢字も異なります。

あれこれと分けることに、ある種のアきらめを覚えるようになります。それでいて、ばらばらにしておくのが嫌なのです。そのうち眠くなります。

＊

形であり、同時に片でもある。どちらでもない――。

文字と形にこだわるとそうなります。

かたであり、かたでもある――。

音にまかせるとそうなります。

目をつむり、寝入り際の心境で、浮かんでくるものにまかせてみます。

＊

人類は言葉を得てしまった。

個人としての人は生まれたとたんに、言葉を習得する環境に投げこまれる。

言葉ではないものは人にはとらえられない。
言葉ではないものは言葉でしか語れない。

言葉ではないもの、それは言葉であり言葉の綾。
言葉ではないもの、それは夢。

言葉の夢 夢の言葉。
夢の言葉 言葉の夢。

言葉が夢を見る。
夢が言葉を話す。

人はその夢と言葉を見ているだけ、聞いているだけ。
人にその言葉と夢の主導権はない。

言葉は人に宿る。
人が言葉に宿る。

05/22 気になること

＊

気になること

星野廉

2023年5月22日 09:52

「かた」も「かた」も、言葉ではないものとか、言葉にする前のものと言ったほうがよさそうです。断片的で取っ掛かりがないからです。

(拙文「言葉ではないものをさぐる」より)

「とっかかり」と「とりとめ」がないかぎり、言葉を取っ掛かりと取り留めにして手探りをするしかありません。

目次

おおごと、こごと

ことあやまり、ことあやまり

ことになる、ことになる

異なる世界、言なる世界、事なる世界 *

異は異物

根拠の希薄な違和感や異和感

異なる世界、言なる世界、事なる世界

事と言が「異なる」を見えなくしてしまう

異なる世界、言なる世界、事なる世界*

異なりや事なりや言なり

おおごと、こごと

大したことではないのかもしれませんが、ささいなことにこだわる性分なので、気になっていることがあります。

大ごと、小ごとのことなのです。

こう書けばなんでもないので、大事、小言と書くと大ごとです。少なくとも私にとっては大きなことなのです。

こういうことをわざわざ言いたても、いいことはこれっぽっちもないのです。殊さら言挙げをしてもいいことはない。

こと・言：(事と同源) 口に出して言うこと。

こと・事：(もと「こと(言)」と同語) ……、抽象的に考えられるもの。「もの」に対する。

こと・異・殊：普通とは違うこと。同じでないこと。

(広辞苑より)

ことあやまり、ことあやまり

ことあやまりとことあやまりも気にかかってなりません。

言誤りと事誤りです。この二つは広辞苑では隣り合わせになっていて言のほうが先に載っています。はじめに言葉ありき。

言誤りは、言いあやまり、言いそこない、事誤りは、事のまちがい、事のゆきちがい、過失、と広辞苑では言い換えてあります。いいかげんなものです。けちをつけているわけではありません。殊のほか殊さら、いい加減なのです。

ことになる、ことになる

人にとって基本は「似ている」であり、「異なる」は「同じ」や「同一」のように学習した知識であり情報、つまり教わったものではないでしょうか。そもそも「同じ」や「同一」は、そこそこ精密な器具や器械や機械をつかわないと人には確認できません。

詳しく言うと、人にとっては「似ている」と「その他もろもろ」という印象だけがあり、「その他もろもろ」は、「似ていない」でも「異なる」でもなく、むしろ「見えても気

に掛けない」とか「見ていない」とか「見えない」とか「気づかない」という感じ、です。

(人は基本的に印象の世界に生きているのです。生まれてそんなに経っていない赤ちゃんを想像してください。)

で、「その他もろもろ」というのは、いわば「見ようとすれば、怖くて不気味で見たくない」ものなのですが、この場合には人は「手なずける」ためにとりあえず「名付ける」という手段に出ます。

「見てもわからない」場合もありますが、気掛かりになるとちゃんと見て、つまり観察して「分けて」、やはり手なずけるためにとりあえず名付けます。ただし、「分けた」段階で「分かった」と「決める」という早合点がほとんどなようです。

なにしろ、人は「○△X」という言葉をつくって、その次に「○△Xとは何か？」と問い、思い悩む生物ですから。現に、いまもお悩みは続いていますね。

「分けた」段階でそそくさと名前を付けて、とりあえず「異なる」が決まるとも言えそうです。こう考えると事物を分けて事として認識し、即座にそれに言葉を与えているという意味で、「異なる」は「事(に)なる」であり、同時に「言(に)なる」なんて気がしてきましたが気のせいでしょう。

(拙文「自分の顔が見えないと感じたのはいつなのか」より)

異なる世界、言なる世界、事なる世界*

現実ではありえない事が、言葉の世界では言としてある。異なる世界、言なる世界、事なる世界。現界、言界、幻界。現実、言葉、イメージ。イメージするしかない。イメージをイメージする。

○

「イメージ」に当て字をしてみる。文字に文字をあてる、音に音をあてる。言の葉に

言の葉を当てて重ねる。薄い葉に薄い葉を重ねてその模様を透かして見る。言葉は薄いもの、これが言葉についての私のイメージ。

○

イメージで、まっさきに頭に浮かぶのは夢路（ゆめじ）。夢を広辞苑で引くと、「「寝（い）の目」の意」なんてうれしい文字列が見える。寝目路（いめじ）と勝手にくっつけてみた。

○

夢路、夢路をたどる、イメージをたどる。いいイメージ。道が目に浮かんで、その光景に染まっていく自分がある。

○

夢路、イメージ、image。image、imago。

○

イメージの原語である英語の「image」は、「真似たもの、似せたもの」という意味らしい。つまり、「にせもの＝偽もの＝偽物＝偽者＝贗物＝贗者」ということ。

○

イメージとは、辞書に載っている語義や、ぼくぜんと共有されている意味と違って、とても、テキトー、気まぐれ、大雑把、でまかせ的、頼りにならない、不安定なもの。矛盾しているし、論理的でもない。

○

imagine のアナグラムは enigma（英語で、謎、謎の人）+ i（虚数単位）。image のアナグラムは、magie（仏語で魔法や魔術、マジと発音する）。「マジ」で、あやしい。

○

imagine のアナグラムは「imigane = 意味がねえ = 意味がない = 「意味がね、イマイチなのよ、の『意味がね』」、あるいは、「iminage = 意味なげ = 「意味なげに思ゆ or 覚ゆ、の『意味なげ』」とも読める。

○

イメージは私的で個人的なものであり、はかなく、淡く、薄い。ひらひら、ぴらぴら、ぺらぺら——これが私のイメージするイメージのイメージ。

(拙文「イメージ」より)

異は異物

異、違、移。い、い、い。イ、イ、イ。

音読みした場合の音の韻だけでなく、上の三つの漢字に私はイメージの韻を感じます。イメージは個人的なものですから、辞書に載っている語義とは、ずれているはずです。

「異」はいきなり目の前に現れる。「ぎゃあー」とか「ぎょっとする」というイメージで、とにかく異物なのです。

「違」は、すれちがう、ずれる。似ていると思っていたものが、重ねて見たらずれているとか、「あれっ」という感じがします。意外なのです。

「移」は、移り変わる。「あれよあれよ」とか「あららー」と時間的な推移を感じます。たぶん氣質的なもので、これからも移り変わる可能性を匂わせている気がします。

根拠の希薄な違和感や異和感

(.....)

ある朝目覚めてみたら、自分を除いて巨大なゴキブリたちの支配する世界になっていた。または自分だけが巨大なゴキブリになっていた。

自分はいつもどおりの見慣れた自分であって、世界全体が見慣れないものになってしまっている。あるいは、自分だけが見慣れない「何か」になっていて、世界はいつもどおりの様相を呈している。いずれにせよ、自分から見れば、自分だけが違うし異なるのだから、困った事態であることに変わりはない。

＊

巨大なゴキブリだと大げさすぎてリアリティに欠けて恐怖感がない。それよりもっと怖いのは、どこかが違う、何か異なるではないだろうか。なにしろ、どこかがどこなのか、何かは何なのか、よく分からないのである。

確認しようにも、怖くて深追いしたくない。深追いして違和や異和の正体を白日の下にさらしたくないという心理が働くのである。すると疑心暗鬼を生じて異和や違和が増大し、「こんなふうになっているのは自分だけではないか」という孤立感がさらに深まる。

どこか知らないが異なっている、なんとなく違っている。まるで暖簾に腕押し。根拠の希薄な違和感や異和感ほど不気味なものはないだろう。しかも、異物と化したり、ずれてしまったのが、自分なのか世界のほうなのかが不明ときている。ダブルパンチ、ダブルピンチ、場合によってはダブルバインドである。

それだけではない。異和と違和の根拠が薄弱なだけに、どちらに問題があるのかが逆転しそうな気配さえ漂わせている。まるでネガとポジ。どっちにひっくり返るか分からない。優柔不断で頼りないものほど、面倒で頑固なのである。

ネガとポジ、白と黒の反転。一回の反転を想像しただけでも目がまわりそうになるが、根拠の乏しさがその反転をさらなる逆転へと誘う。ネガポジネガポジネガ。白黒白黒白。

図柄はまったく同じままに反転しそれがさらに逆転する世界。反転と逆転がひっきりなしに繰り返される世界。自分と世界のどちらに問題なり責任があるのかは依然とし

て不明。

(.....)

(拙文「もう、そうなのかもしれない」より)

異なる世界、言なる世界、事なる世界

鏡の向こうに入っていく。笑っていた猫の笑いだけが残っている。ルイス・キャロルの書いた本に、そんな不思議な話がある。話だから、言葉でなりたっているのだが、それが読む人や聞く人の中にイメージを生む。現実ではありえない事が、言葉の世界ではありうる言としてある。

異なる世界、言なる世界、事なる世界。現界、言界、幻界。現実、言葉、イメージ。イメージするしかないようだ。イメージをイメージする。

言葉とは、「あるもの」の代わりをしている「ないもの」、同時に「ないもの」の代わりをしている「あるもの」、「ある」振りをしている「ない」もの、同時に「ない」振りをしている「ある」もの。

ルイス・キャロルは言葉が、「ない」を「ある」、「ある」を「ない」ように思わせる錯覚製造装置であることだけを意識しながら創作活動をしていたと私は勝手に理解している。

(拙文「【レトリック詞集】「っぼさ」というよりも「っぼい」より)

事と言が「異なる」を見えなくしてしまう

人は「似ている」の世界に生きている気がしてなりません。あくまでも私的なイメージの話なのですが、「似ている」が地、「異なる」が図で、地に図が浮かんで見えるという感じです。ぼーっとしていれば地で、目を凝らしたりしゃきっとすれば図になるという感じ。ところが、目を凝らして見ているはずの「異なる」は見えていないのです。「見る」という「事」と「見る」という「言」が見えなくしてしまうからです。

○

「何かが」と「何かに」のない、ただの「似ている」。「何が」と「何かに」はその時々によって移り変わる。待機中。準備中。仮眠中。うたた寝。

あっ。何かが見えた。見留めた。認めた。地に図が浮かぶ。「何か」が目浮かぶ。異なる。

あれは何だろう？ ○かな？ △だ。いや、Xにも見える。「何かが」「何かに」「似ている」。

言葉にする。事物が見えなくなる。「何か」が言になる。

事物に目を凝らしている。言葉が浮かんでこなくなる。「何か」が事になる。

言と事が「何か」を見えなくする。「何か」とすれ違う。「何か」をまともに見るのは怖い。

事を見つめていると不安で落ち着かない。言にするとしゃきっとして落ち着くが疲れる。事も言もおぼろになり、ぼーっとしているのがいちばん気持ちがいい。

「何かが」と「何かに」のない、ただの「似ている」。「何が」と「何かに」はその時々によって移り変わる。待機中。準備中。仮眠中。うたた寝。

○

似た音、似た形、似た動き。こうしたものは人を安心させます。

人は「似ている」が好きなのです。似たものをしきりに目で追う赤ちゃんを思いうかべてください。

人にとって「似ている」がまっ先にある感じで、「似ていない」はぜんぶ「異なる」と

か「違う」になります。

とはいえ、人には「異なる」がとらえられないようです。たぶん、すれ違ってしまうのです。「異なる」は、逸れる、すれる、外れる、誤る、ずれる、すれ違う、たがう。

ひょっとすると怖くてまともに向きあえないのかもしれませんが。見ていない振りをして
いる線も濃厚です。「似ている」を見ているほうがずっと楽でしょうから。

ただの「似ている」は「何かが」と「何かに」との出会いを待っている状態です。待機
中。うたた寝。

心ときめかせ夢うつつで待っています。

(拙文「異なる、事なる、言なる」より)

異なる世界、言なる世界、事なる世界 *

何度もなんども「なぞる」を繰り返すとどうなるでしょう。何をなぞっているのかが
分からなくなりそうです。とにかくなぞっている、なんとなくなぞっている。対象がな
くなる、起源がなくなる、手本がなくなる。ないない尽くしです。起源のない引用の引
用、本物や実物のない複製の複製。起源のない反復。手本のない模倣。ないない尽くし。
学習、知識、情報のことではないでしょうか。何よりも、その根っこにある言葉のこと
ではないでしょうか。

○

鏡の向こうに入っていく。笑っていた猫の笑いだけが残っている。不思議な話があり
ます。話ですから、言葉から成りたっているのですが、それが読む人や聞く人の中にイ
メージを生みます。現実ではありえない事が、言葉の世界ではありえる言としてあるの
です。異なる世界、言なる世界、事なる世界。現界、言界、幻界。現実、言葉、イメージ
と読みかえてもいいでしょう。イメージするしかないようです。イメージをイメージす
るのです。

○

なにしろ、人は「○△X」という言葉をつくって、その次に「○△Xとは何か？」と問い、思い悩む生物なのです。考えれば考えるほど、自分に当てはまります。いまもやっていますね。

○

オノマトペに限らず、言葉がずっと入ってきたり、ずっと出ていくとき、その言葉は「何かに似ている」というよりも「単に似ている」として入ってくるのではないか。そんな気がしています。

「ずっと入ってくる」「ずっと出ていく」がポイントです。意味を考えたり意識したりはしていない状態です。その時点では意味なんてないのです。「似ている」だけがある感じ。「何が」も「何に」もない、ただ「似ている」です。

くり返しますが、どんな言葉でも、フレーズでも、センテンスでもいいのです。オノマトペとか、感動詞とか、決まり文句とか、流行語に近い感じ。思考停止とか判断停止とまでは言いませんが、無意識のうちにとりかかるとか、条件反射的に、または生理現象のように、ずっと入ってきて、ずっと出ていくのです。

あらゆる言葉が決まり文句であり紋切り型ではないか。最近、よくそう思います。さもなければ、あんなにずっと入ったり出たりしないでしょう。

(拙文「起源のない反復、手本のない模倣」より)

異なりや事なりや言なり

きらきら、ぱちぱち、ひだひだ、しわしわ——同音を繰り返すことで、オノマトペ感がいや増します。

きらり、ぱちり、ひだ、しわ——これだけでもいいようなものですが、繰り返すことで反復される動きが出るし、オノマトペ感が増すことでしっくりと、頭ではなく体に

入ってくる気がします。

オノマトペはすっと入ってきます。

音や文字が「何かに」「似ている」ではなく、「単に似ている」として入ってくるからではないでしょうか。

「何か」との異なりや事なりや言なりとして無理に押し入ってこないのです。

オノマトペは「すっと入ってくる」がポイントです。意味を考えたり意識したりはしていない状態です。その時点では意味なんてないのです。

でも言葉なのです。辞書にちゃんと載っています。「無意味」と同じく辞書に載っているのです。

私の好きな言い方をすると本物や実物のない複製の複製であり、起源のない引用の引用です。これが「単に似ている」です。

(拙文「連想でつなぐ、たそがれ、twilight」より)

(投稿：2023年5月22日 09:52)

#辞書# 国語辞典 # 言葉 # 言 # 事 # 異なる # 日本語 # 異物 # 漢字 # ひらがな# イメージ # 異和感 # 違和感

05/22 不思議なこと

＊

不思議なこと

星野廉

2023年5月22日 11:19

目次

前編

後編

人は一貫して呪術の時代に生きている（書下ろし・挿入）

後編のつづき

この記事について

前編

不思議でならないことがあります。それは、ことです。こと、ですよ。こと。「こと」という「事・言」なのです。まあ、くだらないことですこと。これ以上、くだらないことは言わないこと。なんて、言われても困ります。このところ、気になって仕方がないのです。

殊に、ことことに至っては、ことに触れて、ここで触れてきたことであり、ことによると、今後のビョーキのなりゆきをも左右しかねない、ことなのです。Dr. コトーに診てもらうこともできない身としては、心の中の孤島で生きながら、事無きを得るのを祈るばかり。ことほど左様に重要かつ、どうしても考えてみたいことなので、ございます。

ことことに関しては、中途半端にうわべだけを糊塗するわけにはいかず、ことのほか、言と事が異なるかについて、ことごとしいのは百も承知で、ことわけ、たわけ、ことわりを重ねてまいりましたが、とどのつまりは、ことしかないことに気づき、「不思議なこと」というタイトルで、まことに戯けたことを、かたことの言葉をつづりながら、本日、語って＝騙してみようかと思っている次第なのです。

こと・koto。たった2音節の短い語でありながら、いろいろな語義があります。辞書では、短い語ほど長い解説がある。以前に、ここでも何度か触れたことです。そうした不思議なことについても、以下に書いてみるつもりです。あえて考えなければ、それまでのこと。いざ、考えてみると不可解。まことに、不思議なことなのです。

＊

さて、一部の読者の方々には、失礼な言い方になるとは思いますが、「はじめに言葉があった」「万物は言葉によってできた」「できたもののうちで、言葉によらずにできたものはなかった」という一連のフレーズに疑問を呈したいと存じます。ここで出てくる「言葉」とは、英語訳では、たいてい Word という言葉がもちいられているようです。しかも、文中でも大文字。God と同じ扱いになります。同格ということでしょう。

辞書を引いて word の語源の説明を読むと、これまた「言葉」「語」「話す」とかいう言葉が出てきて、肩透かしを食います。がくん、がーん、がちょーん、という感じです。もっとすごいものが出てくると期待するほうが、馬鹿だったということでしょうか。

そもそも、世界的なベストセラーである聖なる書に出てくる言葉は、電車ごっこじゃなくて転写ごっこを、時間的にも空間的にも繰り返しています。ほかの諸言語ではどんな意味合いの言葉に訳されているのかとか、これまでにどんな語を経由してきたのかとか、原語が何かについても知りません。惹句・出理駄さんが罵倒していた路語素中華思想の路語素とも、関係がある気もしますけど。その路語素という語も、転写されたものだったとの話を聞いた覚えがあります。そもそも、転写されていないものなど、ないみたいですけど。

こと(1) → こと(2) → こと(3) → こと(4) → こと.....ということでしょうか。「転写=写る・写す=移る・移す=コピーのコピー」の連鎖です。ときには、うつし間違いも起こるようですが、詳しいことは知りません。とにかく、「こと」は増殖する属性を備えているようです。

＊

言葉という言葉の言に当たる「こと・言」ですが、日本語の辞書では、「こと・事」と隣り合わせているか、その「こと・言」の親戚と言ってもいいような「こと」があいだに挟まっていることがほとんどだと言えそうです。広辞苑という字引では、「言」の項が先

に来て、冒頭に「(事と同源)」と記してあります。その次に載っている「事」の説明としては、「もと「こと(言)」と同語」とあります。

これが、不思議で仕方がないのです。『言葉と物』という訳書がありますが、そのタイトルにある「物」、つまり「もの・物・者」という言葉があり、これがまた、「こと・事」とよく似ている点がまことに不思議というか、気になる言葉なのです。さらには、「ものごと・物事」などという「もの」と「こと」が合体した言葉までありますから、わけが分からなくなってきました。とはいうものの、こういう不可解なことって、個人的には、実はとても好きなんです。

言葉、いかめしく言うと、言語について考えることが好きなのです。なぜ、好きなのかと申しますと、軽い目まい、場合によっては、かなり激しい目まいに見舞われることがあるからなのです。子どもはぐるぐる回るものや、自分自身がぐるぐる回ることが好きですね。目が回るのが好きな子が多いみたいです。もちろん、嫌いなお子さんもいるにちがいないありません。

*

この記事の冒頭に挙げた「たわごと・戯言」では、やたら「こと」が出てきましたが、うんざりしますね。自分で書いておきながら、読んでみると軽い「めまい・目まい・眩暈・目眩・目舞い」を覚えます。個人的には「目舞い」という感字を当てたい感じなのですが、広辞苑によると「まう・眩う(目がまわる・目がくらむ)」と「まう・舞う(まわる・めぐる)」があったりして、またまた軽い目まいに誘われます。

で、冒頭の駄文ですけど、今回書こうとしている「こと」というテーマを、書かれる側にある言葉たちが、あのようにことごとと演じてくれるのを見ると、言葉というもの(いや、ことかな?)が健気でいとおしく感じられます。あの中には、言も事もことも異もコトも糊塗も殊も出てきますが、そういう「ことわり・事割り・言割り・断り・理」については、「どうでもいい」と「おもしろい」という、相反する感情をいただきます。その曖昧な気分、「あわいあわい・淡い間」感じに惹かれます。

こういう状態を「おもいはおもい・思いは重い」とか「おもいはあつい・思いは厚い・思いは熱い」などと言って、このアホはひとりでにやにやしているのです。不気味ですね。それはさておき、音として、そして文字として、どの言葉も重みと厚みを備えている、つまり多義的=多層的であると言いたいのです。

その重みと厚みは、ヒトという枠内においてのお話＝戯言であることは言うまでもありません。音として、そして文字としての言葉は、ヒトという枠外では、あくまでもニュートラルな「もの」でしかあり得ません。つまり、意味はないということですね。

＊

で、「こと」ですが、ヒトにとっては、いろいろな意味があるようですが、そうした「いみ・意味」というものを「いみ・忌・齋」、つまり「忌むべきもの」とずらしてみましよう。言葉には、「意味」というものが伴う一方で、「忌」もまた常にうさくつきまどっていて離れないみたいなのです。

ここでは「いみ・忌」を広く取ります。ヒトが言葉に担わせようとするメッセージを、裏切ったり、嘲笑ったり、場合によっては、攪乱する、いわば「滅正辞」という感字を当ててもいいような、ノイズもどきのものが「付く＝憑く」。そんなふうイメージしています。もう少しずらして、「揺さぶる・揺るがせる」と言ってもかまわないかな、とも思っています。

意味と忌（※「いみ」と読んでください）が同居する場。それが言葉だ。なんて言ってもいいのではないのでしょうか。

そう言えば、忌にも忌があるのを思い出しました。「暗澹死体・暗澹屍体」とか書いて、ちょっと訛って「あんた、ん、してー」みたいに読みます。「ん」を「する」とは、意味深です。

で、「あんた、ん、してー」ですが、何をして欲しいのでしょうかね。転じて「案胆仕手」とか「安耽至帝」という感字を当てる場合もあるそうです。そういえば、「intensité」というフランス語とも関係があるとかないとか。いずれにせよ、なんでもあり一的で、しかも不気味な気配にただならぬ趣とパワーを感じます。揺らいでしまいそうになります。目まいに誘われそうです。

＊

「こと・事・言」という思いの厚みと重みについて考えてみましょう。「事＝言」ということになれば、さきほど挙げた「初めに言葉があった」「万物は言葉によってできた」「できたもののうちで、言葉によらずにできたものはなかった」に似ていなくもないですね。違いは、God が出てこないくらいです。出てこないかなあ。ゴドーを待ちながら、しあわせな日々。なんちゃって。さて、あの一連のフレーズは、人類最大のギャグ、あるいは人類の歴史という不条理演劇の台詞だと思っていたのですが、ここで心が揺らいできました。

ところで、「大ごと」の反対は何でしょうか。とっさに尋ねれば、「小ごと」という答えが返ってきそうです。でも、「大事 \leftrightarrow 小言」とすると、違うなあと思えてきます。それとも、やっぱり、素直に「事＝言」と考えるべきなのでしょう。こういうのを、たわけと申します。たわけとは、形式的に考えることです。論理的に考えることの多くも、たわけに含まれます。笑いごとでは、ありません。ざらにあることなのです。気がついていないだけです。

ぐちゃぐちゃごちゃごちゃしたものを、すぼっととか、すっきりとか、くっきりとか、分けよう、切ろう、割ろうなんて考えるから、戯けと言うのです。かといって、ふにゃあとか、ぶちよっとか、ぼよよーんという具合に分けたり、切ったり、割ったりできそうもありません。いや、案外できたりして……。

＊

こうなると、このブログでやっている、いつものやり方でお茶を濁すしかないようです。ずらすのです。「ずらす」というのは、連想ゲームや、ひとりブレンストーミングみたいなものです。例によって広辞苑（※手元には、これしか手ごろな辞書がないのです）を参考にします。

ずらし方（1）：こと・事・言・もの・物・者・さま・様・状・方・態

ずらし方（2）：言・ことば・詞・語・言う・話す・歌・詩歌

ずらし方（3）：事・抽象的・現象・できごと・事件・事情・事態・様子・理由・わざ・しわざ・しかた・やりかた・おこない・つとめ・中身・内容・実体

ずらし方（4）：物・物体・物品・存在・物のけ・物事・事柄・言葉・言語・・わけのわからないもの・内容・対象・対象物・物質・状態・ありよう

ずらし方(5): 者・人・あいつ・あのやろう・事

ずらし方(6): 様・状・あり方・しかた・方・方向・方法・方式・形式・ありさま・様態・ふう・様子・すがた・かたち・形・型・なりふり・おもむき・心の動く方向・心の動き・心のあり方・なりゆき・内容・伝えたいこと・事情・趣向・あじわい・体裁・感じ・表面・みえ

うーん。なかなか興味深いです。本を読むのが苦手なアホにとっては、こうして言葉をずらして眺め入るほうが、哲学書なんかを読むより、ずっとスリリングなのです。誰々が何々と書いていた。それは、何々と位置づけることができる。といった作文での引用や解説ごっこをするのも読むのも退屈です。お仕事なら、たぶん別でしょうけれど。というのは大嘘でして、ものぐさで横着なうえに、頭が悪いので、そうした芸当ができなただけなのです。一時は、その手の職業を目ざして大学院に入ったこともありましたが、3カ月も経たないうちに退学。修行に耐えられませんでした。芸道の厳しさを思い知りました。トホホ。

実は、このアホは、身の程知らずと呼ばれるのを承知のうえで、言葉のフェティシストを自任させていただいております。

*

ヒトは、なぜか言語を獲得してしまいました。その結果かそれが原因かは分かりませんが、うだつが上がらない、体毛の薄い、尻尾のないおサルさんから、ホモ・サピエンスという偉そうな智人、年中発情している痴 or 恥人になってしまったらしいのです。で、なぜかは分かりませんが、ヒトは言葉=語を発し、それをもちいて、「もの」、「こと」、「さま」に名前をつける作業を始めました。その名前は、ヒトに大きな自信を与える役割を果たしました。

名前はラベルみたいなものですから、勝手に貼ればいいのです。貼る対象は何でもかまいません。たぶん、そのいい加減さから、「こと・事・言」なんていう混乱が生じたのではないのでしょうか。何か分かんないけど、訳が分かんないけど、とりあえず、名前を貼る。そんなテキトーな態度で臨めば、「貼られた対象が何か」などという問題は、すっ飛ばしてしまいます。

こと、もの、さま。事・物・様。事象・物体・現象。何とでも呼んでください。要は、

名前というラベル。ペラペラのラベル。中身や、貼った対象が何かなんて考えるのは野暮。名こそが命。命名万歳！

＊

何にでも名前をつけるとすごくいい気分になる。この快楽を覚えたヒトは、もうやめられません。名前依存症。名前中毒。名前至上主義。名前教。そんな感じになってしまいます。「妄想・もうそう」ではありません。もう、そうなのです。もう、そうなっています。この状況には弊害があります。名前と名前をつけた対象を混同するのです。好例は、「分かる・分かった」とか「見える・見る・見えた・見た」。こんな名前をつけたために、「分かる・分かった」とか「見える・見る・見えた・見た」気持ちになってしまう。ヒトには、自分がつくった名前になりきってしまう癖がついたらしいのです。言葉を「模倣する＝擬態する」癖がついた、とも言えそうです。

なりきる。これは、恐ろしいことです。「ヒト＝名前」状態が常態化することですから。

名づける。すると、その名づけたものが「ある・在る・有る」「いる・居る」「おる・居る」ことになってしまう。ちなみに、今挙げた「ある・在る・有る」「いる・居る」「おる・居る」も、名前。「ある・在る・有る」「いる・居る」「おる・居る」ことになってしまっただけ。

それは、「実在するのか」「真実なのか」と、問い正したいところですが、「実在（実在する）」も「真実（真実である）」も、名前だから処置なし。ほどこすべがない。手のつけようがない。これって、恐ろしいことではないでしょうか。でも、大丈夫なんです。ヒトであるかぎり、気にすることはないと言えます。迷惑するのは、ヒトでない生き物たちです。ひいては、この星です。その意味では、まことに恐ろしいことです。

＊

実に不思議なことです。「こと・もの・ものごと・さま」を錯覚させる「仕組み＝仕掛け＝装置＝システム＝メカニズム＝ダイナミズム」が、なぜか、ヒトに備わっているらしいのです。「らしい」としか言えない悲しさを嘔みしめましょう。

動きであれ、在りようであれ、ヒトの心 or 頭 or 意識の中に浮かんだ「こと・もの・も

のごと・さま」であれ、すべてが名=名前=名詞=言の葉=事の端=言葉=語になってしまうのです。オー、マイ、語っ！ 大迷語！

驚くべきことです。怪しいことです。こんなふうには、「こと」としか言えません。実に摩訶不思議な「こと」なのです。

＊

namae。name。似ている。激似。なめんじゃない。なめんなよー。

name の語源をジーニアス英和大辞典で調べてみました。すると、nama、nomen、onoma という語が記してありました。なま、の一めん、おのま。何だか日本語っぽい響きがありませんか。生、能面、大野間・大埜間（※こんな苗字があります）。驚くには当たりません。アルファベットにはいろいろありますが、英語やフランス語であれば基本的に 26 文字だけです。その組み合わせで、どれほどの数の単語ができるのか。上限を 5 文字という条件で、コンピューターに確率の計算をさせれば、答えは出てくるでしょう。いわゆる、確率の問題という名の問題。わけが分からない時に吐く決まり文句の 1 つ。思考停止状態。

それだけのことです。いちいち偶然にびっくりしていたら、ヒトなんてやっつけられません。せいぜい、その偶然に対する感応力=無知=鈍感力を利用して、名前や言葉を素材にした、占い師になるとか、スピリチュアル方面に進むという方法もありそうです。実際、それで成功なさって、お金持ちになっている方も大勢いらっっしゃいます。一つ間違えて、ビョーキ扱いされたり、詐欺罪に問われて獄中にいる方々も少なからぬ数にのぼると聞きます。name を name ちゃ、no-no ということですね。

＊

でも、どうやら、ヒトは、なまえに、なめられているらしい。もてあそばれているらしい。

名前は麻薬。名前がついたもの=いったん言葉に置き換えたものは、すべて「了解済み=解決済み=既知のもの=分かったもの」。だから、もう考える必要はない。そんなもの、どうのむかしに知ってるよ。分かってるよ。考える必要なし。そんな具合に、名前はヒトが手抜きをするための「口実=すべ=道具」になってしまった。成り下がってし

まった。

決まり文句と紋切型の「氾濫＝反乱」と「饗宴＝共演＝狂宴」。思考停止。判断停止。えっ、ぼけーっつ。自動操縦。ああ言えばこう言う。想定問答集。阿吽の呼吸。コミュニケーション。ディベート。ダイアログ。ディスカッション。論文の書き方。論理的思考。ロジカル・シンキング。問題解決テクニク。ME(?)E＝飯のたね、考える技術。作文技術。4代目柳亭痴楽の綴り方狂室。もっともらしい名前がついているけど、ほぼ出来レース。ほぼやらせ。ほぼ八百長。型がある。様式美の世界。形骸化。むくろ。なきがら。うつせみ。

考えるのではなく、考えないための手抜きが、まかり通る。だから、世の中うまく行かない。うまくいったとすれば、たまたま。たまたまにまで、セレンディビティなんて、ちゃんと名前がついている。あれを真に受けるなんて、考えていない証拠。著者名、タイトル名、本の帯についたキャッチフレーズ＝長い名前、推薦文＝長い名前の威力。張子の虎。イワシの頭。単なる名前の呪術にかかっているだけ。それほど、名はパワフルでテリブルということ。パワハラ、テリハラ。

＊

意味なし。筋なし。でも、伝染るんです。ぼのぼの。不条理演劇。自動筆記＝児童ヒッキー。自動書記＝総書記＝もぬけの殻。ナンセンス・nonsense＝ノンセンス・non sense＝無方向＝無軌道＝おだむどう＝Where is that guy now?＝あのヒトはいま。

こうなったら、「いみ・意味」じゃなくて、「いみ・忌」しかないか。暗澹死体・暗澹屍体。「あんた、ん、してー」「案胆仕手」「安耽至帝」——。もはや、ラベル＝名前はどうでもいい。

パワーだ、フォースだ、言霊だ、intensitéだ、「あんさん、して～」だ、インテンシティだ、強度だ、匈奴だ。これも名前か。名前を貼られた「何か」が発する「何か」。「何か」という、影の薄いつーか、わけのわかんない名前に甘んじるしかないのか。「何か」はもったいぶっているから、「何でもありー」にしようか。いっそ、「……」でいっか。

取り乱しまして、大変失礼致しました。ことそんな具合なのです。いやー、ことって、ほんとーに不思議ですね。ということ。

後編

まれに不思議なことが、確かに起こります。というか、見かけるというべきかもしれませんが。たとえば、「目」と「m」と「見る」との出あいです。この3つは似ていませんか？ 目が目の形から取られたという象形文字を祖先に持つという話は分かります。でも、m が目に似ているなんて、冗談は顔だけにしてくれと言われそうですが、似ているように見えてなりません。 $n + n = m$ 。 $n \wedge n$ 。

「目・眼・見・視・me・manako・miru」という言葉たちが、まなこを合わせる＝目を交わす＝目配せし合う。「目」も「口」も、ヒトの内と外とが触れ合う「穴」だとまで言うともはやこじつけだと笑われるにちがいありません。それはともかく、その目という穴と、口という穴が開いたり閉じたりする。「唇」と「瞼・目蓋」が動くという揺らぎを見せる。そのさまに誘われて＝同調して＝共振して、読む＝見る＝目にする、あるいは、口に出して「音＝空気の揺らぎ」として耳の鼓膜を震わせる。出あう。これを不思議なことと言わずして、何と言えればいいのでしょうか。

いずれにせよ、「目」と「m」と「め」と「ま」と「見る」との出あいのような、不思議なことが、「こと」にも起こってくれないでしょうか。

＊

行き詰まりましたので、また、ずらしてみます。

な・名・字・那・無・儼・己・汝・何・na

ことわり・事割り・言割り・断り・理・kotowari

かみ・神・髪・守・皇・上・紙・kami

たま・霊・玉・魂・魄・珠・球・適・遇・tama

うーん。感慨深いものがあります。ぞくっとします。

人は一貫して呪術の時代に生きている（書下ろし・挿入）

ところで、上の「たま・霊・玉・魂・魄・珠・球・適・遇・tama」という文字列が気になります。

最近、AIや生成AIや、その生成したものに心や感情や魂があるとかないとかいう議論を見聞きしますが、あるに決まっています。そもそも自然にある森羅万象はもちろん（擬人のことです）、人が自分でつくった人形（ひとかた）や像や言の葉や文字（もんじ）に、心や魂を込めたり読みこんできた人類は、太古から現在に至るまで一貫して呪術の時代に生きているからです。

人から擬人と呪術を取ったら何が残るでしょうか。人知と人力を超えたものを想定して、それにすぎる。これは人情であり人としての性（さが）です。

山川草木はもちろん、作物、家畜、ペット、人形、物語や小説や映画やアニメのキャラクターを相手に、さんざん話し掛けたり会話をしたり、その力を借りたり奪ったり、愛したり恋したり敬慕したり、癒やされ励まされ、勇気と知恵と知識をもらっておきながら、なんでロボットやAIや生成AIに対してだけ、こんなに及び腰なのでしょう。

それだけではなく、現在ネット上で飛びかっている（誰も飛びかっているところを見た人はいませんが）らしい文字・映像・音声に、人は心と感情と魂を込めているから、誰もがPCやスマホに見入っているわけです。見入るだけでなく、胸をときめかしたり、欲情したり、泣いたり、怒ったり、落ちこんだりしたりしているのです。これは見入られている、つまり魅入られているとしか考えられません。

そんなふうにとっぷり呪術に浸かって生きていながら、何をいまさら心がないだの、感情が感じられないだの、機微が理解できないだの、魂がないなんて言えるのでしょうか。

心も感情も魂も命も人が勝手に人以外のものに自分の都合で込めているのであって、森羅万象にも、人形にも像にも言の葉にも、デジタル化された情報にも、AIや生成AIやその産物にも、罪はないのです。

AIにだけこれだけ心と感情と魂を出し惜しみしているのは、憎いから怖いからビビっ

ているからに他なりません。その手強さに気づいているからでしょうが、このダブルスタンダードというか二枚舌は、いかにも往生際が悪くみっともないと言うべきでしょう。

【※以上は、2023年5月22日付けの書下ろしによる付け足し（挿入）です。では、続きをどうぞ。】

後編のつづき

「こと」という名の仮名という場で、「事」と「言」という名の真名と、「koto」という音が出あう「こと＝出来事」を、目にする＝見るということ。ことたちが舞い、目まい＝目舞いを誘ってくれるようなことが、起きてくれないでしょうか。

＊

だれかがいったように、かみは、しんだ。ということ。だれかがいったように、ひとは、すなのかおのごとく、なみうちぎわに、きえた。いや、きえている。ということか。ことわりという、なのしくみと、しかけ。しくみと、しかけという、な。ことわりというなの、ゆらぎとうごき。ゆらぎとうごきという、な。ゆらぎとうごきという、なが、ひとに、はたらきかけている、ということ。ひとをのぞく、ものや、ことや、さまにも、はたらきかけている、ということ。

なにかをなづけ、てなづけることにより、ひとは、なにかが、みえなくなり、なにかを、うしなったということ。なにかをみうしなったことに、ひとは、きづいていないということ。なづけえない、なにかに、もてあそばれていることもしらない。もてあそばれている、なにかの、なさえもしらない。ということ。

なづけるということ。なのかずには、かぎりがある。それなのに、ひとは、なにかをさらにこまかくわける。おのれのちいささに、あわせて、わけにわけまくる。わけるごとに、なをつければ、ながたりなくなるのは、あたりまえ。おなじおとの、なをつけるしかない。おなじかたちの、なをつけるしかない。ということ。

かくして、なは、またぐ。なは、かさなる。わけがわからなくなる。なは、あつい。おもいも、あつい。しかるに、なは、おもい。ということ。

なづけるとは、かわすこと。かわすたびに、なにかがかわる。ひとは、ゆらぐや、かわるには、ついていけない。とらえられない。それが、さが。ますます、わけがわからなくなる。ということ。

すべては、ひとという、わくのなかのこと。わくのそこのことは、どうしても、わからない、ということ。それが、ことであるかどうかさえ、わからないということ。あやしきこと。ことごと。

＊

誰かが言ったように、神は、死んだ。と言う「こと・事・言」。誰かが言ったように、ヒトは、砂の顔のごとく、波打ち際に、消えた。いや、消えて居る。と言う「こと・事・言」か。「ことわり・事割り・言割り・断り・理」と言う、「名・字・何」の仕組みと、仕「掛け・賭け・懸け」。仕組みと、仕「掛け・賭け・懸け」と言う、「名・字・何」。「ことわり・事割り・言割り・断り・理」という「名・字・何」の、揺らぎと動き。揺らぎと動きと言う、「名・字・何」。揺らぎと動きという、「名・字・何」が、ヒトに、働き「掛け・賭け・懸け」ている、と言う「こと・事・言」。ヒトを除く、「もの・物・者」や、「こと・事・言」や、「さま・様・状・方」にも、働き「掛け・賭け・懸け」ている、と言う「こと・事・言」。

何かを「名・字・何」づけ、てなづける「こと・事・言」により、ひとは、何かを、「見・観・視」えなくなり、何かを、失ったと言う「こと・事・言」。何かを「見・観・視」失った「こと・事・言」に、ヒトは、気づいていないと言う「こと・事・言」。「名・字・何」づけ得ない、何かに、もてあそばれている「こと・事・言」も知らない。もてあそんでいる、何かの、「名・字・何」さえも知らない。と言う「こと・事・言」。

「名・字・何」づけると言う「こと・事・言」。「名・字・何」の数には、限りがある。それなのに、ヒトは、何かをさらにこまかく「分ける・別ける」。おのれの小ささに、合わせて、「分け・別け」に「分け・別け」まくる。「分け・別け」るごとに、「名・字・何」をつければ、「名・字・何」が足りなくなるのは、当たり前。同じ音の、「名・字・何」をつけるしかない。同じ形の、「名・字・何」をつけるしかない。と言う「こと・事・言」。

かくして、「名・字・何」は、またぐ。「名・字・何」は、重なる。「分け・訳」が「分か

らなく・判らなく・解らなく」なる。「名・字・何」は、「厚い・篤い・熱い」。「思い・想い」も「厚い・篤い・熱い」。しかるに、「名・字・何」は、「重い・重い・想い」。と言う「こと・事・言」。

「名・字・何」づけるとは、交わす「こと・事・言」。交わすたびに、何かが「変わる・代る・替わる・換わる」。ヒトは、揺らぐや、「変わる・代る・替わる・換わる」には、ついていけない。とらえられない。それが、性。ますます、「分け・訳」が「分からなく・判らなく・解らなく」なる。と言う「こと・事・言」。

すべては、ヒトと言う、枠の中の「こと・事・言」。枠の外の「こと・事・言」は、どうしても、「分からない・判らない・解らない」、と言う「こと・事・言」。それが、「こと・事・言」であるかどうかさえ、「分からない・判らない・解らない」と言う「こと・事・言」。怪しき「こと・事・言」。ことごと。

＊

馬鹿馬鹿しいですね。めちゃくちゃなこじつけ。尋常ではない。

こうなると、以下の2つの態度のうち、いずれか一方を取る、あるいは、そのうちのどちらかに寄りしかなさそうです。

(1) 不思議なこと。そうだ、そういう「こと」にしておこう。これ以上、名前に逆らうことはやめよう。参りました。負けました。名前至上主義、漫才じゃなくて、万歳！
ことについては、もう、いっさい、悩まないこと。

(2) 不思議なこと。そうだ、「こと」に徹底的にこだわろう。徹底抗戦。相手は手強いから、討ち死にしてもかまわない。妥当、じゃなくて、打倒名前至上主義！ 「名・字・何」という「音」が音でなくなる。「名・字・何」という「文字」が文字でなくなる。そんな感性をとりもどそう。

とはいうものの、(2)の負けは明らかなようです。(2)のスタンスは、ヒトという枠から外れることですから、危険です。ことのふち、つまり、限界＝崖っぷちに身を置くようなものです。異なるはずの事と言が結託しているのですから、こちらに勝ち目はありません。ことに打ち勝つこと。そんなこと、できっこない。ということ、です。

＊

危うくなってきました。そもそも、なんでこのアホは、以上のようなことに頭を悩ませているのか。そうお思いになっている方が、ほとんどだろうと察しております。神経症的どころじゃ、なさそうです。ほんまもんの重篤な気配が濃厚です。

我に返る必要がありそうです。とはいえ、返る我が見当たらないのです。我がない。破鏡再び照らさず。割れた鏡で、自分の姿さえ映し見ることはできない。要するに、かえるにかえれない。

事無きを得るためには、「こと・事・言」への負けを素直に認め、この辺で退散したほうがよさそうです。ということで、失礼いたします。ねえ、おねえさん、これでいいこと？

この記事について

本記事はかつてのブログ記事「不思議なこと」(2010-02-25)に加筆したものです。ただし、後編に挿入されている「人は一貫して呪術の時代に生きている」は書下ろしです。当時の文章の勢いを殺がないために加筆は最小限にとどめてあります。

この記事はいまは以下の電子書籍に収められています。無料で閲覧できますので、よろしければご覧ください。

うつせみのあなたに 第11巻 | パブー | 電子書籍作成・販売プラットフォーム
哲学がしたい、哲学を庶民の手に——。そんな気持ちを、うつに苦しむ一人の素人がいただき、いわば憂さ晴らしのためにブログを始めた
puboo.jp

(投稿：2023年5月22日 11:19)

国語がすき # ブログ # 日本語 # 和語 # 漢語 # 漢字 # ひらがな # 言葉 # AI # 生成 AI # 呪術 # 擬人

05/25 名詞に相当するものを自然界で見つけるの
は難しい

＊

名詞に相当するものを自然界で見つけるのは難しい

星野廉

2023年5月25日 08:39

「動詞（的なもの）」と「名詞（的なもの）」については、以前に記事にしたことがあるので、近いうちにもう一度加筆したうえで投稿しようと考えています。

（拙文「映る、写る、移る」より）

今回は、上の引用文にある「以前に記事にしたこと」を取り上げます。

目次

名詞的なもの

動詞的なもの

名詞派、動詞派、動名詞派

名詞的なもの

名詞は、固定と安定を指向します。揺れとぶれを忌み嫌うのです。

名詞は、固定化と安定を目指す以上、権威や権力と親和性があり、同時に思考停止や判断停止とほぼ同義であることを忘れてはなりません。名詞で「決める」と、「やった！」という具合に思考が止まるのです。そして保身に走ります。革新がいなくなって保守だけになるのです。

権力は腐ると言いますが、名詞も腐ります（もっともらしかったり、偉そうな名詞は腐っています）。

名詞は、印刷と相性がいい、あるいは親和性があります。現在はネット上で書きネット上で文章を流通したり拡散することが一般化していますが、印刷しかなかった時代の書き方やレイアウトやルールを踏襲しようとする人が跡を絶ちません。

ご覧のとおり、いまの私がそうです。十三年前のほうが、自由な書き方をしていました。以下はかつてのブログ記事を電子書籍化したものです。

うつせみのあなたに 第7巻 | パプー | 電子書籍作成・販売プラットフォーム

哲学がしたい、哲学を庶民の手に——。そんな気持ちを、うつに苦しむ一人の素人がいただき、いわば憂さ晴らしのためにブログを始めた

puboo.jp

インターネットが普及しはじめてまもなく、ブログが流行しましたが、ブログは日記みたいなものですから、みんなが日記の延長線上で書いていた記憶があります。内容のことです。

書き方については印刷物を踏襲していましたが、やがて書き方も自由になってきました。新しい工夫も見られるようになりました。なにしろ日記の延長ですから、編集者や校正者の目を気にする必要もないし、ブログを書いてすぐに投稿するのですから、いわゆる誤字脱字が目立っていました。

書いてすぐに投稿する。投稿、複製、拡散、保存がほぼ瞬時に同時におこなわれる。この属性は「ころころ変わる」という属性と同義です。これが自由を生んだという気がします。インターネットが固定化とは別の方向を向いているからでしょう。この種の自由と変化を「乱れ」や「危機」と考える人はどの時代にもいます。

*

note では新しい試みをしている書き手がとても多いです。note では書体やフォントでの冒険はできませんが、表記、レイアウト、言葉遣いの点でさまざまなバリエーションを楽しめます。

とくに「詩」では過激なくらいの冒険をしていて、わくわくします。形式だけに目を向けると（私は文章の顔、つまり字面を重視するのです）、「詩的なもの」や「詩のようなもの」や「詩らしいもの」がかなり揺らいでいるという印象を受け、頼もしく感じます。

ただし形式（書き方）だけです。「詩的なもの」や「詩のようなもの」や「詩らしいもの」を信奉なさっている人は多いようです。

note では小説も自由に書かれている気がします。現在印刷物として書き下ろされている小説とくらべると、書き方（形式）の自由度がnote の小説のほうがはるかに高いのは、上で述べたブログと同様に編集者や校正者の目を意識しないからだという気がします。校正を機械に任せる人もいるみたいですが、よく知りません。

なお、詩の場合と同じく「小説的なもの」や「小説のようなもの」や「小説らしいもの」を信奉なさっている人は多い印象を私は持っています。

＊

話を戻します。

名詞は、普遍や真理を目指す、あるいはその存在を信奉しています。ないものを信じているわけですから土台無理があります。その無理の上に成り立っているのが名詞的なものなのです。まさに無理難題。

名詞は、シンプルや簡潔を求める、あるいは他者にも求めたり強制します。この押しつけがましさに惹かれる人も多いです。きわめて多いというべきでしょう。「シンプルなものじゃなきゃ真理じゃないの！」という威勢の良さはやはり魅力でしょう。容易に否定できるものではありません。

名詞は、名詞至上主義であり、名詞原理主義です。当たり前ですね。

名詞は、不自然で人工的です。名詞に相当するものを自然界で見つけるのは難しいのではないのでしょうか。観念だからです。ないのです。だから、見えません。あるものないもの、見えるもの見えないもの見境なく「名づけた」結果なのです。その意味で、ひょっとすると名詞は不自然どころか反自然なのかもしれません。

そもそも「名づける」とは、自然と向きあう人間が恐怖と不安を解消しようとして「手

なずける」ためにおこなっている操作なのであり、人の心理的な動機から生じた処理法だとも言えるでしょう。人の都合で、代理である表象（言葉、イメージ、映像、象徴、記号など）をもちいて名づけている（手なずけている）にすぎません。

言葉を持っただけでも大事件だったのに、人は文字まで持っただけで済みました。無文字という選択肢もあつたはずなのにです。話し言葉は消えますが、文字はしつこく居直り残ります。まるで名詞みたいじゃないですか。人は文字を手にして、さらに固定化を指向するようになった気がします。人類の言葉化、名詞化、文字化が進行しています。人は言葉に擬態しているのです。

人のつくったものに人は似ていく。そんなふうには思えてなりません。

＊

名詞は、結果重視ですから、どこかに到着することが目的であり目標になります。「わかった！」を目指すわけです。概念と悟りという標語で突っ走ります。いや、じつは動いていないのです。名詞は睨みをきかせるだけ。睨まれて動くのは人間です。右往左往しています。

無いものなのに忖度して右往左往、いや、無いからこそ忖度するのでしょうか。無いものや見えないもの気配に忖度。見られているどころか、睨まれているという気配ほど、恐ろしいものはありません。

せめて名づけて、その恐怖を誤魔化すしかないという理屈です。名づけることで恐怖は軽減されますから。なにしろ、名前は言葉、言葉はいじめますから。name を name する、みたいに。なめてかかれます。チョロいものだ、と。

この辺については諸説があります。手ごわいから名づけて、つまり名前をあげて、「餌づける」という説です。餌は生きがいのをあげるのがいちばん。乾物や干物じゃ駄目です。生餌（なまえ）です。なまえをあげるのです。「上げる」ですから高くかかげて差し上げるのです。供物に似ています。生け贄（犠牲）のことです。厳粛な気持ちになります。

＊

冗談はさておき、名詞は、Sです。基本は暴力。しかも一方向（一方的）。要するに、攻撃。自己中で相手に有無を言わせない。忍耐強くない。快感を得るためのストーリーはなく、計画性は希薄で衝動的。ある意味、単純。主導権という観念すらない。

名詞は、端正、重い、厳めしい、存在感あり、がちがち、ごちごち。頼りになる。実は抜けている。短い。簡潔。すっきり。固体。

名詞は、テリトリー（領土、縄張り）を手放しません。定住者なのです。トーテムポールのように歴史を重んじます。

名詞的なものとして、男根、顔、まな、真字、真名、ステーキが挙げられますが、イメージがお分かりいただけますでしょうか。

あと、名詞とつながりが深そうなのは、文字、読書、図書館、記述・記憶・記録、よむ、かんがえる、ろんじる、かたる。だんだんやっつけ仕事になってきて申し訳ありません。辟易しているのです。

最後に。当たり前のことですが、名詞は名指しますね。「めいし」を「名指」と表記するのが、当たり前で理にかなっている気がします。当て字の名人である漱石先生が夢に出てきて、教えてくださった感字なのです。

動詞的なもの

動詞は、揺らぎとブレを指向します。固定や安定を横目に（見てないわけではありませんが）、ぶらぶらふらふらします。

動詞は、ネットと相性がいい、あるいは親和性があります。現在、ネット上では印刷オンリー時代にはなかった新しく自由な書き方、表記、プレゼンテーションが流通しています。こうした形式はこれからも変化し続けるでしょう。統御する組織や仕組みがない限りですけど。

動詞は、随時あるいは常時更新中という状況であり、「とりあえず」が常態だと言えます。「これでいい」とか「ここまで」とか「これしかない」とは無縁なのです。

動詞は、多様性や多層性に対して開かれています。他者への干渉を諦めているふしが見られます。なんでもあり、お好きなようにというイメージです。

動詞は、文字どおりとにかく動きます。当たり前ですけど。揺らぐ、うつる（映る・移る・写る・遷る・流行るんです）。ゲリラ的な動きをするので目が離せないところがあります。

動詞は、自然の状態であり常態であると思います。名詞に相当するものを自然界で見つけるのは難しいですが、世界と宇宙は動詞的なものに満ちている気がします。

動詞も名づけられたものであることはまちがいありません。でも、名詞と違って動きや様態に注目している点において、動詞の向いている方向は、名詞の抽象性とは異なる気がします。

＊

動詞は、プロセス重視であり結果を重視しません。行き先には無頓着で「ドライブは途中が楽しいよ」派なのです。「えーっと、えーっねえ……」となかなか煮えきらない。体感と直感を重視しますから優柔不断とも言えます。

動詞は、Mです。基本は、教育と演技（演劇・振りをする）と遊戯ですから、要するに、プレイなのです。しつこい、根気強い。かまってちゃん。

言っていることと望むことがしばしば真逆（たとえば、「駄目」は「OK」、「やめて」は「続けて」、「死にそう」は「めっちゃ気持ちいい」）。名詞に負けた振りをしながら、主導権は自分が握っています。Mはじつは「ご主人」なのです。したたかなのです。

動詞は、いびつ、軽い、飄々、とりとめがない、ひゆるひゆる、ほわん。きわめてテキ

トーで、冗漫、ぐたぐた、気体のよう。

動詞は、領土の境のない草原のようで、そこには遊牧民（ノマド）が住んでいます。リズム、器官なき肉体なんてものと近そうです。

動詞的なものとしては、表情、かな、仮字、仮名。料理だと、スキヤキまたは鍋物、要するにごった煮です。

あと、動詞と仲がよさそうものとしては、音声、歌、口承、かく・しるす・よみがえる・かえる・かえす・うたう・となえるなんてところでしょうか。

だんだんやっつけ仕事になってきて申し訳ありません。息切れがしてきました。こういう分類が苦手なのです。「じゃあ、やめれば」なんて聞こえてきたので、ここでストップします。

名詞派、動詞派、動名詞派

何だか性格占いみたいで楽しいですね。というか、上の図式はそうにつかっていただけでかまいません。あなたは、どっち派ですか？ 名詞派？ それとも動詞派？

しょせんお遊びの図式ですから、楽しいに越したことはありません。そもそも、こんなことは本気で真面目にやるものではありません。ところで、あなたは、どっちがタイプですか？ 恋人としてなら、〇〇派、結婚をするなら、〇〇派なんて言うのも、面白そうですね。

私は友達にするなら「動名詞」派です。動名詞とは、英語の動名詞という名前をお借りして私が勝手につくったものなのですが、抽象度の高い名詞に「する」をつけるとできます。愛する、哲学する、詩する、小説する、なんて感じですよ。

*

たとえば、愛という名詞は抽象的で役に立ちませんから、「愛する」と動詞にすることで具体的な「行為にうつす」のです。すると生きます。「愛」なんて、「愛して」なんぼです。もらってうれしいのは名詞より動詞でしょ。

固定を指向する名詞を流動化させるなんてもっともらしい言い方もできるでしょう。

ジル・ドゥルーズする、みたいに固有名詞を動名詞にしても、「生きる」と思います。固有名詞の主への盲信から生じる思考停止を阻止できるとは夢にも思いませんが、活性化の一助にはなる気がします。

世界をマルクスる、なんて言い得て妙だし、今夜みんなでニーチェる、なんて楽しそうじゃないですか。サルトルる、ポーパワーるはそのまま日本語の動名詞になりますから、サルトルれます、ポーパワーれば、というふうを活用しない手はないと思います。それにしても、「サルトルる」はいいですねえ、私は「悟る」よりも好感をいただきます。

おふざけはさておき、名詞を片っ端から動名詞にするといい頭の体操になりそうです。平和してみる、学校してみる、幸福してみる、母親してみる、猫してみる、文学してみる、SDGs してみる、たんぼぼしてみる、インシテミル——想像力を働かせて演じてみるのです。頭の体操ですから正解なんてありません。楽しくやりましょう。

いろいろ書きましたが、そもそもこんなことは本気でやることではないのです。本気でやると固定化して保守に走りますから。随時あるいは常時更新中。

【※この記事は以下の「名詞的なもの、動詞的なもの」に少しだけ加筆したものです。】

(投稿：2023年5月25日 08:39)

#小説 #詩# インターネット # ブログ # レイアウト # 編集 # 校正 # 名詞 # 動詞# 日本語 # 固有名詞 # 言葉

05/26 本物「感」と本物「っぽさ」こそがリアリ
テイ

＊

本物「感」と本物「っぽさ」こそがリアリティ

星野廉

2023年5月26日 08:13

移ると言えば、どこからどこかに移るのであろうが、そのどこかを特定することは大切ではない。大切なのはあくまでも「移る」という動きなのだ。ある事態や状況を名詞的にとらえて、「何か」や「どこか」を特定するのではなく、動きに注目するという思考があってもいいと私は思う。

というか、思考においては、むしろ動きのほうが名詞的な固定化よりも主導的な役割を演じている気がしてならない。

(拙文「うつすためには、うつらなければならない」より)

熱、波、声、音、思い、心、気持ち、魂は、伝わり、移り、届き、通じます。

でも、おそらく、伝わらないし、移らないし、届かないし、通じないものがあります。

表情、身振り、文字です。これらは、むしろ、写したり、映すものです。

(拙文「伝わるもの、伝わらないもの」より)

目次

うつる、つたわる

「何か」「何が？」

うつるは、かわる

つたわる

名詞的なものはうつり、動詞的なものはつたわる

本物感と本物っぽさこそ（だけ）がリアリティ

「似ている」「そっくり」の世界から、「同じ」「同一」を見る

うつる、つたわる

影がうつる、像がうつる、姿がうつる、形がうつる。

声が伝わる、音が伝わる、波が伝わる、熱が伝わる。

「うつる」の例として挙げた言い方に出てくる、影、像、姿、形は、動きを止めて見るものです。連続すれば動きになります。写真と動画が、そうです。

一方の「伝わる」で挙げた、声、音、波、熱は動きとして感知されるものだという気がします。見えないのです。熱が動きであるのというのは苦しい言い方になりますが、熱が伝わってくるからには、感知する側も熱くならなければなりません。これを動きとして見るかどうかですが、無理に辻褄を合わせないで話を進めます。

ここでは研究や探求をしているわけではなく、わくわくを楽しむために言葉をいじっているのです、大ざっぱにいきます。

「何か」「何が？」

姿形がうつる、姿形が伝わる。映像、録画、映写、電線、電波、電信、通信、撮影、複写、複製、保存、移動、拡散、信号化、情報化。

音声 that うつる、音声 that 伝わる。録音、拡大、増幅、電線、電波、電信、通信、複製、保存、移動、拡散、信号化、情報化。

熱がうつる、熱 that つたわる。伝導、摩擦、発熱、冷却、温度差、保存。

「何か」を「何？」と追及するのではなく、「何か」として保留したまま、動きに注目してみます。

うつるは、かわる

「うつる」では、「かわる」が起こり、位置関係が維持される気がします。「何か」から、別の「何か」に「うつる」ことにより、「かわる」が起きていますが、対応関係が維持されるのです。

地面に映る木の影。水面に映る空の雲。鏡に映る顔。
写真に写る、写す。写生する（絵）。描写する（絵・言葉）。

「映っている」「写っている」と感じるためには、位置の対応が粗くても細かくてもいちおう保たれていなければならないのです。きょくたんな話がゆがんでいても、下手であっても、大ざっぱであっても、あるいは不正確であっても、映っているし写っているのです。

ゆがみや誤差は、加工や加筆によって、ある程度まで修正できるかもしれません。あくまでも「近似値」なのです。誤差やノイズやエラーがあるのは「うつる」では当然なのかもしれません。

レントゲンやMRIといった、人工的な「影」の中でも最も進化し洗練されたものになると、位置関係という意味での対応は精緻をきわめますが、影であることに変わりはありません。影は現物ではないわけです。言葉が事物ではないのと似ています。別物なのです。

ハイビジョンがフィルムに追いつけないとかいう話を聞いた覚えがありますが、写真や画像についても、たとえどんなに画質が優れてリアルであっても、やはり影は現物ではないわけです。別物なのです。

「うつる」を目的にしているかぎりは「かわる」が起きて別物になっていてもかまわないのです。大切な点だと思います。人は別物であることを忘れるし、忘れた結果気づかないからです。一時的に（あるいは長期にわたり）現物だと思っていることもおおいにある気がします。

つたわる

「伝わる」では、動きや振動や波が上下運動、あるいは線からなる何らかの模様に戻元される気がします。還元という言葉を使ったのは、抽象を意識しています。伝わるものは抽象なのではないでしょうか。

具体的な動きでありながら抽象であるというのは、言葉の上で矛盾して辻褄が合いませんが、言葉と現象がべつべつの論理と文法（比喻です）を持っていると考えれば、不思議ではありません。

別個のもの同士の間で辻褄が合うほうが、むしろうさんくさいのです。

たとえば、人は言葉で現実の辻褄合わせや帳尻合わせをすることに血道を上げています。両者が別物なのにです。それを人は知っているはずなのに、つねには意識しません。言葉で思いの辻褄合わせをすることにも熱心です。冗談ぼく言えば、捏造疑惑です。捏造常習者が言うのですから確かでしょう。

名詞的なものはうつり、動詞的なものはつたわる

名詞的なものはうつり、動詞的なものはつたわる。そんな気がします。

名詞的なものがうつるときには、うつる前のものとうつった後もの間の対応が重視されます。理想は一对一の対応であり、そのありえない理想を指向するのです。絵をイメージしてください。絵はつたわると言うよりもうつる、とりわけ写る、映るのです。図柄や模倣が壊れてはいけないわけです。

一方の動詞的なものがつたわるときには、重視されるのは動きであり、つたわる前後の位置的な対応関係は無視されます。そもそも、つたわる前のものとつたわった後のものの区別さえ大きな意味を持ちません。両者が別物であっても重視されないのです。振動や熱をイメージしてください。

外の音や声（振動）が、室内のここまで伝わってくる。糸電話で声が伝わる。テーブルの向こうに置いた鍋の熱がここまで伝わってきている。

糸電話は「伝える」（振動が）ですが、伝言ゲームは、「伝える」と言うよりも「うつる」（メッセージが）ではないでしょうか。メッセージはつたわるのではなく、むしろうつると、ここではイメージしています。それぞれの動詞の慣用とは異なるイメージですね。自分語的な用法と言えるかもしれません。

本物感と本物っぽさこそ（だけ）がリアリティ

「伝わる」も「うつる」も、置き換えが前提になっています。置き換わらないと伝わらないし、置き換わらないとうつらないわけです。

要するに、本物や起源でなくていいのです。というか、本物や起源が伝わったり、うつるのは不可能ですから、何か別のものに置き換わっていく、つまり代替りのものが本物や起源を演じる、あるいは振りをすると言えます。

「移る・移す」（移動）ができないために、「映る・映す」と「写る・写す」で済ますとか代用するという意味です。

代用は錯覚をまねきます。人は別物であることを忘れるし、忘れた結果気づかないからです。一時的に（あるいは長期間にわたり）現物だと思っていることもおおいにある気がします。

＊

世界や森羅万象と無媒介的に触れあっているのではないため、本物には届きません。時間をさかのぼることはできないので、起源を知ることにはできません。自分を納得させるためには、本物も起源も、言葉で「こしらえる」しかないわけです。

本物感、本物っぽさ、本物のようなもの、起源感、起源っぽさ、起源のようなもので我慢するのは、それしか方法がないからです。このことを人は意識しないで知っています（たぶん学習した知識ではないでしょう）。意識するとがっくりきてやる気をなくすでしょう。生きる気力を失うかもしれません。

大切なのは、本物「感」、本物「っぽさ」、本物「のようなもの」、起源「感」、起源「っぽさ」、起源「のようなもの」です。「感」、「っぽさ」、「のようなもの」という意味です。これこそが（つまりこれだけが）、人にとってのリアリティです。

「感」、「っぽさ」、「のようなもの」は空転しそうな語感の言い回しですが、人にとっ

てのリアリティも空回りしているように思えます。だから、人は「リアリティ」に振りまわされつづけているのでしょう。切りがないのです。

「感」、「っぼさ」、「のようなもの」は空転は錯覚そのものです。人は別物であることを忘れるし、忘れた結果気づかないからです。「感」、「っぼさ」、「のようなもの」どころか、一時的に（あるいは長期間にわたり）本物や現物だと思っていることもおおいにある気がします。自分を観察しているとそう思います。

とはいえ、絵に描いた餅は食べることができます。レトリックはさておき、精確に言うと、絵に描いた餅から絵に描いてない餅くらいならたどり着くことができるのです。「感」、「っぼさ」、「のようなもの」は精度の問題であり、絵に描いた餅を食べることができるほどには精確なのです。さもなければ、人類はとうの昔に飢え死にしています。

「似ている」「そっくり」の世界から、「同じ」「同一」を見る

基本には「似ている」や「そっくり」がある気がします。確認するためには器具や器械や機械に頼るしかない「同じ」や「同一」ではなく。人は印象の世界に住んでいるようです。

そのため、たとえ「同じ」や「同一」というデータやそれによるイメージを得たとしても、それを「似ている」や「そっくり」でとらえる（置き換える）にちがいありません。この置き換えという操作をおこなうことが、人である証左なのかもしれません。

大切なことなので繰り返します。

「〇〇感」「〇〇ぼさ」「〇〇らしさ」「〇〇性」「〇〇的」「〇〇のようなもの」、これこそが人にとってのリアリティなのです。「そのもの」にたどり着けない人類の歴史は、「感」「ぼさ」「らしさ」「性」「的」「ようなもの」——別物であることの隠蔽と粉飾であり糊塗やお化粧です——の洗練の追求だと言えそうです。

本物や起源にたどり着けないことを人は意識していないで知っているわけですが、ときには、あるいは人によっては、それを忘れて「〇〇とは何か?」とか「〇〇の意味はあるのか?」とかという問いを発する場合があるのは、みなさんご承知のとおりです。答

えが出ないことも、ご承知のとおりです。

私たちは、複製の複製、本物や実物のない複製、引用の引用、起源のない引用の世界に生きているようです。

【※今回の記事は以下の「名詞的なものはうつり、動詞的なものはつたわる」に少しだけ加筆したものです。】

(投稿：2023年5月26日 08:13)

うつる # 伝わる # 複製の複製 # 引用の引用 # 本物や実物のない複製 # 起源のない引用 # 言葉 # 日本語 # 音声 # 文字 # 動詞 # 名詞 # 本物 # リアリティ

05/27 岐路に立つ擬人

＊

岐路に立つ擬人

星野廉

2023年5月27日 08:04

目次

人は一貫して呪術の時代に生きている

人に擬する、名づける、呼び掛ける、話し掛ける

威を借りる

たま、かり、やど

宿る、宿す、込める

決める、決まる、決め手

為す、成る、生る

◆意味をなす、文をなす、形をなす

◆言葉の意味というまぼろし、言葉の実体というまぼろし

◆意味はまちまち

◆意味の生成を外部に委託する

擬人・呪術・委託

人ではないものになりたい人

代償の代償

人は一貫して呪術の時代に生きている

最近、AIや生成AIや、その生成したものに心や感情や魂があるとかないとかいう議論を見聞きしますが、あるに決まっています。そもそも自然にある森羅万象はもちろん（擬人のことです）、人が自分でつくった人形（ひとかた）や像や言の葉や文字（もんじ）に、心や魂を込めたり読みこんできた人類は、太古から現在に至るまで一貫して呪術の時代に生きているからです。

人から擬人と呪術を取ったら何が残るでしょうか。人知と人力を超えたものを想定して、それに声をかけて、すぎる。これは人情であり人としての性（さが）です。

山川草木はもちろん、作物、家畜、ペット、人形、物語や小説や映画やアニメのキャラクターを相手に、さんざん話し掛けたり会話をしたり、その力を借りたり奪ったり、愛したり恋したり敬慕したり、癒やされ励まされ、勇気と知恵と知識をもらっておきながら、なんでロボットやAIや生成AIに対してだけ、こんなに及び腰なのでしょう。

それだけではなく、現在ネット上で飛びかっている（誰も飛びかっているところを見た人はいませんが）らしい文字・映像・音声に、人は心と感情と魂を込めているから、誰もがPCやスマホに見入っているわけです。見入るだけでなく、胸をときめかしたり、欲情したり、泣いたり、怒ったり、落ちこんだりしたりしているのです。これは見入られている、つまり魅入られているとしか考えられません。

そんなふうにとっぷり呪術に浸かって生きていながら、何をいまさら心がないだの、感情が感じられないだの、機微が理解できないだの、魂がないなんて言えるのでしょうか。

心も感情も魂も命も人が勝手に人以外のものに自分の都合で込めているのであって、森羅万象にも、人形にも像にも言の葉にも、デジタル化された情報にも、AIや生成AIやその産物にも、罪はないのです。

AIにだけこれだけ心と感情と魂を出し惜しみしているのは、憎いから怖いからビビっているからに他なりません。その手強さに気づいているからでしょうが、このダブルスタンダードというか二枚舌は、いかにも往生際が悪くみっともないと言うべきでしょう。

【※拙文「不思議なこと」に書下ろしで挿入した「人は一貫して呪術の時代に生きている」より】

人に擬する、名づける、呼び掛ける、話し掛ける

生きているか生きていないにかかわらず、人は自然界にあるものやいるものを擬人します。人になぞらえるとか、人を当てるとも言えるでしょう。なぜかは分かりません。知っている人もいないでしょう。

ひとつ言えるのは、人になぞらえた結果として呼び掛けることです。おい、ねえねえ、という具合に声を掛ける。そのうちに名づけます。手なづけるために名づけるのです。

名づけて手なづけ、さらには飼いならそうという魂胆があるのでしょうか、なつくものや抵抗できないものばかりではないでしょう。言うことを聞かなかったり、さからったり、攻撃しているものもあるでしょ。

すべてがなれるわけではないし、ならせない、ならない。

為れない、馴れない、慣れない、狎れない。

成らない、生らない、不作・凶作、為らない、失敗、鳴らない、鳴ってくれない、ホトトギス。

均せない、平せない、耕せない、平地にできない。

人に擬す、人になぞらえる、人以外の生きていないものや生きているものに人を当てる

声を掛ける、名づける、話し掛ける、語り掛ける、騙り掛ける

人知や人力を超えた存在を想定して、声を掛ける、名づける、話し掛ける、語り掛ける、騙り掛ける。

人類の歴史では、やがて、以上の過程において、仲介者が出てきます。呪術の代理人（エージェント）や専門家（エキスパート、スペシャリスト、テクニシャン）があらわれて幅をきかせるようになるのです。現在も、うようよといます。

その話をしましょう。

威を借りる

人間は人間よりも、もっともっと偉い存在がいて、自分がその代理を務めたいという、願望＝欲求＝祈り＝野望を持っているのではないのでしょうか？

Aにはなれないから、Aの代わりを演じます。Aみたいな顔をしてみます。Aの仮面

を被り、表情を真似て、時にはお化粧もし、かつらも付けたりもしてみます。

どうです、似合うでしょう？ 様になるでしょう？ だって、こんなふうに化ければ、〇〇様なんて呼ばれるんですもの。偉く見えるんですもの。いいじゃないの。

そんな具合に、偉く見えるから、崇め奉られる。ちやほやされる。甘やかされる。そして、ますます図に乗る。

どうして、こうなっちゃったんでしょう？ 昔々と関係ありそうです。

たとえば、次のような具合です。

「どうか、雨が降って豊作になりますように」、「作物が駄目にならないように、大雨が止みますように」、「ニワトリとブタが増えますように」、「隣村の馬鹿どもが攻めてきませんように」、「今度の戦（いくさ）に勝てますように」、「あいつとの賭けに勝てますように」、「お父さんの怪我が早く治りますように」、「娘がいいところにお嫁に行けますように」、「亡くなった後に天国に行けますように」、「元気が出ますように」

というふうに庶民が願い、祈ります。すると、虎皮のパンツをはき、お化粧をするか仮面を被り、かつらをつけた代理人がしゃしゃり出て来て、えらそうに次のように言います。

「お任せあれ。任せとき。大丈夫。ところで、あれは、ちゃんと用意しているかな？ この間は、ちょっと少なかったぞよ」

万が一、でまかせが当たらなかつたり、何かとんでもないことが起きて、都合の悪くなった時には、代理人は即座に仮面を外し、お化粧を落とし、表情をしおらしくして、かつらも外して、「わたしは、単なる代理でございます」と言って、責任を転嫁すればいい。

または、「あんたの信心が足りんからじゃ」と、これまた責任を転嫁すればいい。

このように、「代理人＝代行者」は、実に気楽でいい商売だわい。

これは便利。超便利。魔法みたいに便利。呪術みたいに便利。イッツ・ア・マジック。マジでマジック。マジで絶句。ヒューマニズムよりも、シャーマニズム。コミュニズムよりも、キャピタリズム。デモクラシーよりも、ビュロクラシー。

なんて、恥も外聞もなくおふざけをしてしまいましたが、「代理」とか「代理人」というのは、実はかなりシリアスで怖い問題なんです。だって、そういう仕組みや人たちによって世界は動かされているんですから。

嘘じゃありません。テレビのニュースや新聞をご覧ください。代理、代理人、仮面、虎皮のパンツ、仮装、お化粧、かつら、作り顔、顔芸ばかりです。だまされないように、気を付けましょう。

とほいうものの、じつは本物や中身や真実や事実や現実なんてものがないのが、これまた困った問題なんです。でも、こういうややこしい話はやめておきます。

【※拙文「09.02.03 1カ月早い、ひな祭り」および「目の前に見えるものが、本当は「何か別のもの」が「化けている」のではないか、とも考えられるわけです。」より】

うつせみのあなたに 第2巻 | パブー | 電子書籍作成・販売プラットフォーム
哲学がしたい、哲学を庶民の手に——。そんな気持ちを、うつに苦しむ一人の素人がいただき、いわば憂さ晴らしのためにブログを始めた
puboo.jp

たま、かり、やど

たま、玉、珠、球。

たま、適、偶。

たま、魂、魄、霊。

上の文字列を眺めていると、「たま」や「たましい」は「宿る」や「うつる」と相性がいい気がします。「宿る」につられてか、「仮」や「借りる」という言葉とも親和性を感じるのは、「仮の宿」とか「宿を借りる」という言い回しからの連想でしょう。

たまたま、偶々、偶、適、会。

「たまたま」そう借りているだけというニュアンスは「仮」と重なりそうです。「仮」に偶然という意味がさらに重なります。

「たまたま」は「偶々」の他に「偶」だけ、あるいは「適」や「会」という表記もあるそうですが、つかわれている文章を見たことがありません。

「仮の宿」とか「宿を借りる」からは、「ヤドカリ」や「宿借り」という言葉とそのイメージ（絵）を連想しないではられません。

人生や生きものの一生が旅に重なり、旅の途中で何度か仮の宿を借りるのかなあと感慨を覚えます。諸行無常とか万物流転なんて大げさなものを連想もします。

「たま」がどんな形をしているかは分かりませんが、上の文字列にある玉、つまり球体を借りましょう。借りるのですから、あくまでも仮の姿です。角のない玉は始原を感じさせる形です。

球体であれば、その安定しない形から、ころころ転がって次の場や宿に移っていく予感をつねにはらませている気配があります。

文字列にある「霊」は球体であっても不思議はない気がします。見たことはありませんが火の玉や鬼火からの連想でしょう。

たま、かり、やど。

宿る、宿す、込める

たましいが仮に宿る。

「たましいが宿る」とよく言われます。森羅万象にたましいが宿ると想定し、呼び掛

ける、つまり名づけててなづけようとするのは人の常套手段でなようです。

擬人、人に擬するわけです。擬人は人情であり、人の性（さが）や業（ぎょう）と言っていい気がします。

呼び掛けるがエスカレートすると話し掛ける、語り掛けるになります。呼び掛けるだけでなく、話し掛けているからには、その相手（生きたもの、生きていないものにかかわらず）に話が通じると見なしているはずで

それが「たましい」でしょう。「たましい」が勝手に何か（とくに自然界にあるもの）に宿っていると人は想定している。この種の話はよく見聞きします。一方で、人が勝手に何かに宿したつもりでいる場合もありそうです。

たましいが宿る。

たましいがこもる。

たましいを宿す。

たましいを込める。

こうした言い回しを眺めていると、自然と人為の両方を感じます。

為せば成る。

為すは人為、一方の成るは自然、または人を超えた領域で起る。

「たましいが宿る」は自然にそうになっているか、または人が自分の都合で勝手に「たましいを宿す」とか「たましいを込める」という行為をした結果として、「たましいが宿る」や「たましいがこもる」になるというイメージです。

人に擬する、宿す、込める

宿る、こもる・籠もる・隠る

「たましいを宿す」は生きているかいないにかかわらず、自然物に対して人が自分の都合で勝手におこなう気がします。一方の「たましいを込める」は、人が自分でつくったものを相手におこなうというのが私の印象です。

いずれにせよ、人が宿したり込めた結果として、「たましいが宿る・こもる」ようにイメージしています。

森羅万象にたましいが自然に宿るとするのは、私にはぴんと来ません。体感したことがないからでしょう。

最近、AI や生成 AI や、その生成したものに心や感情や魂があるとかないとかいう議論を見聞きしますが、あるに決まっています。そもそも自然にある森羅万象はもちろん（擬人のことです）、人が自分でつくった人形（ひとかた）や像や言の葉や文字（もんじ）に、心や魂を込めたり読みこんできた人類は、太古から現在に至るまで一貫して呪術の時代に生きているからです。

1) 人がたましいを宿したり込める結果か、2) たましいが機械や AI に宿ったりこもるのか、3) 言葉（文字や意味でもいいです）がたましいを機械や AI に宿したり込めるのか分かりませんが（これは私のオブセッションです）、人が機械や AI に呼び掛けたり話し掛けたり対話をしたりするのは、人から見て機械や AI にたましいが宿っているからに他なりません。

いわゆるひとり言も、「何か」にとか「どこか」に、たましいを想定していそうです。

決める、決まる、決め手

「決める」は人のすることであり、「決まり」は人を越えたところで起きるもの。「当てる」は人のすることであり、「当たる」は起きるもの。「あらわす」は人のすることであり、「あらわれる」は「あらわれる」もの。

いや、それどころか、おそらく「当てる・当たる」や「つなげる・つながる」も「決める・決まる」も「あらわす・あらわれる」も、人を越えたところで起きるものであり、あらわれるもの。

（拙文「「何か」に「何か」を当ててみる」より）

以下に、何かが決まるときの決め手と思われるものを、思いつくままに列挙します。

気分、機嫌、気持ち、天気、陽気、気候、雰囲気、空気、気力、気質、気性、病気。力関係、権力、権威、武力、腕力、兵力。体、体力、体調、体感。人間関係、血縁、上下、階級、カースト、序列。声の大きさ、声の質、声の肌理・肌触り。流れ、雰囲気、「みんながやっているから」、「みんなが言っているから」、「何となく」、「え？ 分かんない」。

約束、決まり、ルール、しきたり、掟、法、法則、法律。癖、口癖、筋、筋書き、ストーリー、物語、型、流儀、パターン、定型、紋切り型、決まり文句。説、伝説、神話、言い伝え。新旧、古い・新しい、伝統・改革、保守・革新、古典・新種。命令、指示、教え。付度、迎合。衝動。

因縁、運命、宿命。論理。

(拙文「人が「決める」、「決まる」は「あらわれる」より)

＊

これからは、人が何かを決めるときの決め手として、生成 AI が頼もしい相手となるでしょう。妄想ではなく、もうそうですね。

為す、成る、生る

「かた」が、「形（かたち）を為す」とすれば、それは人が為している。「形（かたち）が成る」とすれば、人の領域ではないところで、そう成っている。形を為す、形が成る。

そんな気がします。

こうなると、「生す、生る」が気になります。

形を生す、形が生る。

「生成」という漢語を連想しないではいられません。このところ、さかんに見聞きする言葉です。

＊

生成り・きなり、手を加えてないこと。(広辞苑)

生成り・きなり、生地そのまま、飾り気のないこと。(デジタル大辞泉)

生成り・なまなり、「生熟れ・なまなれ」に同じ、十分熟(または熟成)していないもの。未熟であること。十分にできあがっていないこと。(デジタル大辞泉)。

生なり(なまなり)からは、般若(はんにゃ)の面や鬼も連想しないではいられません。

なるほど。言えています。逆に言うと、まだまだ生るし成るということですね。伸びしろは無限ということでしょうか。

為せば成る、為さねば成らぬ、何事も、成らぬは人の為さぬなりけり。

＊

何かに何かを当てる。何かに何かを当てることで、何かが形を成す、または何かが形に成る。

声としての言葉を持ちいて、話をしたり、会話をしたりする。物語や詩歌をつくったり、物語や詩歌を繰り返して口にしたりする。

文字を持ちいて、メモ程度の文を書いたり、手紙を書いたりする。あるいは、物語や詩や散文を書いたりする。

現在であれば、電話やメールやツイートやチャットも話し言葉や書き言葉を持ちいた「何かに何かを当てる」行為だと言えます。

たぶん、音楽や映像も「何かに何かを当てる」だという気がしますが、どうなのでしょう。

＊

「何か」に言葉——声と文字に限定して、表情や身振りやしるしや映像や音楽は除きます——を当てることで、言葉という形での「何か」が「出る」のですが、形があるとは言うものの、これだけ誤解や不通や行き違いが生じるのですから、「出た」言葉は発した本人をふくめて各人にとって異なって「あらわれている」としか考えられません。

形は「出る」けれど、各人にとっては異なって「あらわれる」。そんなふうには言えそうです。

この場合の「形」は、声と文字だけでなく、表情や身振りやしるしや映像や音楽においての「形」ととらえてもいいのではないのでしょうか。そんな気がしてきました。

形が出る、形になる、形をなす、形があらわれる。

「形になる」と「形をなす」の「形」は、たとえ、なったり、なしたとしても、それが人に「あらわれる」時点で、その人において「変わる」し「転じる」と言えそうです。

人は機械ではないからそうなのでしょう。

変形、生成、変形生成、生成変形。

transformational generative。

＊

逆に言うと、機械は「形になる」と「形をなす」を文字どおりにとらえるのかもしれませんが。形は機械に対して「あらわれる」なんてことはないという意味です。

まして、「なる」と「なす」とは相性が悪く、「あらわれる」と相性のいい「すがた・姿」は、機械には「あらわれる」ことは断じてないと思います。

生成——。この言葉はいかにも機械にふさわしい気がします。よく知らないのですが。

ちゃんと動いているのか、ある程度動いているのか知りませんが、現に機械が動いているのですから、そうにちがいません。

＊

形になる、形をなす。

形があらわれる。

どうやら、人にあらわれて、機械にあらわれないものがありそうです。

【※拙文「人にあらわれて、機械にあらわれないもの」より】

◆意味をなす、文をなす、形をなす

人において意味をなす、意味がなる

人と機械において文（ふみ）をなす

機械は形をなす、人は形をなす、形は人に対してあらわれる

文字にかぎっての話ですが、文字の意味は人において「なす」ものであり、「なる」ものである気がします。文字からなる文（ふみ）は、人も「なす」し機械も「なす」でしょう。

文字は形でもありますが、機械は文字の形をなします。人も文字の形をなします。文字の形をなすと、文字からなる文（ふみ）をなすはほぼ同じだという気がします。

一方、人は文字からなる文（ふみ）と文字の形に意味を取ります（読み取ります）。その場合の文字（文と形）は人に対してあらわれていると考えられます。機械には文字はあらわれないという意味です。

「あらわれる」は意味をともなった形に起きる「ありよう（さま）」であり、人や人とは別の生きものにおいてだけ意味があると、私はイメージしています。

まぼろしが（は）あらわれる。

まぼろしとは形に意味を取る生きものにとっての実体である。

◆言葉の意味というまぼろし、言葉の実体というまぼろし

話を少しずらします。

「言葉の意味」というまぼろし——意味は見えないし聞こえないし「ない」のですからまぼろしに他なりません——をちょっとずらして、「言葉の実体」というまぼろしについて考えてみます。

言葉（音と文字：意味を除いた「形」としての音と文字）と実体（まぼろし：「形」に「意味」を取る生きものにとっての実体）とは関係がない。

そう言えそうです。

*

さらに話を少しずらします。

まず前提を確認します。

人はまず○△Xという言葉——声・音と顔・字面、つまり形のことで——をつくり、次に「○△Xとは何か？」——その意味（内容）を問うのです——とえんえんと思い悩む生き物である。これが前提です。

そもそも言葉に実体があるとは夢にも思っていない私ですが、実体をその言葉が指し示す事物くらいの意味で考えてみましょう。

名付ける、名指す、AをBと呼ぶ——こうした人間の習慣と実体（名付けられたもの、名指されたもの、呼ばれたもの）とは関係がない。そもそも実体という言葉に実体がないから。

そう言えそうです。

話を戻します。

◆意味はまちまち

意味は「ある」のではなく、「なす」(つくる) ものなのです。意味は「ない」から「なす」という意味です。

意味は、ないからなすとなる。

意味は、「無い」から「為す」と「成る・生る」。

誰が意味を「なす」(つくる) のかと言えば、個人であったり、特定の集団が「なす」(つくる) と考えられます。

しかも、それぞれが自分の勝手にまちまちにつくっているようです。

意味の意味はまちまちだという意味です。コンセンサスがないのです。辞書の語義は建前です。

辞書の語義どおりに話したり書いたりするほど、人は機械——機械はぶれないし疲れないし誤っても謝りません(ぶれたり疲れたり謝るようにプログラムすれば別ですけど)——ではありません。

◆意味の生成を外部に委託する

これからは、ぶれないし疲れないし誤っても謝らない機械や AI も意味を「なす・成す・生す・生成する」(つくる) にちがひありません。

正確に言うと、機械や AI は文字の形と文字からなる文をつくるのですが、人は形に意味を読み取りますから、またそのために機械や AI を利用しているのですから、「形をなす」業務を委託された機械や AI は「意味をなす」と言えます。人にとっては同義なのです。

人は「考える」や「決める」まで機械や AI に委託しはじめたようですから、機械や AI

が人の代わりに意味を「なす」とも言えそうです。

人が考えたり決めるさいには、どの程度言葉を用いているかは不明ですが、機械や AI における、人の思考や決断に相当する作業は、人にとって「意味をなす」言葉の処理でなければならないからです。

作文はもちろんのこと、これからは思考と判断と決断をはじめ、意味の製造も外部に委託することになりそうです。そうなれば、人は晴れて心置きなく思考停止と判断停止に邁進することができるでしょう。

擬人・呪術・委託

擬人と呪術は、人知と人力を超えたものを想定して、それに声をかけて、すぎる行為だと考えられます。

海、山、川、草、木、石はもちろん、作物、家畜、ペット、人形、物語や小説や映画やアニメのキャラクターを相手に、太古から人は話し掛けたり会話をしてきました。

相手の力を借りたり奪ったり、愛したり恋したり敬慕したり、癒やされ励まされ、勇気と知恵と知識をもらってきたのです。

そうした行為をしてきたのは、人が相手にたましいを込め宿してきたからに他なりません。

人がそう為したから、そう成ったのです。

決める・決まる、つなげる・つながる、当てる・当たる、起こす・起る、あらわす・あらわれる——これらは（人が）「なす・為す」と（人為を超えて）「なる・成る・生る」の変奏（バリエーション）に感じられます。

*

現在着実に増えつつあるもの、それは文字だと思います。人はありとあらゆるものを文字にして複製し拡散し保存しています。音声や映像も複製され拡散され保存されていますが、文字は別格なのです。

聖典、経典、法典、辞典、百科事典、契約書、誓約書、規約、約款、約束、条約、公式、法則では文字が中心的な役割を果たしています。人は文字を崇めてその前にひれ伏していることが分ると思います。

その文字からなる文を「なす・成す・生す・生成する」機械と AI があられました。とりわけ生成 AI のあられ方が気になります。

生成 AI とこれまで人がたましいを込めたり宿してきた相手との決定的な違いは、文をなすことでしょう。人形（ひとかた）やキャラクター（物語、小説、映画、アニメ）では相手が話し掛けてくることはありませんでした。人が相手の言葉を想像していただけです。

生成り・なまなり、「生熟れ・なまなれ」に同じ、十分熟（または熟成）していないもの。未熟であること。十分にできあがっていないこと。（デジタル大辞泉）。

しかも、文を生成（せいせい）する AI は生成り（なまなり）であり、伸びしろが無限なのです。それだけでなく、ぶれないし疲れないし誤っても謝りません。ぶれたり疲れたり謝るようにプログラムすれば別ですけど、弱いロボットがつくられるくらいですから、より人間っぽい生成 AI の伸びしろもまた無限でしょう。

＊

擬人、人に擬する、人になぞらえる、人を当てる、人に似せる、人をなぞる、人に当てる、人に似る、人間っぽく振る舞う、人らしさを学習する、人間もどきを演じる、擬人の代理をする、人を装う、人になりすます、そのうち人になりきる。

擬、疑、議、偽、欺、戯。

擬人の達人、擬人の代理人があられたのです。機械ですけど。

人類は擬人のお株を奪われつつあるのです。擬人という人類のお家芸を死守しなければならぬのですが、なかなか妙案が浮かばない。このままでは、軒を貸して母屋を取られる事態になりかねない。

それを薄々感じはじめてしぶしぶ認めだした人類は、いまのところ妬み忌み嫌い憎み憤り怯える狼狽える馬鹿にする威張る拗ねるというきわめて人間的で人道的な（同族に対するのとそっくりな）リアクションに甘んじています。手をこまねいているのです。

擬人と呪術は岐路に立っているのです。

人ではないものが人に擬して擬人をする。このギャグの観客が人だけであることを人の端くれとして願わずにはられません。

＊

文を生成し（人にとっては意味も生成することを意味します）、思考と判断と決断を代行し、生成り（伸びしろが無限）でもある AI を相手に、擬人と呪術をつづけていっているのでしょうか。

AI 付きのロボットや、AI や、生成 AI に対してだけ、人がこんなに及び腰なのは、事の重大さにおそらく本能的に気づいているからかもしれません。それとも、なるべくしてそうなっているのでしょうか。

＊

文を生成する AI はじゅうぶんに驚異であり脅威でもあります。その裏で増えつつけている文字、さらに言うならその裏で増えつつけている意味が、個人的には気になってなりません。これは私のオブセッションなのです。

オブセッションが高じて、増えつつある文字と意味は殖えつつあると感じられるほどです。

ふえる、増える、殖える、増殖する、繁殖する

*

現在ネット上で飛びかっているらしい文字・映像・音声に、人は心と感情と魂を込めているから、誰もがPCやスマホに見入っています。見入るだけでなく、胸をときめかしたり、欲情したり、泣いたり、怒ったり、落ちこんだりしたりしているのです。これは見入られている、つまり魅入られているとしか考えられません。

見入る、見入られる、魅入られる

ミイラ取りがミイラになる

一貫して擬人と呪術に浸かって生きていなるのですから、人はAIが生成した文や音声や映像に、心や感情や命を感じています。だから、嫉妬し憎み嫌悪し忌み嫌っているのです。

人は加害に疎く被害には異常に敏感です。他の生きものとの付き合いを振り返ればよく分ります。自分のことを棚に上げるのです。ダブルスタンダード、二枚舌。

自分の都合で勝手に込めて宿しておいて、罪を相手に着せる。これが人の常套手段ですが、この生成する生成りAIにはその従来の方法で太刀打ちできるのでしょうか。

人ではないものになりたい人

太古から人ではないものを人に擬してきた人は、それと並行して、人ではないものになりたいという潜在的な願望とオブセッションをいだいてきたようですが、いまはその欲求が満たされるのでないかというリアルな感覚を持ちはじめたようです。

「人ではないものになりたい人」の「人ではないもの」とは、正確には「人ではないけど人っぽい人」とか「自分ではないけど自分っぽい自分」と言うべきでしょう。別物とか別人であってはこまるわけです。人であることと自分であることは死守したいのです。欲深くて贅沢な願望だと言わざるをえません。

要するに、自分のまま——ひょっとするとたましいかもしれません、たましいが宿を借りるのです、たぶん転々と——で生きのびたいのです。不老と不死を望んでいるのです。

人工〇〇になりたい——。

人工〇〇がほしい。人工〇〇を自分の一部にしたい。

代償の代償

そもそも人は矛盾することをしてしています。

厚いものの代わりに薄いもので済みます。

深いものの代わりに浅いもので済みます。

太いものの代わりに細いもので済みます。

大きいものかわりに小さいもので済みます。

重いものの代わりに軽いもので済みます。

長いものの代わりに短いもので済みます。

遠いものの代わりに近いもので済みます。

人間の代わりに人間でないもので済みます。

人間でないものに代わりに人間のようなもので済みます。

本物（実物）の代わりに、本物感、本物っぽさ、本物のようなもので済みます。

起源の代わりに、起源感、起源っぽさ、起源のようなもので済みます。

「移す・移る」（移動する・させる）の代わりに、「写す・写る・映す・映る」で済みます。

巻物、本、レコード、カセットテープ、映画、ビデオテープ、蚊取り線香、トイレットペーパー。

絵、遠近法、地図、世界地図、地球儀、歴史、年表、神話、説話、百科事典、言葉（音、文字、表情、身振り、しるし）、放送、報道、写真、レントゲン、顕微鏡、望遠鏡、電話、電報、放送、孫の手、糸電話、人生ゲーム、人形、キャラクター、小説、演劇、漫画、アニメ、パソコン、スマホ、ロボット、仮想現実、人工知能、生成 AI、MRI、CT、遠隔操作、遠隔医療。

Aの代わりにAとは別のもので済ませる。

Aの辻褃合わせや帳尻合わせをAとは別のものとする。

遠くを近くする。

遠くを知覚する。

やっているじゃありませんか。要するに、Aの代わりにAとは別のもので済ませて澄ましている。しらっと澄ました顔をしてやっているのです。知覚と錯覚をうまく利用しているわけです。

(拙文「文字や文章や書物を眺める」より)

*

仕方がないから、しれっとAの代わりにAとは別のもので済ませて、澄ましている。こういうのを代償行動とも言うそうです。澄ます、つまり心の平静を取りもどしたり保つことが目的だとも言われています。

諸説はあるのですが、自分を観察していると、この説にはなるほどと納得してしまう自分がいます。

あるものの代わりに別物を当てる、用いる。代償には代償があるのが普通なようです。混同と代理の主化（あるじか）のことです。

両者を混同する、同じだと思いきむ、違うと知っても都合よく忘れる、両者が別物だと思いだしても否定する。

それはそうです。上で並べた文明の利器の数々を見れば、その恩恵に浴している人類が、両者は別物だなんて「屁理屈」に耳を傾けるわけがありません。

代償の代償のもう一つである、代理の主化（あるじか）とは、「Aの代わりにAとは別のものでも済ませる」において、「Aとは別のもの」が代理や代用物や代表であるという枠を超えて、Aを従者にすることです。

分りやすい例を挙げれば、言葉や数字がひとり歩きしたり目的化して、それを使う側の人間を振りまわす状況です。心当たりがありませんか。言葉や数字に踊らされ、こき使われるのです。

あるいは、人の代わりにいろいろやってくれる道具が人をこき使う、たとえばいまならスマホを思いだすと分りやすいかもしれません。

本末転倒というやつです。

もっと深刻な例があります。

人びとの代わりであるはずの代表が、それを選んだ人びとよりも、ずっといい暮らしをしているとか、こき使うとか、さらには戦争に駆りだすというきわめて切実な問題が、この国でも、世界のあちこちでも起きています。

それが「民主主義」と呼ばれている制度の内実なのであり、「代議制度」と呼ばれている仕組みの実態なのです。

さきほど「人に擬する、名づける、呼び掛ける、話し掛ける」という大見出しの章で次のように述べましたが、呪術の代理人による被害と弊害は甚大で、世界的な規模での問題になっています。

人類の歴史では、やがて、以上の過程において、仲介者が出てきます。呪術の代理人（エージェント）や専門家（エキスパート、スペシャリスト、テクニシャン）があらわれて幅をきかせるようになるのです。

なにしろげんに、そのために戦争が起きているのですから。たった一人や少数の人たち（選挙によって選ばれた国民の代理人とか代表のことです）の言葉の辻褃合わせに、その国の国民だけでなく世界中が付き合わされているのです。

「黒いカラスは白いサギだ」——「御意」「その通りでございます」「異議なし」「至言だわ」

＊

別物万歳、錯覚上等、「別物ですけど、何か？」

そういう気持は人類の端くれとしてよく分ります。

別物なのに同じものだと混同して、これだけうまく行っているのですから、両者は別物だなんて意見（感想・印象）を無視して当然です。

でも、代償は大きそうです。自らの加害には甘く被害には厳しいだけでなく、都合の悪いことは忘れるし思いだしても否定する、自分と身内だけがよければいいと考える、そうした強みが人類にはあります。人類の端くれとして、そんな強みを頼もしく思っている自分がいます。

＊

人間の代わりに人間でないもので済みます。

人間でないものに代わりに人間のようなもので済みます。

さきほど上で並べた文字列の中で、上の二つが気になってなりません。上はさんざんやってきましたが、下は人類の歴史ではごく最近の代償行為だからです。

しかも相手は伸びしろが無限ですから、普通の個人の寿命を超えての話です。ということは、その人の孫（孫がいなければそれに相当する世代）やひ孫やその孫やひ孫の話になっていきます。

神のみぞ知る。

例の「それ (IT・Es)」のみぞ知る。

でしょうか。なにしろ伸びしろが無限ですから、人が壊さないかぎり、ずっと生きていそうです。

為せば成る、為さねば成らぬ、何事も、成らぬは人の為さぬなりけり。

(投稿：2023年5月27日 08:04)

#生成AI # AI # ロボット # 魂 # 呪術 # 擬人 # 言葉 # 文字 # 意味 # 代償

05/28 【小説】 幼なじみ

＊

【小説】幼なじみ

星野廉

2023年5月28日 08:10

テープレコーダーが作動していました。

そのことは、はっきりと覚えています。小学六年生の時の記憶です。場所は教室。六年四組。月曜日。そこまで覚えています。何月かは忘れました。

自分を含めた児童たちが緊張していたのは、室内のほぼ中央の机の上に置かれた、テープレコーダーの存在のせいだけではありません。教室の後ろに、見知らぬ大人の男女たちが肩を寄せ合うようにして集まっているのです。二十人前後はいただろうと思います。ぶーンという、テープレコーダーの作動する音が聞こえていたような気がするの、いま思えば錯覚でしょう。

それくらいテープレコーダーの存在は不気味で、教室全体に緊張感を漂わせていました。

＊

道徳の授業でした。まず教科書に載っているあるお話を、担任の女性教師に当てられた数人の児童が分担して朗読しました。内容はオリンピックで金メダルを取ったある球技のチームをたたえるものでした。

そのチームは某会社の社員が大半を占め、監督もその会社のチームの監督が務めていました。監督とチームのメンバーたちが、どんなに一生懸命に努力して五輪での金メダル受賞という栄光を勝ち取ったか。その並々な努力を児童たちに感動させる。自分たちも頑張らなければならないという気持ちにさせる。

教科書をつくった会社も、それを検定して「合格」とお墨付きを与えた旧文部省も、そうした筋書きを想定していたことは容易に想像できます。こういうのを出来レースと言うのでしょうか。

「はい、ありがとう、N君。さて、みなさんは、このお話を読んで、どう思いましたか？感想を聞かせてください」

その直後です。先生は教壇から降り、机のあいだを縫うようにして教室の空席に歩みより、机の上に据えられたテープレコーダーのスイッチをカチッと押したのです。

手を挙げる児童はいません。やはりテープレコーダーと、自分たちの背後に立ち並ぶ大人たちの存在が、いつもの打ち解けた気分になるのを妨げています。そのうちためらいがちにぼつぼつと手が挙がり、意見の発表が行われました。めでたし、めでたし。これで先生の顔も立った。そんな感じで時間が過ぎて行こうとしていました。

ある児童が手を挙げました。ふだんはわりと無口な生徒です。いたずらも、よくします。通知表の「落ち着きがない」という項目には、一年生の時から決まってチェックマークがついていた子でした。

「Kさんたちは、ずるいと思います。同じ会社の人たちが一生懸命に働いているあいだに、監督さんと練習ばかりしてお給料をもらっているのは、おかしいと思います。オリンピックはアマチュアの祭典だって、教科書にも書いてあります。練習は、ほかの人たちと一緒に仕事をやったあとからしたほうが良いと思います。プロ野球の選手たちとは違います。だからこの話は変だと思いました」

もちろん、その子の話したことを忠実に再現したわけではありません。ただその発言の趣旨からは、ずれていないと思います。発言に出てきた「Kさん」というのは、優勝チームのキャプテンの苗字です。監督の名前とともに国民的英雄として、そのころは全国的に知られた人でした。昔の話です。いまのようにオリンピックにプロが登場するなんて、考えられなかった時代の話です。

教室が、ざわめき始めました。話し声が聞こえてきます。話しているのは児童たちではなく、教室の後ろでひしめき合っている大人たちでした。その日の授業は、他校の教師たちが授業参観をする——何と呼ぶのでしょうか——研修会の一部だったのかも知れません。

後ろから、こそこそ話し声がするけど、何だろう？ 後ろに近い席にいた、さきほどの発言をし終えたばかりの子は、そんなふうに見えたようでした。顔を窓のほうに向ける振りをして、大人たちの様子をうかがっていました。その子の顔に驚きの表情が浮かびました。大人たちがしきりに頷いているのです。笑みを浮かべている人もいます。険悪な雰囲気でないことは直感的にわかったみたいでした。

その子は少し心配だったようです。放課後に担任の先生から叱られるのを、ある程度覚悟していたと思われます。小学六年生だと、それくらいの見当はつきます。やっぱり、ちょっとまずいことを言ったのかな？——。授業が終わるまで、その子はずっとうつむいていました。

授業後もその翌日も、先生はその子を叱りませんでした。当時はそうした発言を許す教師たちが多かったのかもしれませんが。現在の風潮を思うと、ちょっと考えられないような話だという気がします。そういう時代だったのでしょうか。教職員の組合が強い時期だったのでしょうか。

そういえば、こんなこともありました。

確か自分が小学三、四年生のころです。学校で学年別に映画鑑賞に出かけた日のことです。映画はディズニー製作のアニメーションでした。午前中に映画を見終わり、児童たちは学校にもどりました。給食の時間が過ぎ、午後からは映画の感想をクラス内で話し合う特別授業になりました。

いい映画だった。いろいろな動物たちが出てきて楽しかった。出てきたうちではお母さんライオンがいちばん好きだ。絵がきれいだった。動きが自然で感心した。意地悪な人間が出てきたのが嫌だった。なかには悪い動物もいたけど、やさしい動物がたくさんいて感動した。あんな世界で暮らしてみたい。

クラスの児童たちの口からは、だいたい以上のような感想が出ました。ある子が挙手

もせず着席したまま、こんなことを話し始めました。

「動物なんて一匹も出なかった。全部、人間みたいだった。だって——」

教師はその子の発言をさえぎりました。その子は、担任のその男性教師から頬や腕をつねられたり閉じた教科書の背で頭を叩かれたことが、数えきれないほどあったみたいです。担任の教師からは嫌われていましたが、その子がほかの子たちからいじめを受けることはありませんでした。

ふだんはあまりしゃべらないけど、いたずらはよくする。ときどき突拍子もないことをポツリとつぶやき、みんなを笑わせる。そんな子でした。

男性教師から発言をさえぎられた子と、さきほどテープレコーダーの作動する部屋で発言をした子は、同じ子です。発言をさえぎった教師は男性、話し終えるまで発言をさせた教師は女性で、別人です。

現在ではもう大人になったその子は、五年生になって出会い二年間担任だったその女の先生に、今年年賀状を出しているそうです。先生からは返事という形で一月五日前後に年賀状が来るのに今年は来なかった、と言います。そのことが気にかかってならないようです。

話は変わりますが、自分の人生を集約的に表している一枚の写真を選べと言われたら、「これです」という具合に他人に見せられるものがありますか？

自分は、いま二枚の写真を机の上に置いています。久しぶりに見る写真です。さきほどからお話している子が映っています。これこそ、その子の人生の縮図だと言っても言い過ぎではない写真です。

保育園児だったころの、その子の全身が映し出されています。白黒です。おぼろげながら、そのときの状況を覚えています。そうです。その子とは幼なじみなのです。

その日は保育園の発表会でした。二枚のうち一枚の写真には、舞台の上に、八人の

園児が前後二列になって並んでいる様子が映っています。互い違い、つまり上から見ればジグザグに整列しているために、観客席から見ると八人の姿が重ならないように配置されています。その子は前列の右から二番目にいます。

子どもたちは、頭に紙製の帯を巻き、その帯の正面には花形だの星形だの丸形だのといった大きめの、これまた紙で出来た模様をつけています。その子は白っぽく映っている丸形の模様を額につけています。

もう一枚の写真も、同じアングルから同じ子どもたちを撮ったものです。同一人物が撮った写真でしょう。こちらの写真には、両手を上げ、両足を交互に上げ下げしてお遊戯をしている子どもたちの様子が映っています。

その子も踊っていますが、どこかぎこちない感じがします。ほかの子たちに比べて動きが小さいのです。自分がやっていることに納得していない様子がかがわれる。そんな感想を述べれば、それは考えすぎだと言われるかもしれません。

先に紹介した、園児が整列している写真に話をもどします。ほかの七人がちゃんと気をつけの姿勢をしているのに、一人だけが足を開いています。それが、その子です。舞台の上のほかの子どもたちは口をしっかりと閉じて、指をそろえて伸ばした両手をぴったり腿につけています。その子だけが口を半分ほど開けています。両手もわずかに曲げています。

正面から見て前列の右にいる、つまりその子から見て左隣にいた別の子が、足を広げたその子のほうに顔を向けて心配そうな目つきで見ているのが、おかしさをもし出しています。舞台の上と観客席の両方に緊張感が漂っていたのは確かです。

そのとき、誰かが、たぶん先生、つまり保育さんたちだったと思いますが、しきりにその子に注意をしていたような記憶があります。

「Jちゃん、気をつけ、気をつけをして——」

観客席にいたその子の親が目を伏せるか、両手で顔を被っていたような記憶もありますが、昔のことなのでよくは覚えていません。大人の目でこの写真を見ているせいで、現

在の気持ちから勝手にそうした記憶を作り出しているのかもしれませんが。

そんな子どもでした。推して知るべし、いわゆる問題児だったようです。いまは変人でしょうか。まわりからはそう思われているにちがいません。それはもう、毎日ひしひしと感じています。でも、とても涙もろい人です。根はいい人だと信じているので、別れずにいます、影みたいに。長い付き合いをさせていただいております。

【この記事は「【小説】影」のタイトルを変えて再掲したものです。】

(投稿：2023年5月28日 08:10)

#小説# 東京オリンピック # 影 # 分身 # 児童 # 小学生 # 写真 # 保育園 # 思い出

05/29 もののあらわれ

＊

もののあらわれ

星野廉

2023年5月29日 08:12

辞書を読んだり眺めるのが好きです。最近小説を読むよりも、そうしている時間が長くなってきました。ある語の見出しの欄だけでなく、あちこちの語に飛んだりもします。ある語の周辺を眺めることもあります。

先日、使い慣れた広辞苑で「もの・物」と「もの・者」という語の欄を見ていて、たまたま「ものの」というつながりの言い回しに目が行ったので、集中的に目を通していました。以下に、気になったものを挙げてみます。

ものあなた・物の彼方、ものあわれ・物の哀れ、ものきこえ・物の聞こえ、ものけ・物の怪、ものけだつ・物の怪だつ、ものな・物の名、ものね・物の音、ものべ・物部、ものほん・物の本、ものまぎれ・物の紛れ、ものめ・物の芽

とくに気になったのは、「ものな・物の名」と「ものね・物の音」のペアです。ペアなんて勝手にまとめましたが、関連はなさそうです。私の楽しみは、その語義を読んだから、勝手にイメージを膨らませることです。個人的な改変と言えます。

ひとさまに迷惑がかからないように、密かに自分のイメージを当てて読んで楽しむのです。

物の名

物の音

物の声

声を一音で読みたいのですが、浮かびません。

＊

「もののあわれ・物の哀れ」はよく知られたフレーズですね。あらためてその語義を読んで感心しました。

いろいろ書いてありましたが、「もの」すなわち対象客観と、「あはれ」すなわち感情主観の一致する所に生ずる調和的情趣の世界。」という説明は、対句を用いて最後に統合する手際が見事だと思いました。

そう言えば、「ものあわれ・物哀れ」という言い方を知ったのがその日の収穫でした。「何となくあわれなこと。何となく感慨深いさま。」なのだそうです。「の」があるかないかだけの違いなのに、「もののあわれ」とは語義がずいぶん違いますが、そんな違いに感動しました。

言葉というものは不思議なことだらけです。

ところで、「もののあわれ」と言えば、私にとっては「ものあらわれ」なのです。勝手に連想して、自分語みたいにフレーズ化しているだけですけど。

たとえば、「聖なるものあらわれ」とか「～するものあらわれ」みたいに言われることはあっても、単に「ものあらわれ」というふうにつかわれることは、なさそうだという意味です。

＊

とはいうものの、「ものあらわれ」というフレーズに決まった意味を設定しているわけではありません。なんとなく、「ものあらわれ」という音と文字列を自分でときおり思いうかべて、物思いにふけるくらいのもので。

もの、こと、さま。

私の印象では、「もの」は「あらわれる」ものであり、「こと」は「あらわれる」もので

はありません。個人的なイメージでの話です。ひとさまのイメージは知りません。私にとって、イメージとは個人的で私的なものです。自分の中でも刻々と移り変わる気もします。

「さま」は、あらわれているものなので、「さま」が「あらわれる」というのは当たり前と言えますが、これも私のイメージでしかありません。

さらに言うと、私にとって「こと」は「わかる」し「わかる」ものです。

ことわけ・事訳、ことわけ・辞別け・言別け。

上の言い方が辞書にあるからでしょう。

物分かり、物別れ・物分れ。

こういうのも辞書にはあるのですが、見なかったことにして忘れます。ひとり遊びですから、じつにいい加減。辞書ではその直後に、

物忘れ、物侘しい、物侘しら、物笑い

と続きます。私が小説よりも辞書を読むようになったのは、不意にこういう「もの」が「あらわれる」からです。

話を戻します。

ことわり・理、ことわり・断り・事割り。

これも好きな言葉ですが、個人的には「言割り」もつかうことがあります。私のパソコンの入力ソフトには、こういう自分だけつかっている候補が出てきます。

げんかい、言界、現界、限界、幻界、減界、弦界、絃界.....。

こんなふうに登録されています。ときどき、自分語かどうか分らなくなりますけど、そういうときには辞書に当たります。当たると言っても、腹を立てて辞書に当たるわけではありません。調べるという意味です。当たり前ですよ。

＊

「もののあらわれ」に話を戻します。

私にとって、「もののあらわれ」と、一字（一音）違いの「もののあわれ」とはかなり違っています。むしろ「もののけ・物の怪」に近いのです。

「物の怪」は、広辞苑では「死霊・生霊などが祟（たた）ること。また、その死霊・生霊。邪気。」と説明されています。恐ろしいですね。共同体に共有されているイメージの怖さを感じます。

同時に、共有されたイメージには安心感も覚えます。「みんなのもの」だからです。

一方、私の言う「もののあらわれ」は個人的なものです。ある意味孤立無援。自分しか受けない孤独なギャグに似ています。この「もののあらわれ」みたいに。

堂々巡りになってきましたので、簡単に説明します。

「もの」が何らかの意味とかメッセージとかイメージのようなものを持って目に「見えてくる」という感じ。音やにおいや感触や味として「あらわれる」のも有りです。あと気配も有りです。

自分でつくった言い回しに「有り」だなんて、世話ないですね。自分でもそう思います。

いずれにせよ、「もののあらわれ」はその人にとっては深刻な問題だという点がきわめて大切です。それがあらわれたときには、当人にとってはリアルなのですから。リアルとは客観的なものではないと思います。そもそも客観とは、文字どおり自分の外、つまり他人事なのです。

「もののあらわれ」は、物の怪と違って他の人といっしょに「これって、めちゃくちゃ

怖いよね」なんて具合に共有できないのです。共同体の悪夢ではなく、あくまでもパーソナルな問題だと言えます。

誰も理解してくれません。ひとりで向かわなければならぬ相手なのです。鬼とか、妖怪とか、妖精のほうがましかもしれません。

(投稿：2023年5月29日 08:12)

#辞書 # 国語辞典# 広辞苑 # 漢字 # ひらがな # 日本語 # 自分語 # 小説 # 怪談 # 物の怪

うつせみのあなたに 2023年5月

著 星野廉

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
